

14.5-126



\*1200600722075\*



大正十二年十二月

史蹟名勝天然紀念物調查報告

第二輯

大分縣史蹟名勝天然紀念物調查會

陽族賣  
函  
号  
冊



始





目次

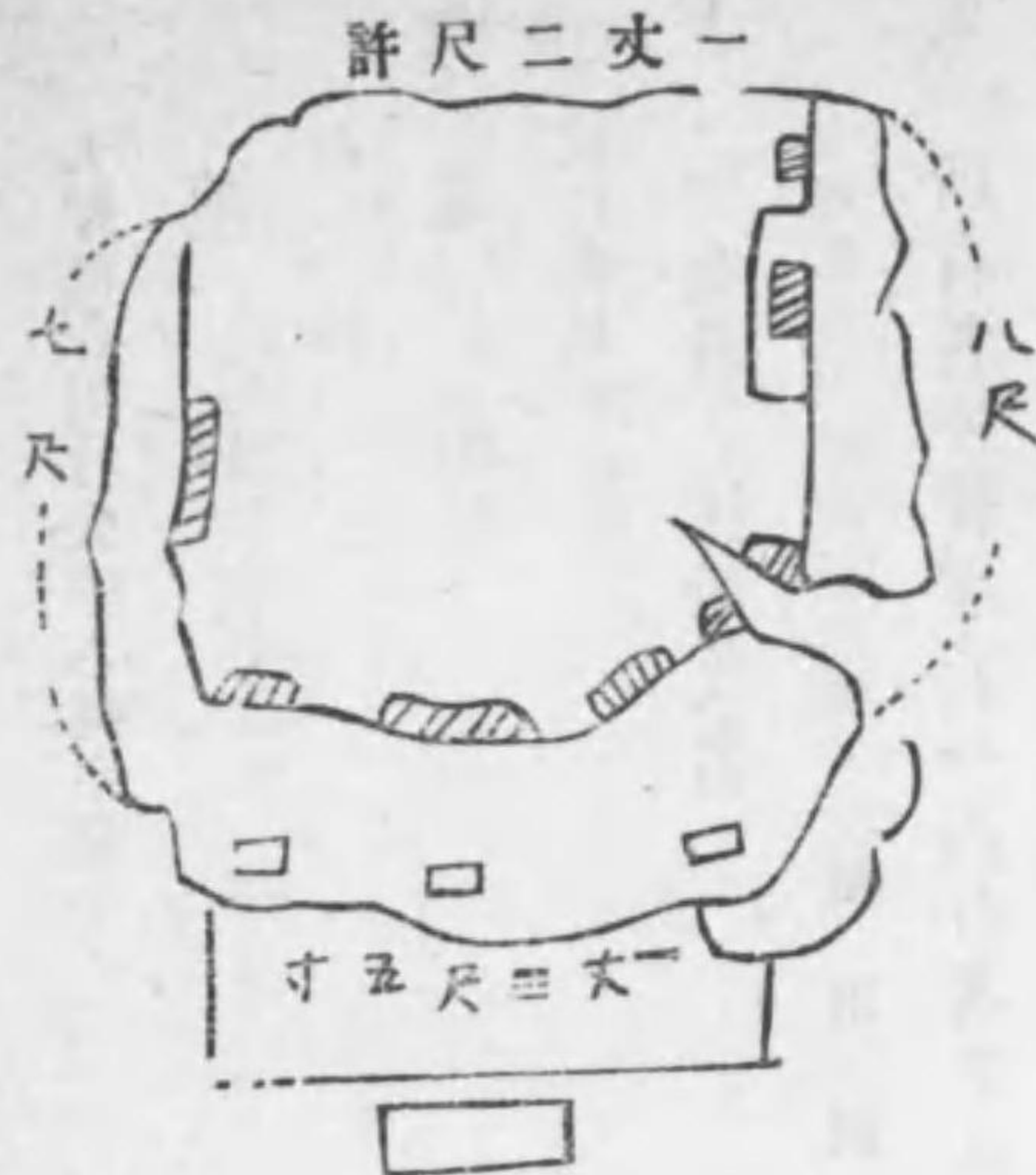
蹟ノ部



一	合川石佛	一
二	諸方郷ノ横穴古墳	七
三	緒方ノ板碑	一四
四	下木石佛	一六
五	四王大日堂石佛	二一
六	不動二童子石佛	二四
七	穴観音石佛	二七
八	八坂村本庄ノ古墳	三三
九	北海部郡ニ於ケル二三ノ古墳	四〇
一〇	鼠ノ磐窟	五〇
一一	安岐城址	五五
一二	岡城址	六二

一三、白杵城址.....	七三
一四、中津城址.....	八五
一五、日出城址.....	九七
○名勝ノ部	
一、夷谿ノ仙郷.....	一〇三
○天然紀念物ノ部	
一、ベスブ石.....	一〇七
二、大藏谷舊坑.....	一〇八
三、大 鰻.....	一〇九
四、山椒魚.....	一一五
五、天然紀念物中名木ノ調査.....	一一七
.....以上.....	

一 名 稱	合川石佛
二 所在地	大野郡合川村大字六種 <sup>種</sup> 字堂 <sup>堂</sup> ノ
三 地 目	山 林
四 地 積	貳段參畝步
五 所有者ノ住所氏名	大野郡合川村大字六種 種田國五郎
六 所有者外管理若ハ占有者アルトキハ其住所氏名	昔ヨリ所有者ヲ始メ附近四軒ニ於テ崇メ毎年正月二十八日ヲ初祭トシテ式典ヲ行ヒ燈明等ハ種田國五郎方ヨリ獻シ今ニ至ル
七 工作物其他ノ物件ノ物質、形狀、構造、大小、數量	



合川石佛橫断面



正面

二

所謂四面石佛ノ一種ニシテ正面底部十三尺餘、左側七尺位、右側八尺内外、高サ一丈一尺ノ自然石ヲ利用シテ三方ニ佛像ヲ刻ム裏面ハ石塊ノ一端大破壊ヲ爲シ土砂蔽ヒ掛リ雜木此間ニ茂ヒ原形ヲ認ムル能ハザルヨリ想像ニ若シト雖モ或ハ此裏面ニモ他ノ三面ト同様佛像ヲ彫刻シアリタルモノニ非ズヤト思ハル

今現存スル東南西ノ三面ニ就テ記サンニ

正面 底部十三尺五寸位ニテ縱六尺横七尺一寸ノ淺キ窟ヲ穿チ

此内ニ不動三尊ヲ刻ム即チ

童子 三尺一寸

不動尊 五尺五寸 (何レモ立像)

童子 三尺一寸

一般ノ摩崖佛ノ刻法ト同ジク半肉刻トシテ中尊不動尊ハ劔ヲ持シ立像ニ童子モ普通ノ像ト大差ナク何レモ容貌雄偉ナリ而シテ本像ノ特長トモ認ムベキハ像全体ニ比シ脚部ノ極メテ長キコトニテ恰モ歐米人ノ体格ヲ見ルガ如キ點ニ在リ 正面窟前ニ石ヲ以テ屋根ヲ出シ之ヲ支フルニ三個ノ石柱ヲ以テス屋根ノ差出四尺五寸、石柱ノ高サ五尺五寸、幅六寸角ニテ後代ノ築造ニ係リ此石柱ニ「早稻田嘉平」「寶曆十二年五月吉日」「三重石工石田清右衛門」ト各柱ノ横ニ彫刻シアリ

左側 向ツテ左側面ハ底部七尺許リ總高一丈一尺アリ別ニ窟ヲ穿ツコトナク石面ニ佛像ヲ刻シ像ノ頭上三

寸許リヲ隔テ、半圓形ヲ作リ一尺二寸ト二尺ノ屋根様ノ石板ヲ籍メ込ミアリ像ハ

阿彌陀如來座像 二尺四寸

ニテ之ニ臺座ヲモ刻シ出シアリ

右側 向テ右側ハ石塊ノ一部割レタルマ、双方ニ開キアリ像ハ二体ヲ刻メルモ向テ左方ノ分ハ恰モ像ノ半ヨリ割レ尊名不詳ナリ其ノ右方ニ區劃ヲ設ケ淺ク穿チタル窟内ニ藥師像ノ座像ヲ刻ム

藥師如來座像 二尺四寸

尊名不詳座像 三尺三寸

此二像ノ向テ右方ノ石面ハ不整ナルガ七寸角位ノ穴ヲ穿チアリソレヨリ裏面ニ接續セルモ此邊リ破損甚シク原形ヲ止メザレバ判明セズ

### 八 現 狀

比較的完全ニ殘レルハ正面ノ不動三尊ト左側ノ阿彌陀像ナルモ尙處々破損アリ不動尊ノ顔面ノ一部欠ゲ藥師像モ右手其他ニ欠損多シ前記ノ如ク裏面ハ判明セザルモ假ニ最初ヨリ三面トシテ彫刻セリトスルモ所謂四面石佛ノ系統ニ屬スルハ勿論、南方ニ不動三尊ヲ置キ東方ニ藥師如來及他ノ一尊ヲ刻シ西方ニ彌陀如來ヲ彫リタル如キ大ニ造像者ノ苦心ノ存スル所ヲ觀取スルニ足ルモノアリ他ノ大岩壁ニ刻シタル摩崖佛ト異リタル點ハ大ナル窟ヲ穿ツコトナリ自然ノ大石塊ノ各面ヲ整備シテ僅ニ像ヲ安置スル構造ヲナシタル所ニアリ

正面ニ設ケタル寶曆築造ノ屋根及石柱ハ以前ノ形式ヲ襲ヒタルモノカ或ハ新ニ考案シタルモノカ不測ナルモ  
造像當時ハ斯ル變鎖ナルモノアラザルベク又阿彌陀像ノ頭上ニ差シ掛ケアル屋根様ノ石板モ研究ヲ要スルモ  
ノナルベシ久シク風雨ノ荒スニ委シタル爲メ石塊ノ一部ノ破壊ヲ見タル上石ノ頂上ニハ雜木數株時ヲ得頗ニ  
生ヒ茂リ時々土砂或ハ木葉ヲ落シツ、アリ後面ハ上下ヨリ雜木草ノ跳梁アリ

九 由來傳説等

本石佛ニ關シテハ由來傳説ノ存スルモノナキモ大野郡ノ石佛ニ就テハ多クハ日羅ノ作ト傳ヘラレ居ルハ兎ニ  
角參考トスベキモノニテ本石佛所在地ヨリ少ク隔レル處ニ「石原」トイフ地名アリ古老ノ傳フル所ニヨレバ  
昔立石石原寺ト名クル巨刹アリト「タツイシ」ト云ヒ「セキゲン」ト云ヒ石佛ニ因縁アル名タルハ一見首肯サル  
、モノニテ石佛造像當時此附近ニ大寺ヲ建立シタルモノニ非ラザルカ又或ハ寺ノ境内ニ四面佛ヲ刻シタルカ  
モ知レズ此等ハ更ニ深ク研究ヲ要スルモノナリ

一〇 徵證物件

別ニ殘ルモノナキモ前記ノ如ク正面ノ屋根ト石柱ヲ寶曆年間ニ建立シタルハ信仰ノ依然續キタル一證トモイ  
フベク本石像所在地ノ一劃ハ高臺ニシテ正面十數段ノ石燈ヲ築造シアリ崇敬ノ域トシテ適シタル等參考トス  
ルニ足ルモノアリ今ハ所有者及三四家ノ崇敬ニ過ギザルモ古昔ハ相當廣キ範圍ニ方テ祭祀サレタルモノ、如

一一 指定ノ理由

大分縣ニ現存スル石佛ノ學術的價值ハ今ヤ天下ノ輿論トナリ或ハ學者ノ或ハ美術院等團體ノ或ハ保存會ノ調  
査踵ヲ接スルモノアリ之ガ保護保存ヲ充分ニナシ研究ノ資料ヲ提供シ東洋ニ於ケル藝術ノ推移ヨリ世界的位  
置ヲ知り石佛系統ノ確立ヲ期スベキモノニテ就中四面佛ハ昔朝鮮慶州等ニテ彫刻アレ掘佛寺址ニ殘レルモノ  
等學界ノ視聽ヲ集メ我國奈良朝時代ニモ此形式ヲ移シタルモ自然石ニ石佛トシテ刻シタルハ稀有ニテ大分縣  
下ニテ西國東郡田染村ノ藥師ト稱スル大石塊ノ四面石佛ト本石佛トノミニテ田染村ノソレハ造像ノ種類ヨリ  
スルモ奈良朝時代ノ面影ヲ存スル如ク非常ニ珍重ノモノタリ合川ノ石佛モ亦好研究資料タルハ論ナシ

一二 保存方法、一三 概算費用

本石佛ハ天然ノ巨石ニ刻マレタルモ後方其他破壞甚シキヲ以テ今後破壞ヲ止ムルノ方法ヲ講ズベク雜木雜草  
ヲ艾除シテ石塊ノ安定ヲ圖リ出來得ベクンバ此石塊ヲ蔽フニ足ルベキ建物ヲ設クベク此費用ハ構造ノ如何ニ  
ヨリ不定ナルモ概算二百圓位ヲ要スベシ又指定ノ曉ニ於テハ大字六種區又ハ青年團等ニテ管理セシムルヲ最  
モ便トス

緒方ノ横穴古墳

大野郡緒万郷各村ニハ横穴古墳ノ殘存スルモノ頗ル多ク地方考古家ノ實地調査スル所ニテモ既ニ數十箇所ニ及ビ尙未踏査ノ分モ多數アルベク此等ノ綜合研究ハ全地方古代民族ノ状態ヲ知ル好資料タルカ今回ハ其ノ二三ニ就テ概觀的ノ調査ヲ試ムルニ止メタリ先ツ所在ヲ舉ゲンニ

南緒方村	鮎川字德丸	城址附近	二
全	馬背畑字辻	小山東面	二
緒方村	越生字漆生	庵ノ背	一
小富士村	辻字上辻	人家ノ裏	四
上緒方村	上年野字平瀬	道ノ下	二
緒方村	上自在	神社附近	二
南緒方村	原尻字小田		二
全	新 宮園		一五
全	全 宮迫		二
全	全 大日上		五
全	鮎川野中		四
全	全 神社脇		四

全 知田米納田

六

緒方村 越生漆生

三

小富士村 辻 藏園

一

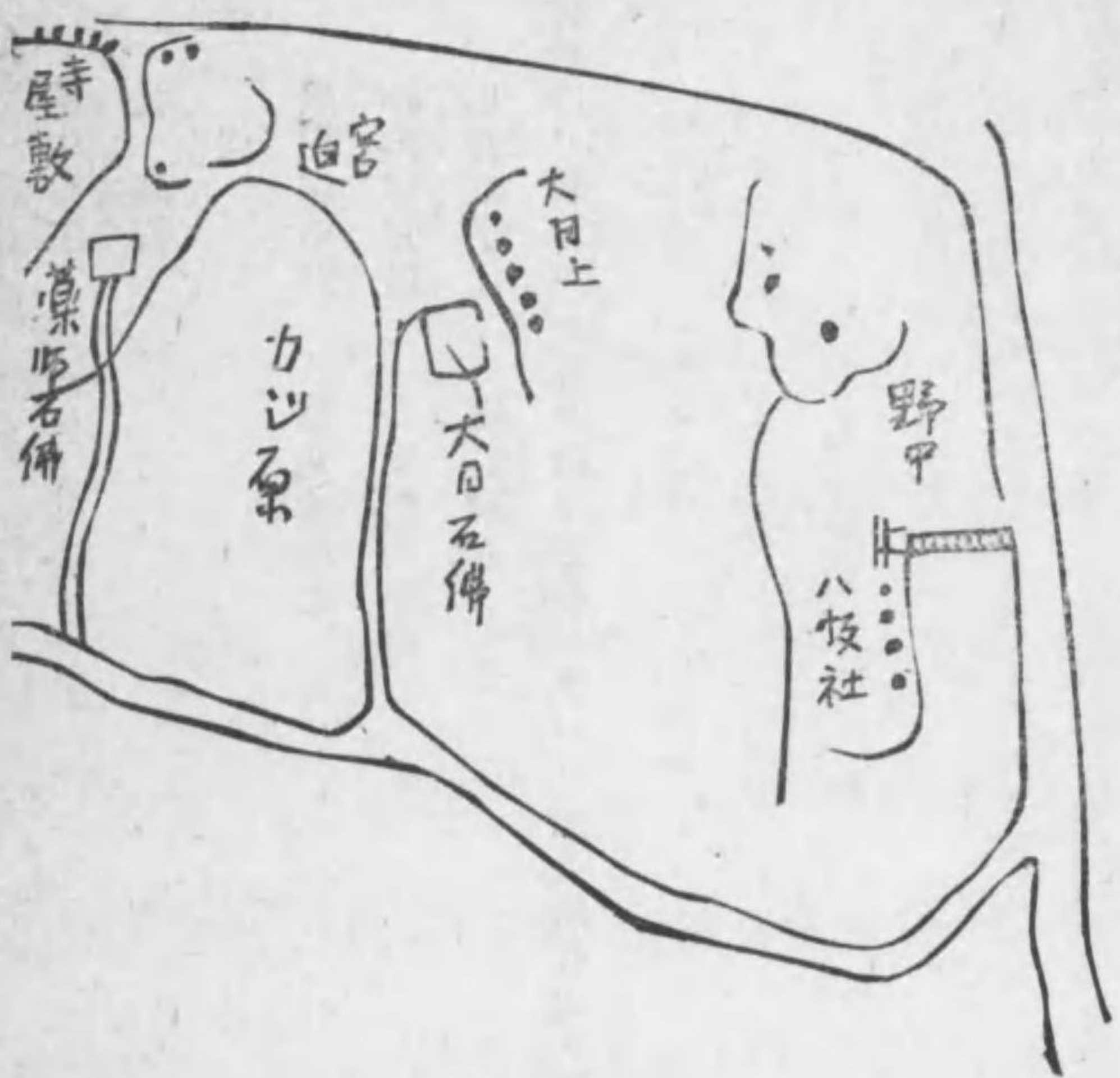
堅 穴

南緒方村 鮎川字小野 德丸城址北 一

小富士村 小宛字尾崎 人家門前平地 一

南緒方村 馬背畑字辻 横穴附近 一

右ノ内南緒方村鮎川、新ニアル五ヶ所ノ調査ヲナシタルカ所有地ノ畧圖ヲ掲ゲンニ



一 所在地、地目、地積、所有者等

南緒方村大字鮎川徳丸城址

山林一反五畝歩	全所	合澤美三郎
全 村大字新字宮園	全所	衛藤寅太郎
畑一反九畝歩	全所	衛藤力三郎
全 村大字宮迫	全所	衛藤力三郎
山林一畝歩	全所	衛藤力三郎
全 村大字鮎川字野中	全所	合澤令人
山林五畝歩	全所	合澤令人
全 村大字全所字野中、神社脇		
山林五畝歩		八坂神社

一 工作物其他ノ物質、形状、構造、大小、數量等

○大字新ニアル數ヶ所ハ南緒方石佛(ニヶ所)ノアル小丘内ニシテ緒方三社ノ一タル一宮八幡ノ裏ヨリ少シ下リタル高臺寺屋敷ト稱スル羽田野芥太郎所有ニテ全家宅附近近畑ノ崖ニ大小數個並ビ尙半埋レタルモノ數個ア



リ普通ノ横穴ト異ナル點ナク大ナルモノ奥行六尺許リアリ

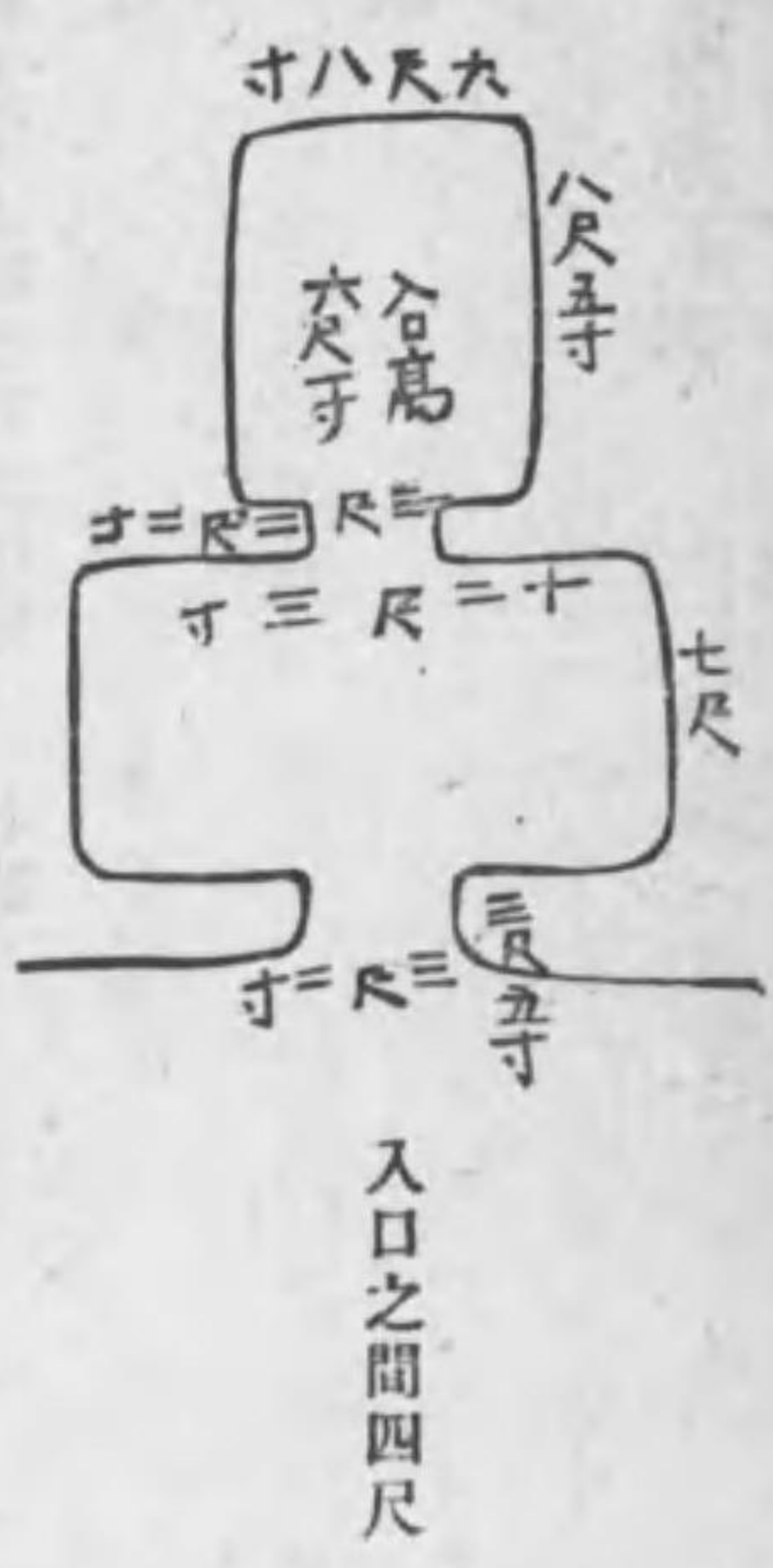
○字宮迫大日石佛ハト「大日上」ト稱スル崖ニモ五個並ビ同様ナリ

○野中ノ高臺ニ出ヅレバ緒方郷一降ノ裡ニ在リ竹藪中ニ二個並ビ更ニ十數間隔レル處ニ一個アリ本横穴ハ入口幅三尺高四尺三寸厚三尺ニシテ室ノ廣サ奥行八尺五寸、横五尺一寸、内高六尺アリ殆ンド正方形ヲナシ天井モ穹曲ノ度少シ正面入口ノ向ツテ左側ニ三個ノ塔ヲ刻シ又其左方ノ一區ニ五輪塔形ヲ刻ス

○野中八坂神社境外神門ヲ横ニ左ノ崖ニ杉樹生ヒ茂ル間大小四個ノ横穴アリ其中一個ニ就テ見ルニ横六尺高四尺七寸ヲ穿チ其中央ニ入口ヲ設ケ入口ハ横三尺五寸、厚二尺、高三尺位ニテ多少埋モレリ奥行六尺高サ六尺位ニテ内部ハ多少穹曲アリ

○大字鮎川徳丸城址ノ横穴ハ城址タル小丘上ニ在リ本城ハ元龜天正ノ頃緒方ノ一族徳丸氏ガ築城シ薩軍ヲ迎ヘテ激戦シタル古戰場ニテ今尙古城ノ面影ヲ存ス幾多ノ戦亂ヲ經タルモ横穴ノ殘存セシハ珍トスベク而モ二室連續ノモノタルハ更ニ貴重ノ資料タリ頂上ヨリ少シ下リタル北面ノ崖ニ在リ

徳丸城址二室連繋ノ横穴



二室連續ニシテ前入口ハ横三尺二寸、厚三尺五寸、高サ四尺アリ前室ハ奥行七尺、横幅十二尺三寸、高サ八尺七八寸アリ後室入口ハ横三尺、厚二尺二寸、高六尺一寸ニテ後室ノ廣サ奥行八尺五寸、横幅六尺八寸、高八尺七八寸アリ内部ハ四角形ニテ天井モ穹曲少キ方ナリ尙後室背面左方ニ奥行五寸、高一尺五寸、横一尺七寸ノ小穴ヲ穿チアリ

○徳丸城址堅穴ト稱スルハ前記ノ處ヨリ一段下リタル西南方ノ平坦ナル處ニ在リ穴ノ徑ハ不整ナルモ三尺内外ニテ深サ六尺七八寸アレドモ底部ハ多ク埋リタル跡アリ一方内側ノ半ヨリ急ニ廣クナリタルモノ、如ク本堅穴ハ以前ノモノカ否カハ尙研究ノ餘地アルベシ

一 現狀其他

以上ノ各横穴ハ大小種々アリ形式ニ於テモ多少ノ差異アルモ大部分大分縣各地ニ殘ル横穴ト大同小異ニテ入口ノ如キ三段トシタルモノナク彩色ノ跡モ認メズ又内部ニ彫刻ヲ施セルモノ等ヲ發見セズ最近出土品ナキ模倣ナルモ文化ノ早ク開ケタル緒方郷ニ於テ斯ク多數ノ古墳ヲ有スルハ興味アルコト、云フベク他ノ出土品等ト比較シ又當地方ト連絡アル他地方ノ古墳等トモ對照シテ本縣古代史實ヲ得ルコトハ最モ急務ニテ緒方郷ニ散在スル横穴ノ如キ保存保護ヲ完フシ年々破壞スルヲ防グベキ必要アリ

一名稱

緒方ノ板碑

二所在地

大野郡緒方村大字上自在字三反畑一一七番

三 地目

田

四 地積

四畝二十九步

五 所有者ノ住所氏名

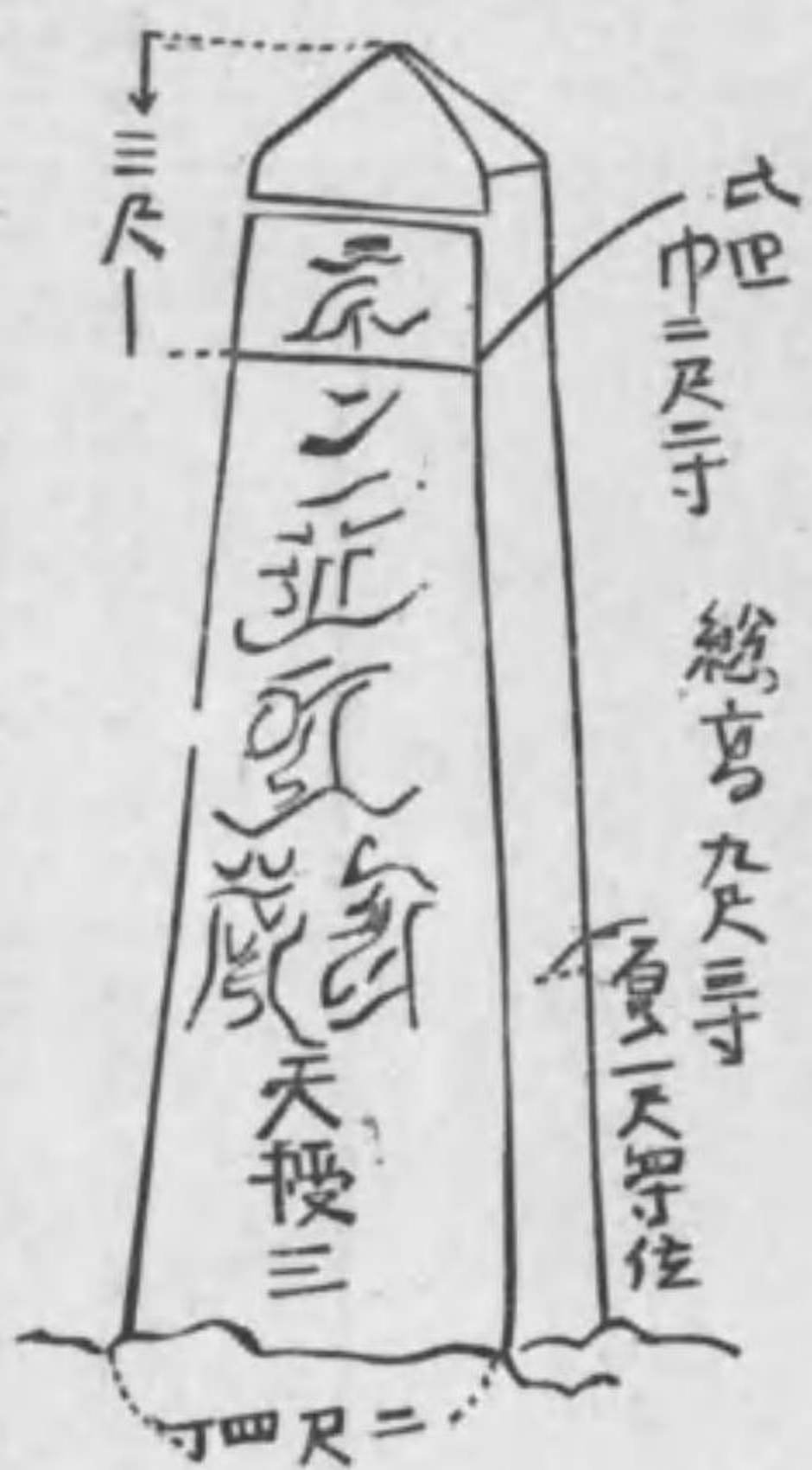
大野郡緒方村大字上自在

佐藤 九一郎

六 所有者外管理若ハ占有者アルトキハ其住所氏名

ナシ

七 工作物其他ノ物件ノ物質、形狀、構造、大小、數量



上自在道路ヨリ一丁許リ入り込ミタル田地ノ岸ノ邊リニ立テリ總高九尺三寸許ニテ底部ハ尙一二尺土中ニ入り居ルモノ、如シ國東地方ニ多キ板碑形ニ類シ額ナク「ソリ」モナシ厚サ一尺一二寸ヨリ一尺四五寸ニテ極メテ安定シタル碑ニテ正面ニ六個ノ梵字ヲ刻シ其下ニ「天授三」ノ文字アリ側面裏面トモ文字ナシ

八 現狀、九由來傳說等、十徵証物件

傳説トシテハ緒方三郎惟榮ノ投石ト稱シ三郎ガ此碑ヲ某所ヨリ投下シタリト云フモ天授三年ハ三郎ヨリ遙カ  
 後代ナルヲ以テ其燕説タルハ論ナシ之レ畢竟緒方氏ノ武勇ヲ粉飾セシ爲メ誤リ傳ヘタルモノナルベシ然レド  
 モ緒方郷ハ緒方三郎ノ領地ニテ其城址モ此附近ニ在リ南北朝時代ニ於テ誰人カ緒方家供養ノ爲メ建立シタ  
 ルモノトモ解セラレザルニ非ズ又投石ノ傳説ハ本碑ガ元此處ニアラズシテ何時カノ時代ニ他ヨリ移置シタル  
 ヲ暗示スルモノト云ハレザルニモアラズ現在完全ニ保存サレ居ルモ大野郡ニ於ケル板碑ノ古キモノ、一トシ  
 テ貴重ナル資料ナレバ尙一層保護法ヲ講ズル必要アリ周圍ニ鐵鎖ヲ繞ラセバ可ナルベク其ノ費用モ僅少ニテ  
 足ルベシ

一 名稱

下木石佛

二 所在地

直入郡豊岡村大字會々字下木

三 地目

山林

四 地積

下木石佛



三畝步

五 所有者ノ住所氏名

直入郡豊岡村大字會々

妙見寺

六 所有者外管理若ハ占有者アルトキハ住所氏名

ナシ

七 工作物其他ノ物件ノ物質、形状、構造、大小、數量

(深七寸五分)





下木石佛横断面



下木石佛略位置

本石佛ノ位置ハ下木タキノ下竹田驛北側ノ大岩壁ノ中腹ニシテ岩面ニ三体ノ像ヲ刻ミ向テ右方ニ千手十一面  
 觀音像其ニ並ビテ左ニ尊石不詳ノ一像アリソレヨリ少シ隔テ、左ノ稍上方ニ深サ七寸五分、高四尺餘、横三  
 尺二寸許リノ不等邊ニ三角形ノ穴ヲ穿テ俗ニ聖德太子像ト稱スル一像ヲ刻ス

- 觀世音菩薩 高四尺二寸
- 尊名不詳像 高四尺二寸
- 聖德太子像 高四尺

八 現 狀

崖上ヨリ常ニ落下スル水滴ノ爲メ岩面腐朽ヲ爲シ居ルモ形体ハ見ルヲ得ベシ本石佛ハ他ノソレト聊カ趣ヲ異  
 ニシ浮彫ニ加フルニ線彫ヲ應用シタル跡アリ一見粗笨ノ刀法ナルガ如シト雖古雅愛スベキモノアリ石佛系統  
 ノ上ヨリ逸スベカラザル珍品トイフベク右端ノ觀世音ハ十一面ト千手トヲ顯ハシ千手ハ恰モ超ヲ張リタル如  
 ク左右ニ自由ニ線ニテ彫刻サレ十一面ハ本像ノ頭ノ眞上ニ十面ヲ並列シアル等佛像ノ形式ノ上ヨリスルモ研  
 究ノ價值アルベク中央ノ一像ハ左手ヲ舉ゲ右手ヲ垂レ頭髮ノ邊リモ破損シ尊名不詳ナルモ一見裸形ノ如ク能  
 ク骨格ヲ想見スルヲ得ル等造像者ノ大膽ナル手法ヲ窺知スルニ足ルベキモノアリ最左端ノ像ハ俗ニ聖德太子  
 六歳ノ時ノ像ト傳稱シ來リ童形合掌ノ立像兩肘ヲ角張リタル等古拙ナルモ奇ナル形貌ヲ示シ居レリ各像トモ  
 局部々々ニ欠損ノ箇所多シ尙觀音ノ頭上ニ高九寸、巾二尺六寸、深二尺位ノ穴ヲ穿チアリ

本三像ノアル前面ハ廣場ニテ現在東西十間南北三間位ニ過ギザルモ以テハ尙餘地アリシヲ鐵道工事ノ爲メ漸  
 次切崩シタルモノナリ直前ヨリ左ノ空地竹林ニ接シ聖德太子堂址アリ九尺四面ノ堂アリシヲ今ヨリ八十年前  
 ニ取り壊シタルモノトイフ此堂ノ本尊ハ木佛ニテ岡城内ニ安置サレアリ御用職人ノ崇敬厚カリシヲ或ル事情  
 ノ爲メ前記ノ太子堂ニ移シタルモノニテ今ハ妙見寺ニ安置シアリ

本石佛三体ハ從來専門家ノ調査セシモノ二三ニ止ラズト雖モ其ノ見ル所區々ニシテ或ハ粗ナリトテ省ミズ或  
 ハ藝術的價值充分ニアリト斷ズルアリ從ツテ造像年代等ノ推定モ出來ザルガ意見未定ナレハ益々研究ノ要ア  
 ル所以ニシテ何レニシテモ石佛ノ好研究資料タルヲ失ハズ

九 由來傳説等

妙見寺境内ニアル不動尊ハ日羅作ト傳へ來ルモ本像ニ關シテハ確タル由來モ傳説モナシ

一〇 徵證物件

ナシ

一一 指定ノ理由

本像ハ刻法ノ珍奇ナル點ニ於テ古拙ノ裡ニ雄勁ノ氣ヲ見セタル等又石佛系統ヲ知ル上ニ於テ充分保存シ遺漏ナキ研究ニ備フベキモノトス

一二 保存方法

見上ル許リノ大岩壁ニテ上ヨリ常ニ水滴落下シ之ガ防禦ハ困難ナルカ前面廣場ノ危險ヲ防止シ像ノ前方ニ鐵柵等ヲ施サバ幾分保護ノ實ヲ擧グベシ費用概算三百圓

附 記

下木石佛ノ大岩壁ノ續ク所ニ妙見寺アリ元不動院ト稱シ古刹ナリシ所一時廢寺タリシヲ明治二十年再興シ妙見寺ト稱ス境内五百九十坪本堂ハ大岩屋ヲ後ニシテ建テラレ左方ニ不動堂アリ堂後ノ岩屋ニ不動尊ノ座像ヲ彫刻ス「竹田七不動」ノ一ニシテ昔ヨリ崇敬厚ク秘佛トシテ有名ノモノニテ容貌頗ル雄偉ナルモ堂ヲ造リ密閉

シアルヨリ岩面腐朽多ク保存上研究ヲ要スベシ本像ハ二三ノ調査アリタルモ尙精密ニ調査ヲ重ヌル要アリ今回ハ時間ノ都合上概要ニ止メタリ本寺ヨリ下木石佛ニ至ル大岩壁ハ前ニ雜木生ヒ茂リ足ヲ踏ミ入ル、餘地ナキモ四圍ノ形況ヨリ推シ或ハ幾個カノ岩窟ヲ穿チアルニアラズヤト思ハレ田邊美術學校教授ノ如キ調査ノ歩ヲ進メタルモ未ダ發見スルニ至ラザルモ或ハ參考資料ノ現ハル、期アルベシ何レニシテモ大陸將來ノ不窟ノ影響ノ一端ヲ想見スルニ足ルモノアリ

以上 本莊委員報告

前田委員報告

一名 稱

四王大日堂

二 所在地

西國東郡上真玉村大字黒土字下黒土四王五百四拾八番及五百四拾九番ノ二

三地 目

山林

四地 積

五畝八步 (但四王權現及大日堂境内八步)  
(其他境外五畝步)

五 所有者氏名

中國金七外拾七人共有地

六 該 當

ナ シ

七 工 作 物

其他ノ物質、形狀、構造、大小、數量

舊四王權現社ヨリ下ル事二十間ノ石段下ノ左方横十七尺縦五尺一寸ノ岩壁ニ彫刻セル佛像ニシテ其位置ハ東向シ大日如來外十六體アリ尙右方ニ種子曼陀羅ヲ刻ミアリ其内ノ最モ大ナルモノ丈三尺腰部七寸ニシテ其他ハ丈一尺三寸乃至一尺四五寸、破損セルモノ四體ニ及ブ而シテ此ノ磨崖佛ノ彫刻シアル岩壁ヲ隔ツル約六尺程前ニ四本ノ石柱(長サ各七尺)ヲ並立シ其上ニ石屋根ヲ造リ以テ雨露ヲ凌グニ備ヘアルモ久シク星霜ヲ經タレバ其石屋根ハ大半破損シ且蔓草圍繞シ風雨ノ節ハ雨水漏溢シ漸次磨崖佛ヲ侵蝕シツツアリ

八 現 狀

年代古ク且保存設備ノ不完全ナル爲中央佛體ハ大イニ破損シ其他モ幾部損シ居レリ

九 由來傳説等

本堂ハ土俗之ヲ四王權現ノ大日如來ト稱シ村民朝夕絶エズ禮拜ヲ怠ラズ何レノ年代何人ノ彫刻ニ係ルモノナルヤヲ明カニセズト雖本堂ハ元西國東郡上眞玉村大字黒土字黒土岩屋天臺宗無動寺(延暦ノ所屬ニシテ維新前迄ハ同寺住職ノ管理スル所トナリ維新後今日ニ至ル迄毎年日時ヲ定メ讀經シ居レリト云フ而シテ無動寺ノ創建ハ養老(第四十四代元正天皇)年中開山鷹柄法連大和尚恒ニ保戒行事シ延暦三年迄六十有余年天皇感シ給ヒ其中興開基開舜大和尚巖山無動寺ヨリ大友滅亡ノ後當國ヘ下向顯密兩教四季ノ勤行怠ラズト云フ  
本堂ノ上手ニ四王權現社アルモ其實ハ當村村社六所權現(村社身ミツ深神社)ヘ合祀セシ事トナリ居レリ而シテ大日堂ハ四王權現社ノ石ノ華表(即前記ノ石段下二十間ノ所)ノ左方ニアリ本堂ハ本堂ヲ距ル事甚ダ遠カラズ通稱黒土ノ弘法大師ト云ヘル彼ノ無動寺ノ境外佛堂所謂椿堂トモ多少ノ關係アリ現今椿堂ニ安置シアル觀音、藥師、彌勒ノ三佛像(木造)ハ平安朝時代ノ名作ラシク而シテ椿堂ハ養老二年仁聞菩薩(菩薩ノ有無説アルモノ)ノ開基ニシテ今ヨリ一千二百五年ノ星霜ヲ經過セシ事舊記ニ存セリ而シテ此大日堂及ビ椿堂共ニ無動寺ノ所屬タル點ヨリ推シテ考フルニ兩堂共ニ何等カノ關係アルモノノ如キモ其由來ヲ知ルノ徵證ヲ得ルニ苦シム  
(此邊一帶奇岩怪石ニ富ミ通俗之ヲ稱シテ小耶馬溪ト云フ)

一〇 徵證物件

ナ シ

一 指定ノ事由

現在ノ設備甚ダ不完全ナルヲ以テ保存ヲ指定シ完全ニ保存ノ方法ヲ講ジ以テ工藝美術上參考ノ爲永遠ニ貴重ナル石佛ヲ傳フルノ必要アリ

一二 保存ノ方法

現住ノ石尾根ヲ擴張シ屋根上ヲ「コンクリート」ニテ塗り周圍ハ格子戸ヲ以テスルカ又ハ岩壁ニ接續シタル堂宇ヲ建テ之ガ保存ヲ爲スノ必要アリ

一三 保存方法ニ對スル費用概算

約參百圓乃至約六七百圓

一 名 稱

不動二童子

二 所在地

西國東郡西郡甲村大字長岩屋字七郎九二千九百五番地

三 地 目

宅 地

四 地 積

四拾參坪

五 所有者氏名

天念寺

六 所有者ノ外管理者若クハ占有者

ナ シ

七 工作物其他ノ物件ノ物質、形狀、構造、大小、數量

西郡甲村大字長岩屋ヨリ東國東郡西武藏村兩子山ニ通ズル道路ノ北側ニ在ル六所權現前ヲ流ル、小河（耕地）  
水田灌溉用貯水池ヲ兼メ）ノ中ニ屹立セル岩石ニ巧ミニ彫刻シタル不動尊ト二童子ニシテ不動尊ハ其ノ丈約一丈二尺位  
横八尺五寸二童子ハ其ノ丈各々六尺位一ハ横四尺二寸一ハ横二尺四寸ニシテ其ノ河ノ南岸ニ沿ヒテ二間四方  
位ノ瓦葺護摩堂アリ信仰者多ク朝夕香煙絶エズ

八 現 狀

前記ノ如ク河中ニ屹立セル岩石ニ彫刻シタル石佛ナルヲ以テ頗ル堅牢ニシテ毫モ破損ノ憂ナシ

九 傳説由來等



天念寺ハ京都比叡山延曆寺座主宮青蓮院ノ末寺ニシテ養老ニ戊午年(今ヨリ一千二百四年前)十月二十六日(一説ニ大化四戊申年)所謂六郷満山ノ開山仁聞菩薩(菩薩ノ有無説アルモ)ノ開基創立ニシテ天仁年度ヨリ稍々衰微セシヲ建長年度ニ至リ僧快圓之ヲ中興ス其ノ後復衰ヘ天正年度僧圓盛更ニ振起スト記録ニ明記シアルモ現今ハ衰頽シテ寺門頗ル振ハズト雖モ昔時ハ本寺ニ附属セル十二坊(祇園坊、要品坊、延壽坊、廣寶坊、妙壽坊)アリ相當ノ寺領ヲ有シ此邊一帶同寺ノ境内ニシテ(廣サ約三丁)其ノ鎮守社六所大權現ハ古地六觀世音ヲ安置セシモノナリトノ記録アリ之ニ因ツテ按ズルニ此ノ不動尊ノ石佛、護摩堂モ無論往時天念寺ノ境内タリシ事毫モ疑ヲ容レズ推シテ以テ此ノ石佛ノ年代ノ古キヲ察スルニ餘リアリ

一〇 徵證物件

護摩堂所在ノ宅地ニ接續スル芝地ノ傍ニ建タル平石ニ刻メル文字ニ「建久二年(七百三十)四月八日金剛阿闍梨順賢法印」トアリ此ノ石佛ニ關係アルモノ、如シ

一一 指定ノ事由

前述ノ如キ由緒アル古寺ニ關係アリ且ツ彫刻ノ巧妙ナル稀代ノ石佛ナルヲ以テ之ヲ指定シ永遠ニ保存スルノ必要アリト認ム

一二 保存ノ方法

一三 保存方法ニ對スル費用概算  
ナシ

一四 其他參考事項  
此ノ不動尊及護摩堂ノ事ハ現今天念寺ニ藏セル古記録ニ詳記シアリ

一 名 稱  
穴觀音

二 所在地  
東國東郡安岐町大字馬場八坂社境内

三 地 目  
雜種地

四 地 積  
約一畝歩

五 所有者ノ住所氏名

官有地(指定村社)  
八坂社

六 所有者ノ外管理者若クハ占有者アル時ハ住所氏名

ナシ

七 工作物其他ノ物件ノ物質、形状、構造、大小、數量

八坂社ノ石階ノ左手ニアル岩窟内ニアル物ニシテ穴ノ奥行一丈七尺四寸アリ穴ハ前ノ間ト奥ノ間トノ二室ニ別レ前ノ間ハ長サ五尺、奥ノ間ハ同五尺一寸、天井ノ高サ前ノ間ハ五尺、奥ノ間ハ高サ三尺二寸アリ其ノ入口ハ狭クシテ奥ノ間ニ入ル程廣クナリ居レリ佛像ハ九体ニシテ其ノ丈各々三尺程アリ全部岩壁ニ刻ミアル磨崖佛ニシテ多クハ觀音像ナルモ一ニ羅漢様ノ物アリ岩窟内ハ常ニ暗黒ナルヲ以テ之ニ入ルニハ點火ヲ持チテ行クヲ要ス而シテ穴ノ入口ハ東向ナリ

八 現 狀

地方民ハ之ヲ穴觀音ト稱シ常ニ禮拜シ居ルヲ以テ甚ダシク破損シ居ラザルモ處々岩壁ニ落書セルモノアルヲ認ム

九 由來傳説等

詳ナラズト雖モ往時ノ儒者拙齋諏訪寛村(或ハ別人)ノ筆ニ成ル「閑居口號」ト云ヘル書中ニ此ノ穴觀音ノ事ヲ記セル中ニ正徳元年(二十二年)前)或人此ノ地ニ來遊セシ時既ニ此ノ穴アリシヲ見タル事ヲ記シアレバ其ノ以前ヨリアリシ事明カナリ

一〇 徵證物件

ナシ

一一 指定ノ事由

穴中ノ磨崖佛ニシテ其ノ類少ナク且ツ彫刻ノ見ルベキモノアルヲ以テ之ヲ指定スルノ必要アリト認ム

一二 保存ノ方法

穴ノ入口ニ鐵柵ヲ設ケ之ニ錠前ヲ施シテ俗人ノ濫入ヲ防ギ且ツ之ヲ保護スル爲其ノ地ノ居住者ニ之ガ管理(無報酬)ヲ命ズルノ必要アリト認ム

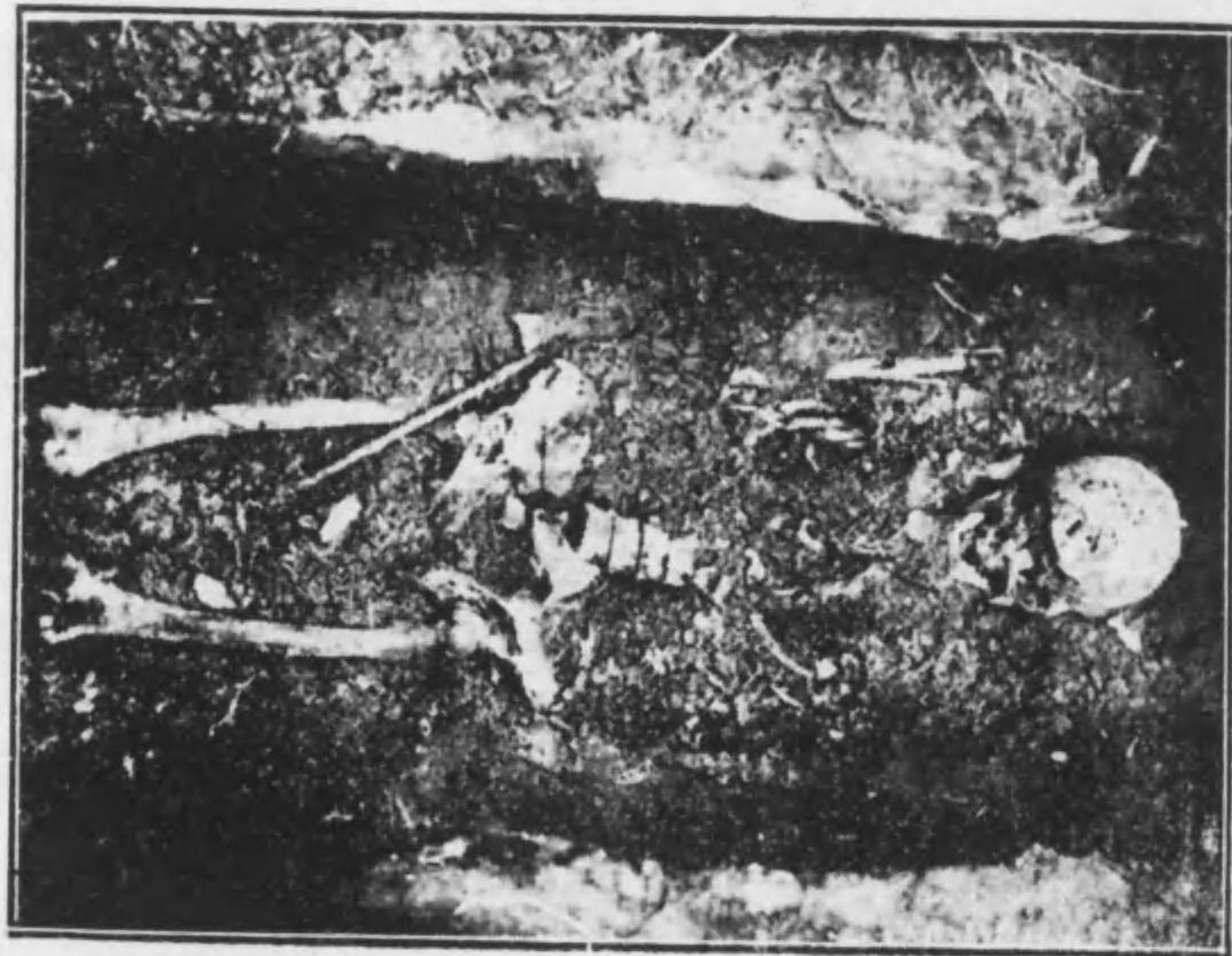
一三 保存ノ方法ニ對スル費用概算

約五拾圓

一四 其他參考事項

安岐町龜字馬場片山某及ビ同町大字下原鳥羽伸作並ニ同町大字鹽屋神職水口忠嗣ノ家ニ藏セル「閑居號口」

骨人ノ葬埋内棺石 圖五第



(む望りよ方南) 形外墳古阪八 圖一第



ト云ヘル書中ニモ此ノ穴觀音ノ事ヲ記シアリ又東國東郡奈狩江村大字奈多小川重徳ノ藏書中ニモ此ノ穴觀音ノ事ヲ記シタル物アリト云フ

(以上安部委員報告)

## 豊後速見郡八坂村本庄古墳の調査

京都帝國大學文學部 梅原末治

### 一

速見郡ノ北東隅ヲ占ムル八坂川ノ流域ニハ古墳各地ニ散在シテ其ノ數十指ヲ屈ス可シ。中ニ於イテ八坂村大字本庄字寺ノ上ニアル俗ニ塚山ト稱スル一墳壘ハ嚮ニ開墾ノ際堅穴式石室ヲ發見セシヲ以テ一部人士ノ注意ニ上レルモノナリシガ、大正十一年二月十四日地方人士再ビコレヲ穿テ箱式棺一個ニ掘リ當テ、内部ニ朱ニ染ミタル人骨ノナホヨク遺存スルモノアルヲ知レリ。但シ當時其ノ破碎ヲ惧レテ後日専門家ニ精査ヲ求ムベク、埋没状態ヲ撮影スルニトメテ再ビモトノマ、ニ蓋ヲ覆ヒテ保護ヲ加フルコト、セリ。本年四月石佛調査ノ爲余ノ大分縣下ニ至ルヤ縣史蹟調査會ヨリ同墳ノ學術調査ヲ依頼セラレタルヲ以テ、同月十三日委員日名子太郎君ト共ニ實地ニ臨ミ、工藤覺次君其他地方特志家ノ好意ノ下ニ棺ヲ再掘、詳ニ其ノ構造ヲ檢シ、併セテ遺物ノ調査ヲ行ヘリ。今マコ、ニ其ノ記録ヲ公ニシテ縣當局者依頼ノ主旨ニ副フ可シ。

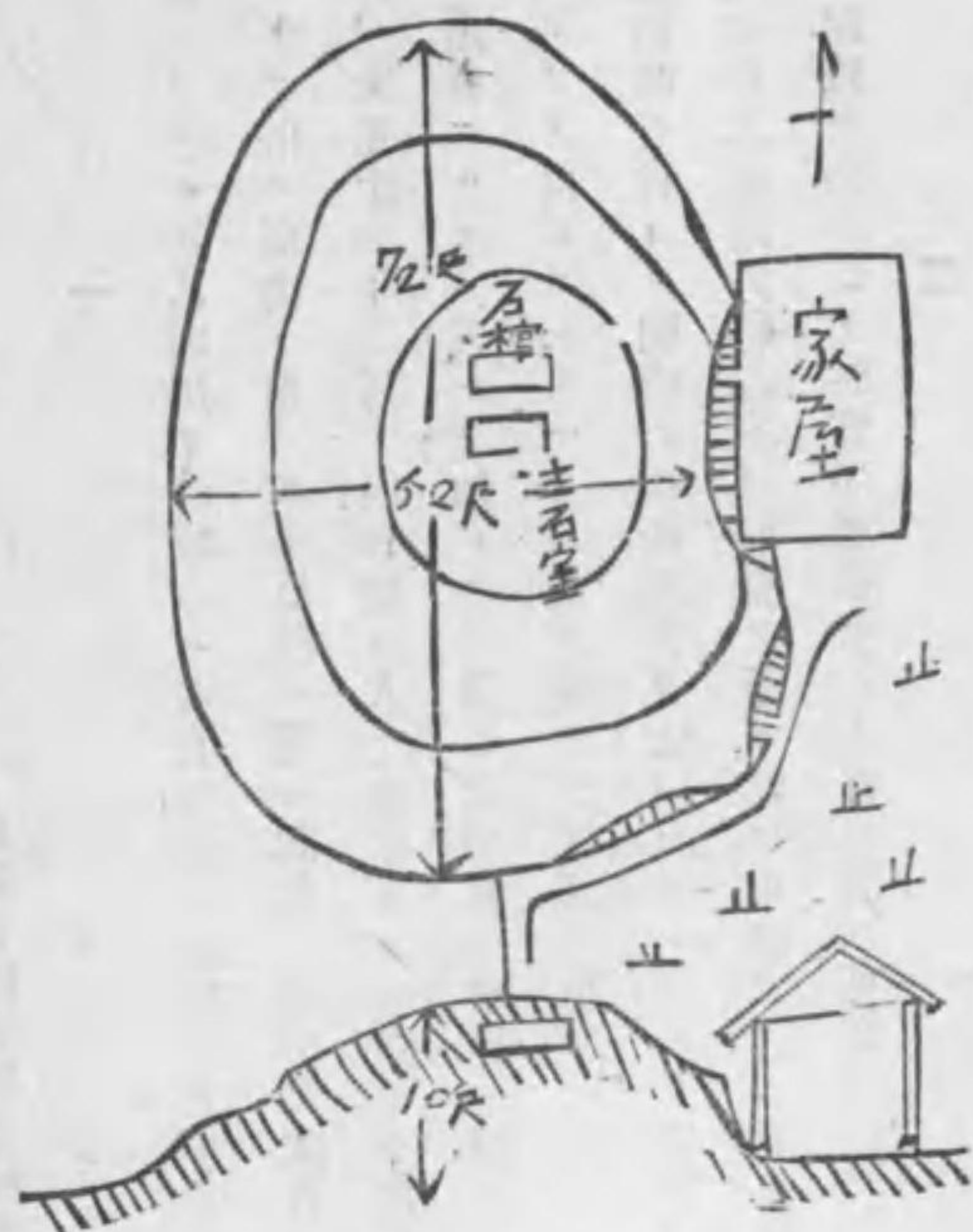
### 二

サテ古墳ノ所在地タル本庄字寺ノ上ハ日豊線杵築驛ノ東北約二十町ニアリテ、八坂川北岸ノ高臺ノ一部ヲ占ム附近一帶ノ地ハ南ニ向ツテ極メテ緩カナル傾斜ヲナシ、今マ多ク開墾ヲ經テ畑地トナレルモ、北隅ノ部分ニハ雜

木林ノナホ遺存スルモノアリ、其ノ一部ニ佐藤長次郎氏ノ住宅建チ、コレト接シテ二個ノ隆起部ノ南北約十數間ヲ距テ、相並ベルハ人目ヲ惹ク。塚山古墳ハ即チ此ノ二者中ノ一ニシテ南方ニアルモノヲ指ス稱呼ナリ。

三四

圖二第 塚山古墳外形略測圖



封土ノ大サハ兩者トモ相似テ、周廻約五十間、高サ十五尺内外ノ完好ナル圓墳ナリシガ、塚山墳ハ北方ノ墳體ガ今モナホ形ノ全キニ反シ、前年其ノ東側ニ接シテ佐藤氏ガ住宅ヲ建築セルガ爲ニ、一部分ヲ削リ取りシ爲メニ

封土ノ縮少ト變形トヲ來シ、現在ニテハ南北ノ徑約七十六尺、東西五十二尺ノ楕圓形狀ヲ呈シ、高サマタ十尺内外トナレリ。實査スルニ封土ニハ葺石、埴輪共ニ見當ラズ、單ニ赤褐色土堆積セシモノニ過ギザルモ、西側ニ於イテハ本來ノ二段築成ナリシ面影ヲトドメ、初段ノ高サノ約四尺ナルヲ示セルハ特記ニ値セム、第壹圖ノ寫眞ハ此ノ古墳ヲ南方ヨリ撮影セシモノ、マタ第二圖ハ外形ノ略測圖ナリ。以テ其ノ形狀ノ詳細ヲ見ルヲ得ンカ。

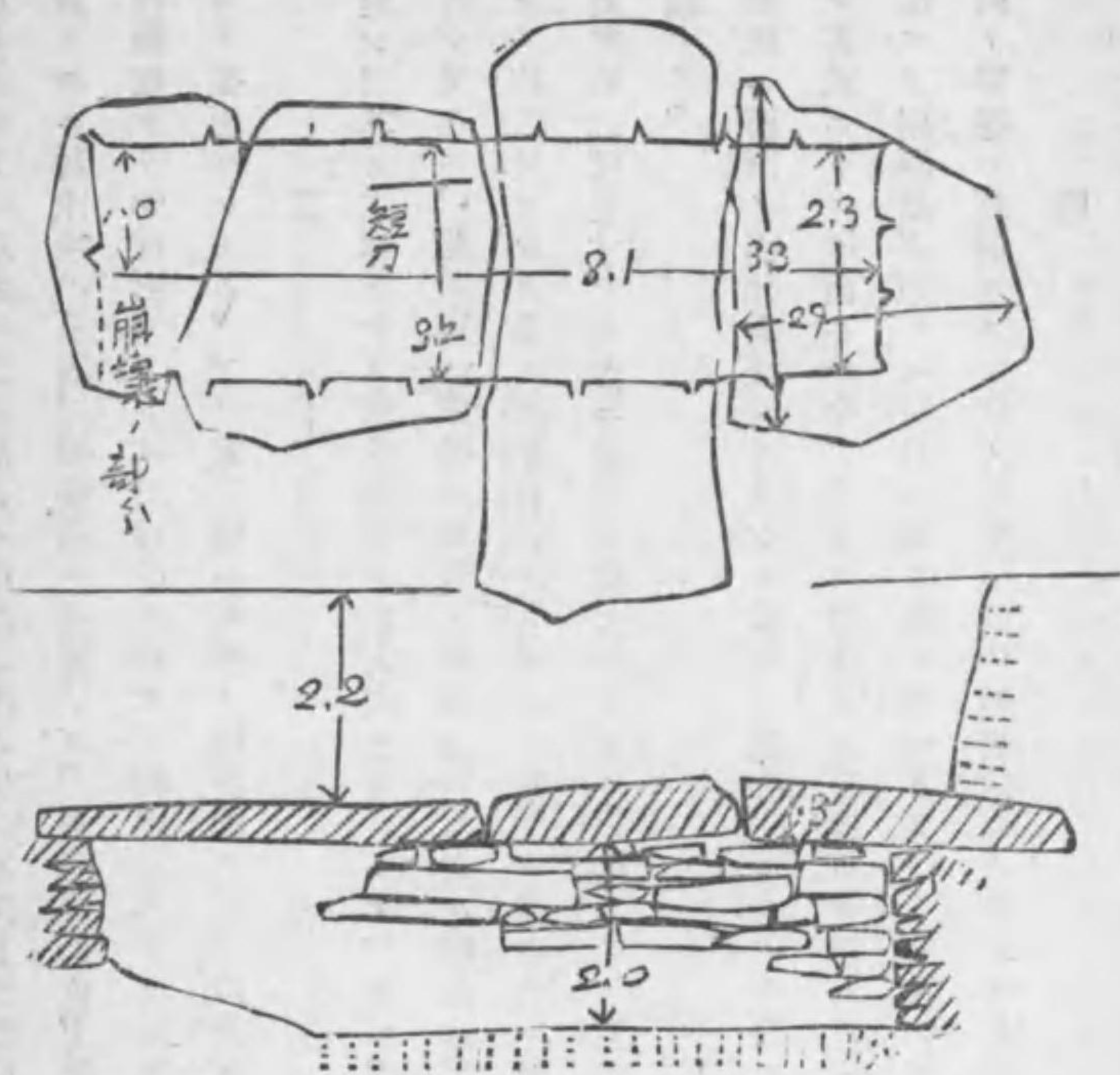
三

如上ノ封土ニ對シ、其ノ主軸ヲナス構造部分ハ竪穴式石室ニシテ、嚮ニ掘鑿ニ遇ヒテ、墳ノ中央ニ其ノ遺形ヲトドメタリ。就イテ見ルニ、此ノ室ハ主軸ヲ東西ノ直線上ニ置ケル總長八尺一寸、幅二尺三四寸ノ細長キ平面ノモノ、現存地表ヨリ約二尺ニシテ其ノ天井石ニ達ス可シ。周壁ハ扁平ナル割石ヲ小口積トシテ恰モ煉瓦造リノ如キ外觀ヲ呈シ、高サ約二尺五寸、上部ニ至當ニ從ヒワヅカニ縮約シテ、天井部ハ大形石材三個ヲ以テ覆ヘリ。第三圖ハ其ノ實測圖ナリ。

此ノ室發見ノ際既ニ西南ノ部分崩壞シタリシト云イ、遺物トシテハ中央ノ北壁ニ近キ部分ヨリ短刀一口ヲ獲タルノミト。構造ノ古式ニシテ壁面ニハ今ナホ朱ヲ塗抹セル痕跡カニ遺レルニ徴スルニ、本來ノ埋葬ハ頗ル鄭重ナリシナルベク、從ツテ副葬品ノ如キモ短刀一口ノ如キ貧弱ナリシトハ考フル能ハズ、コレ全ク古ク盜掘ニ遇ヘルガ爲ニシテ、當時ノ穿掘ハ西側ヨリシ壁ノ崩壞ハ其ノ結果生ゼルモノナル可シ。

四

圖測實室石主墳古山塚 圖三第

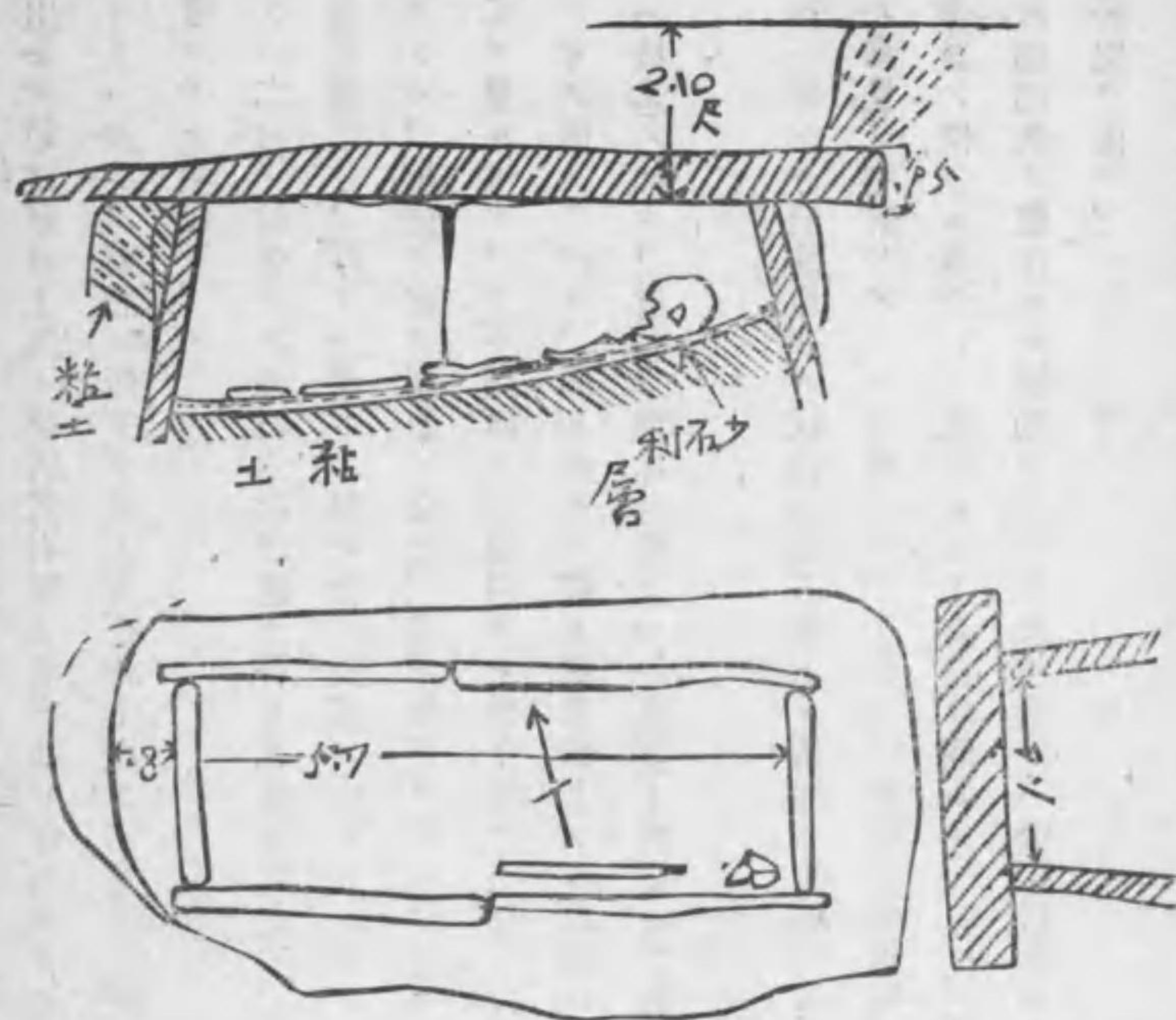


新ニ見出セル箱式棺ハ上述ノ竅穴式石室ノ北ニ並ビ存スルモノニシテ、相去ル約二尺、マタ東西ニ主軸ヲ置ケルモ前者ヨリハ少シク南北ニ傾キテ其ノ度合約十度ヲ示セリ。而シテ表土ヨリノ深サハ天井石マデ約一尺六寸ニシテ、石室ヨリハ稍淺シ。

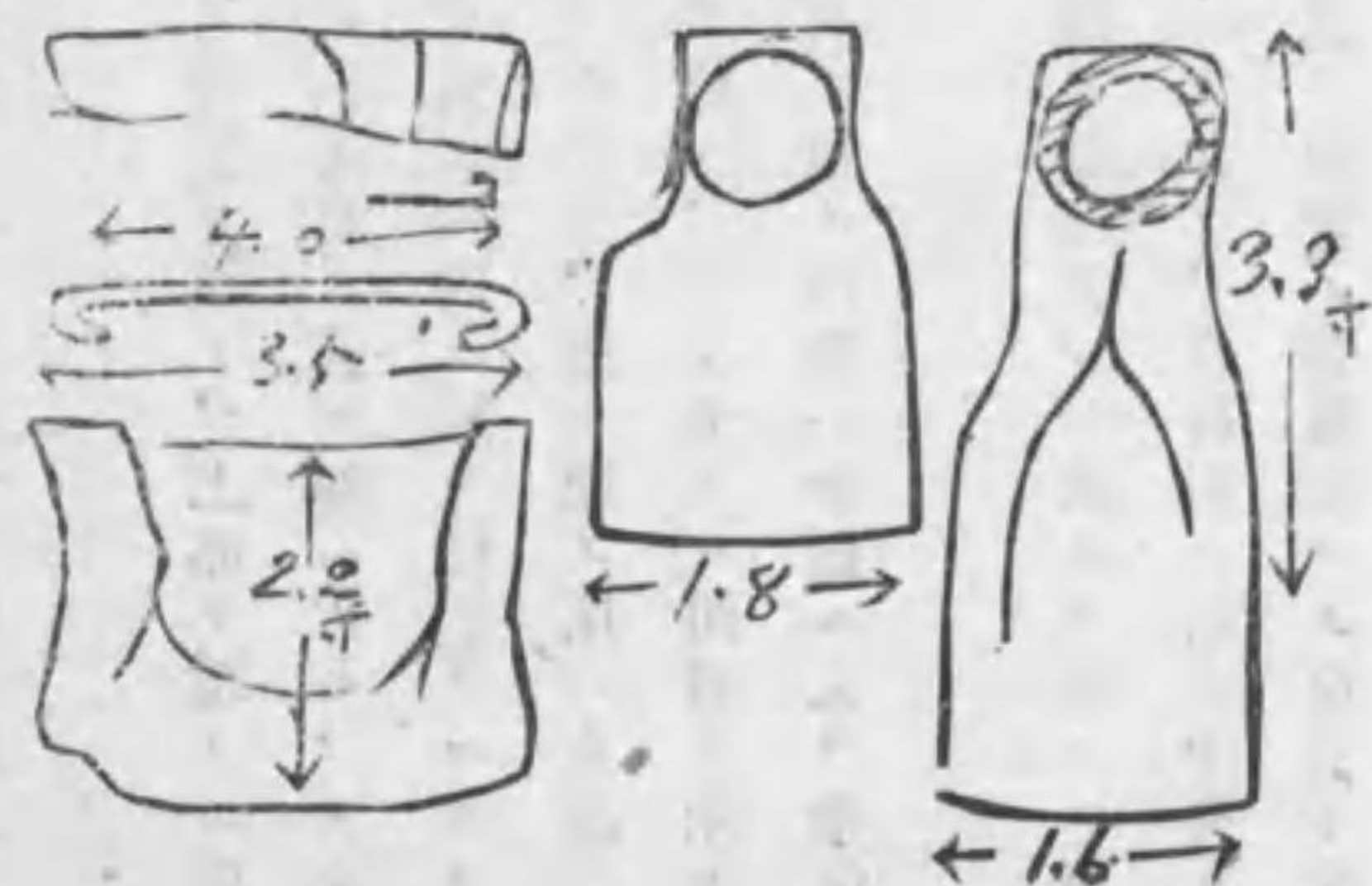
棺ハ厚サ一二寸ノ扁平ナル板石六枚ヲ組ミ合セテ長五尺七寸、幅一尺七寸餘ノ周劃ヲ作り、上部ヲ覆フニ長七尺六寸、幅三尺二寸、厚サ一端ニテ四寸餘ノ大石ヲ以テセルモノ、架構全ク箱式棺通有ノ式ヲ襲ヘルモ、タダ此ノ棺ニアリテハ、棺側ノ材ヲ稍斜ニ立テ、其ノ倒壊ヲ防ギ、更ニコレヲ固ムルガ爲ニ外周ニ厚キ粘土ヲマキタル特殊ノ設備ヲ見ルベク、ナホ底面ニハ地固メノ粘土層ノ上部ニ白砂約一寸ヲ置ケルアリ、而モ此ノ床ハ東端ニテ深サ一尺一寸ノ處ニアルモ、西ニ至ルニ從ヒ漸次低下シ西端部ニテハ一尺六寸ヲ超ヘ、ヤ、大ナル傾斜ヲ示セルモノアルハ後述ノ如ク、遺骸ガ東枕ニ葬ラレシ事實ト對比シテ興味深シ。ナホ右ノ棺ノ内側ハ全面ニ朱ヲ塗沫セリ。

此ノ棺内ニ於ケル遺骸埋葬ノ状態ハ第五第六ノ兩圖ニ昨年二月發見當初ノ寫眞ヲ載セタレバ就イテ詳ニス可ク余等再掘ノ際見タル處マタコレニ異ナラザリキ。即チ頭蓋ハ東側石ヲ距ル數寸ニアリテ、全身軀ハ棺ノ中央ニ正シク上向伸展ノ位置ニ葬ラレ、現狀ニヨリ身長ヲ測レルニ五尺三寸アリ、今マ其ノ頭骨ノ稍俯向キノ位置トナレルハ蓋シ軟部消失ノ際生セル異動ナルベキカ。遺骨ハ保存状態中等位ニシテ頭蓋、四肢骨等計測ニタフ可シ。専門學者ノ研究ヲ俟ツ。

圖四第 塚山古墳箱式實測圖



圖七第 塚山古墳箱式棺內出土品



棺内ノ副葬品ニ就イテハ、最初ノ發掘ニハコレヲ調査セズシテ止ミタリトノ事ナリシヲ以テ遺憾ハ特ニ加フルコト、セリ。其ノ結果、遺骨ノ左側ニ於イテ、棺ノ南壁ヨリ三寸ヲ距テ、葬ヲ東ニセル劍身一口ト、室ノ東南隅ニ於イテ鐵斧頭三口、鎌形品一個ノ相重ナリテ副葬セシモノヲ發見セリ。但シ珠玉ノ類ハ遂ニ見當ラザリキ。是等ノ遺物中劍身ハ總長一尺五寸（内莖長二寸）幅一寸ノ扁中ナル遺品ニシテ、何等ノ舉グベキ拵ナク、斧頭ノ二個マタ長サ三寸八分ト二寸八分ノ小形ニシテ、柄ノ部袋トナレル鑿形ニ近キ普通見ル形式ナリシガ、他ノ一ハ堅二寸二分ニ對シ幅三寸五分ヲ示シ、本ノ部分ノ兩端少シク折リ曲ゲテ柄ヲ挿入スベク作レル特殊ノモノ、鎌形品モ長サハ四寸ノ小形ナルモヨク其ノ特徴ヲ具ヘタリ（第七圖參照）コノ兩者ハ嚮ニ肥後國小坂村ノ古墳ヨリ數多ク見出サレタル形式ニシテ、而モ同古墳ハ石室ノ構造ト伴出ノ副葬品トニヨリテ六朝中期ヲ下ラザル時期ノ營造ト認メラル、モノナルニ於イテ、注意ニ値スベキナリ。

カクテ故アリ是等ノ遺物ヲ再ビ原位置ニ復シテ土ヲ覆ヒ、以テ調査ヲ終了セリ。

五

今マ以上ニ舉ゲタル調査ノ結果ヲ以テ、墳ノ年代、被葬者ノ位置等ニ就イテ歸結ヲ得ントスル如キハ頗ル困難ニシテ且ツ危險ノ事ニ属ス。サレバ余ハ右ノ事實ノ報告ニ満足シテコレヲ他日ニ保留ス可シ。然レドモ如上ノ記載ヨリシテ、本古墳ハ本來個人墓トシテ設ケラレシガ、後更ニ陪葬棺ヲ營メルモノナルハ疑ヲ容レズ、墳ノ主赫ガ堅穴式ナルニ對シテ後者ノ箱式棺ナルハ一般墓制ノ研究ニ興味ヲ有スル人士ノ參考タルベク、マタ其ノ棺底ノ

構造ヨリシテ遺骸ガ木棺等ニ納メラル、事ナク直接ニ砂利ノ上ニ置カレタルヲ肯定シ得ルコトニ依リテ上代葬送ノ習俗調査ニ資ス可キナリ。結末ニ當リテ調査ノ際特ニ協力ヲ得タル日名子太郎、工藤覺次ノ兩君ト安成貞雄氏トニ謝意ヲ表ス。

四〇

### 豊後北海部郡に於ける二三の古墳

京都帝國大學文學部 梅原末治

今年ノ四月上旬豊後ノ臼杵ト大分トニアル石佛ノ調査ニ出掛ケタ際、大分縣史蹟名勝天然記念物調査委員ノ日名子太郎氏カラ、兩石佛群所在地ノ中間ニ當ル坂ノ市ト神崎トノ兩地ニ瓢形墳ガアルガヨク性質ガ分明セナイノデ一度實査ヲ願ヒタイトノ依頼ヲ受ケタ。此ノ坂ノ市ノ塚ハ兼テ喜田博士カラ所謂柄鏡式塚ノ代表的ノモノダト聞カサレテキテ、一度是非見タイト念ジタコトデアルシ、從來此ノ縣下ニハ調査ニ出掛ケル機會ガ少ク、特ニ大分以テハ今度ガハジメナノデ、以前ニ可ナリ詳シク見タ日向ノ古墳ヤ肥前ノ遺跡トノ比較上カラモ同地古墳ノ調査ヲ望ンデキタ折リカラデモアツタノデ、ヨロコビデ此ノ希望ニ應ジ、石佛ノ調査ヲ了シテ後、歸學ヲ延期シテ一部分同氏ノ東道ニ依リ、他ハ地方人士ノ厚意ヲ受ケテ實踐シタ。此ノ結果兩遺跡トモ面白イモノデ、特ニ神崎ノ一古墳ハ後デ見タ日名子氏所藏ノ「尙古姓壽」所載ノ遺物ト對比スルト興味ノ深イモノナノガ認メラレタ。デ以

下其ノ概要ヲ録シテ兼テ企圖シテキル大分縣ニ於ケル主要ナ古墳調査録ノ第一ニ當テルコトニシタイ。

記述ノ便宜上此ノ報告ヲ二段ニ分チ、初メニ坂ノ市ノ前方後圓墳ト其ノ北方カラ掘リ出サレタ石棺トヲ擧ゲ、次ニ神崎ノ瓢形墳ト附近ノ箱式棺トヲ記シ最後ニ兩者ニ關スル一二ノ鄙見ヲ附記シタイ。

#### 二

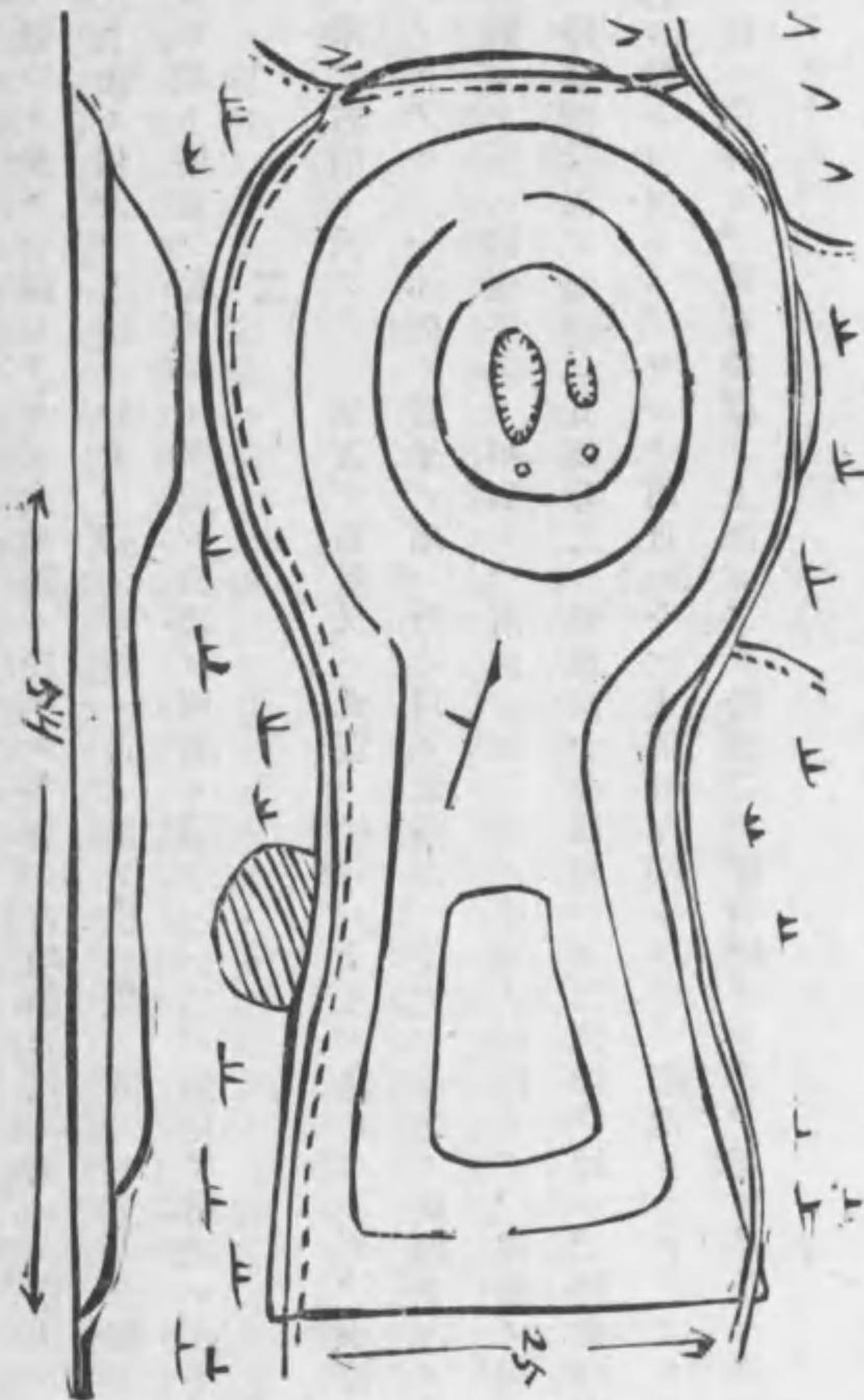
コ、ニ坂ノ市ノ古墳ト云フノハ地方デ龜塚又ハ大塚ト呼バレテキル處ノモノデ、小佐井村大字里小字寶來ニア  
ルソレヲ指スノデアル。一体此ノ寶來ノ地ハ丹生川ノ北西方ニ連ナル臺地ノ東端ヲ占メテ、里部落ヨリハ北ニ當  
リ大分灣ヲ俯瞰シテ遙ニ國東半島ト相對シ、南東ニ坂ノ市ノ平地ノ展開シタ、景勝ノ處デアアルガ塚ハ同地ノ最モ  
高イ部分デ、陸地測量部ノ地圖(五萬分之一地形圖大分圖幅)ニ三角標ヲ印シ、標高四十四米ト記サレタ地點ニ  
アルカラ景色ガ特ニヨロシイ。ソシテ附近ハ今マ大部分開墾セラレテ畑地ニナツテアルガ封土ノミハ里ノ村有ナ  
ルガ爲芝生ノ儘ニ遺存シ、現在後圓ノ上部ニアル松樹二ガ好目標ヲシテ、塚ノ存在マタ遠クカラ容易ニ認メ得ラ  
レルコトニナツテキル。

サテ此ノ龜塚ハ南東ヲ前ニシテ營マレタ立派ナ前方後圓墳デ、第一圖ノ畧測圖ニ見ユル如ク二段築成ノ完美ナ  
外形ヲ呈シ、基底部ニテ前後ノ長徑五十五間(内前方部長サ三十四間)前方ノ幅二十五間、後圓ノ橫徑三十間ニ  
近イ面積ヲ持ツテ其ノ高サ二間ノ第一段ノ上ニ前方八尺、後圓部十八尺ノ第二段ヲ營ンダモノ、此ノ後圓ノ第二  
段ハ上邊ノ徑九間ノ截頭圓錐形ヲシテ、ヤ、長イ前方ト對比スル時ハ我が同式墳中ノ二個ノ著シイ分派デアル處

四一



ノ前方部ノ開キノ大ナルト、コレニ反シ細長イ所謂鈍子形トノ中間型ヲ示セル如ク解セラレ、形トシテハ最モヨ  
 イ恰好ノ一ツデ、此ノ種墓制ノ一ノ代表的形式トモ云ヒ得ベク、コレヲ豊後ニ見ルノハ興味ガ深い。第二圖ハコ

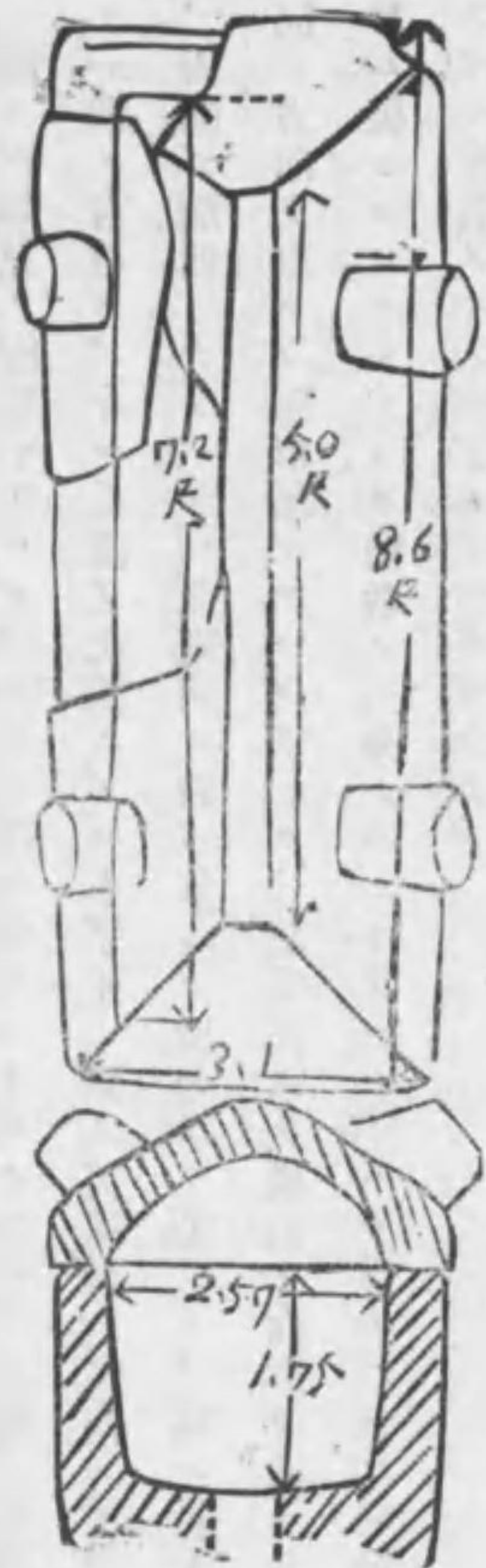


圖測略形外墳古塚龜村里 圖一第

ノ封土ヲ東側カラ撮影シタモノデ、近距離ノ爲前方部少シク長キニ過ギタ様ニナツテキルガ、コレデモホゞ形ノ  
 整ツタ處ガ見得ルト思フ。

封土ノ表面ニハ割合ニ大形ノ礫石ヲ以ツテソレヲ葺イタ痕ガ認めラレ、特ニ後圓ノ北腹ハ原形ヲヨク存シテキ  
 ル様デアルシ、埴輪マタ厚サ四分内外ノ圓筒片ガ封土ノ隨所カラ見出サレテ、其ノ圍繞シテキタ事實ヲ推シ得ル  
 但シ此ノ後者ハ封土ノドノ邊ニドンナ工合ニ圍繞セラレテキタカハソレヲ即ニナシ得ナカッタ。墳ノ主軸ノ構造  
 ヲ、副葬品等ニ就イテハ今マ何等徴トスベキモノガナイ。タダ後圓ノ上部ニ現今主軸ニ沿フテ二個ノ凹所ガ相並  
 ンデ存スルノハ、之レガ割合ニ淺イモノデハアルトハ云へ、或ハ主要部ヲ破壊シ去ツタ事ヲ物語ツテキルモノカ  
 モ知レナイ。

第二圖 王ノ瀬天満宮境内石棺形状圖



以上ハ龜塚ニ關スル知見ノ概要デアルガ、コレト併セ見ルベキモノニハナホ塚ノ北西三十間近クヲ距テタ同ジ臺地ノ尾ニアル一個ノ古墳ト、今マ丘陵ノ北麓ニアル小字王ノ瀬ノ天滿神社境内ノ家型彫抜石棺トヲ舉グベキデアル。前者ハ、周圍ガ畑地トナリ、マタ北東隅ニ新ニ墓地ガ出來タリ等シテ、爲ニ封土ヲ削リ完形ハ見ラレナイガモト龜塚ト同ジ方向ヲ取ツタ瓢形墳デアツタラシク、北半高クテ後圓ノ面影ヲ傳ヘテキル様ニ考ヘラル、。但シ大キサハ原形ニ復シコレモトヨリ前者ノ三分ノ一ニモタラナイ小サナモノデソレ等ヲ併セ見ルト龜塚ノ所謂陪塚トデモ云フベキ性質ノモノデデアツタラウカ。

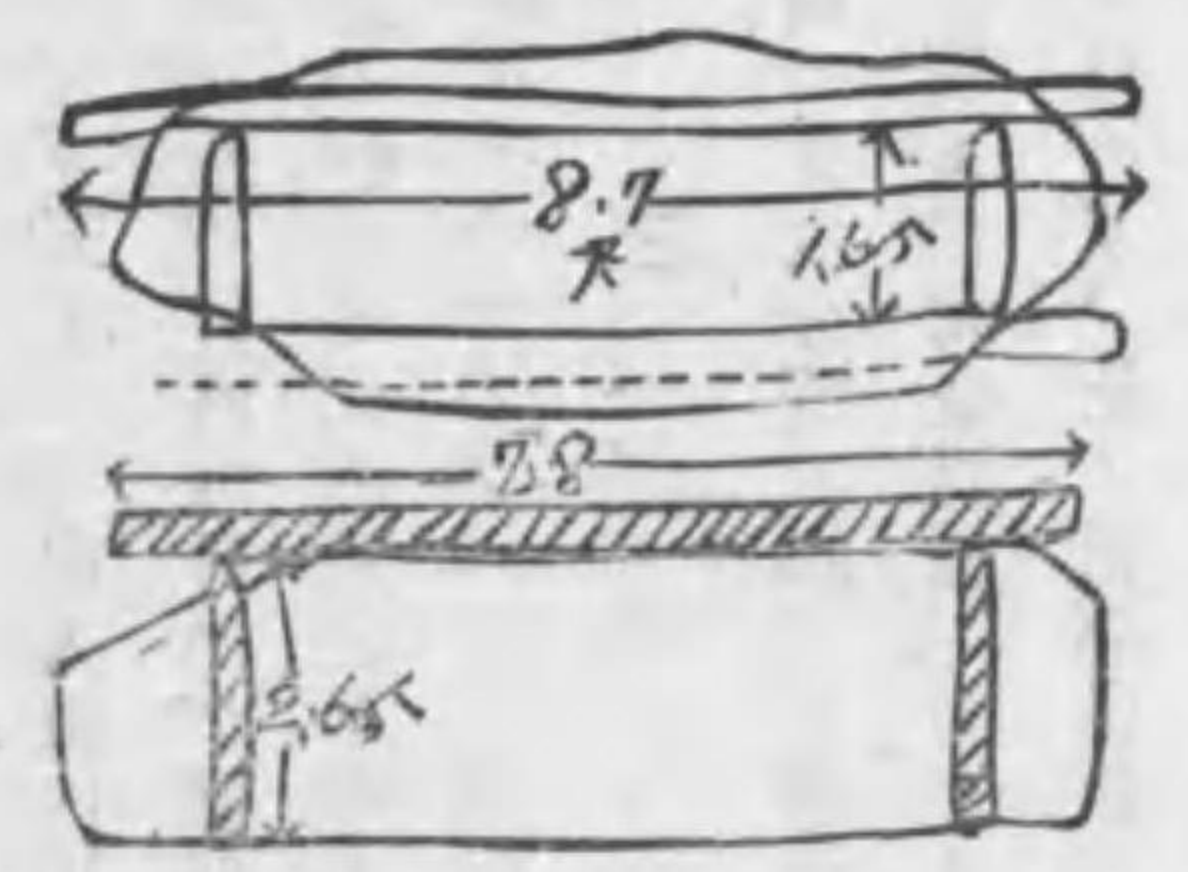
天滿神社ノ境内ニアル石棺ハ、今マ小堂内ニ安置セラレテキテ、コレハ明治ノ初年附近ノ道路改修ニ際シ偶然見出サレタノヲ保存シタノデアルト云フ。今マ破碎シタモノヲ接合シテアルガ、ナホ缺損ノ部分ガアツタリ、後ノ加工カト思ハル、點ナドモ存スルガ大体ノ形ハ第三圖ノ實測圖ガコレヲ明示シテ中々立派ナ彫抜キ棺デアアル。即チ身ハヤ、中脹レシテ總長約八尺四寸、幅中央デ三尺、高サ二尺五寸内外ノ石材ノ周縁五寸内外ヲ遺シテ内部一尺八寸近クヲ彫リ凹メテ、遺骸ヲ納メル部分ヲ造ツタモノ、蓋ハコレニ置キ重ネテ合セ目ガ一文字トナル様ニ出來テキテ、外容寄セ棟造リノ形ヲ採リ、棟ノ長サ五尺九寸ヲ示シ、兩側ノ流レニハ端ニ近ク各二個宛ノ大キイ細掛ケ突起ニ作り出シテアル。石質ハ凝灰岩デ、ヤ、粗造ノ感ガナイデハナイガ形整ヒ内面ニ朱ヲ塗ツタ痕ノナホ認めラレル處ナドハ埋葬ノ鄭重デアツタ事ヲ考ヘシムル。現在デハ身底ノホボ中央ニ一邊六寸餘ノ方形穴ガ穿タレテキルガ、本來アツタ水抜き用ノソレデアルカドウカハ疑ハシイ。

コノ棺ガドンナ形式ノ古墳ニ如何ナル状態デ埋葬セラレ、マタ藏シタ副葬品ノ種類如何ノ如キハ今日全ク知ルヨトスガノナイノヲマコトニ遺憾トスル。然シ乍ラ普通畿内ニ多イ此ノ棺ガ、特殊ノ形ノ棺ノ少クナイ九州ノ一隅ノ豊後ニ存シ而モソレガ完美シタ前方後内墳ト相近イ處ニアツタコトハ形式ニ依ル古墳墓ノ分布ノ研究上ニ重要視スベキデアルト考ヘル。畿内ニ於ケル家型彫リ抜キ棺ハ普通横穴式石室ノ主軸タルモノガ多イ點カラ推ストコレモ或ハ相似タ構造ノ中ニアツタトシテモヨイカモ知レナイ。然シ古墳ニ地方的相違ノ鮮少デナイ事カラ今マ俄カニ定メ難ク疑ヲ存スル。

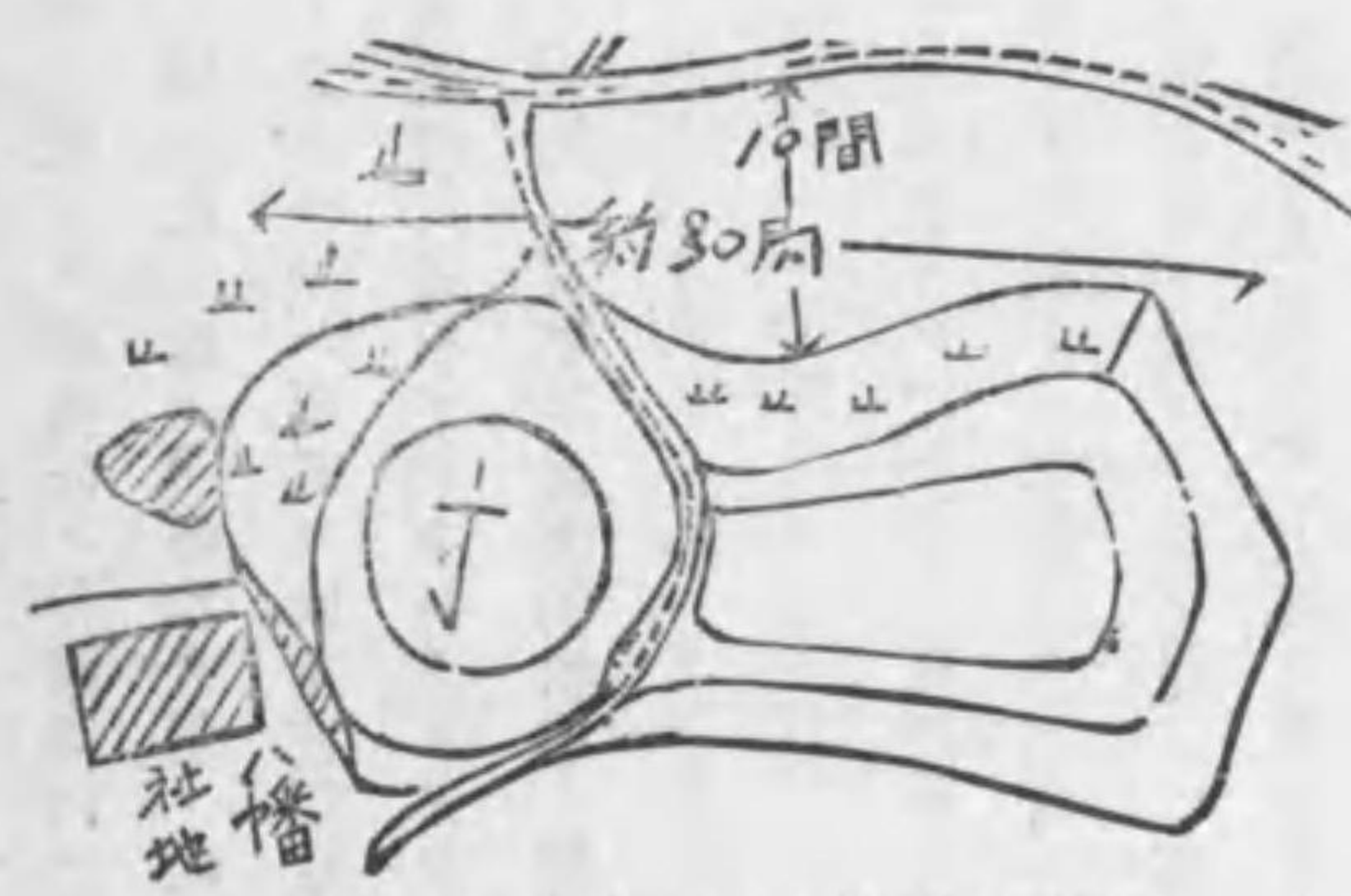
## 三

次ニ神崎ノ古墳ハ同ジク大分灣ニ臨ンダ宇神崎村落ノ一部ニアルモノデ、コレヲ更ニ分ツテ小字淨福寺ノ八幡神社ノ境内ニアル瓢形墳ト、元金毘羅ニアツタ箱式棺ヲ主軸トシタ丸塚トノ二類トスルコトガ出來ル。私ハ今マ便宜上後者カラ形状ヲ見ルガ、此ノ元金毘羅ノ地ハ、村ノ南々東ニ高ク聳エタ山ノ尾ノ一部ニ當ツテ、モト圓形ヲ呈シタ處、ココハ甚ダ眺望ガ佳イノデ、今カラ凡ソ八年前(推定ハ大正五年)上部ヲ削平シテ招魂社ヲ建設セント地均シ工事ヲ行フタ際偶然棺ヲ見出シテ古墳ナノヲ知ツタノデアルト云フ。ソシテ、發見ノ棺ハ東西ニ主軸ヲ置キ、其ノ内部ニハ刀劍ヤ鎗身ノ類ガ存シタトノ事デアアル。現在デハ棺ハ破壊シ終ツテ原形ハ見ラレナイガ、其ノ用材ガ後ニ建ツタ小祠ヘノ參道ノ敷石ヤ石階等ニ用キラレテアルカラ、一々ノ形ヲ測ツテ本來ノ大サヤ構造ヲ想察シ得ル。實見ノ結果ニ依ルニ、棺ハ少クモ三個ハアツタラシク、用材ハ何レモ俗ニ青石ト云フ綠泥片岩デ側

石ト思ハルルモノハ長サ七八尺ノ間ニアリ、前後石ハ幅一尺六七寸内外ノガ多イ。ソシテ前者ニハ前後石ヲ組ミ合ハセル爲ニ兩端近クニ切り缺ギヲ加ヘタモノヤ朱ノナホ遺存スルモノナドガアツテ、一個ノ如キハ右ノ切り缺ギカラ棺ノ内法ノ長サ五尺八寸デアツタコトサヘ分明スル。神崎村長ガ私ニ告ゲテ、棺ハモト三四個アツテ各棺共ニ前後左右ト蓋底ノ六石カラ成ツテキタト云ツタノハ蓋シ事實ヲ傳ヘタモノト考ヘル。今マ第五圖トシテ多ク



神崎元金羅箱式棺後原圖 圖三第



神崎キツ山古墳外形見取圖 圖四第

ノ用材中カラ石質ノ同ジモノヲ撰出シテ、試ミニ組ミ立テターノ棺ヲ示シタ。以テ形式ノ一斑ヲ察ス可ク、此ノ種通有ノ式デアツタコトガ認メラレル。タダシ三四個ノ棺ガ一ノ封土内ニアツタモノデアアルカ否カ、マタ相互ノ位置關係如何ナドハ全ク不明デアアル。

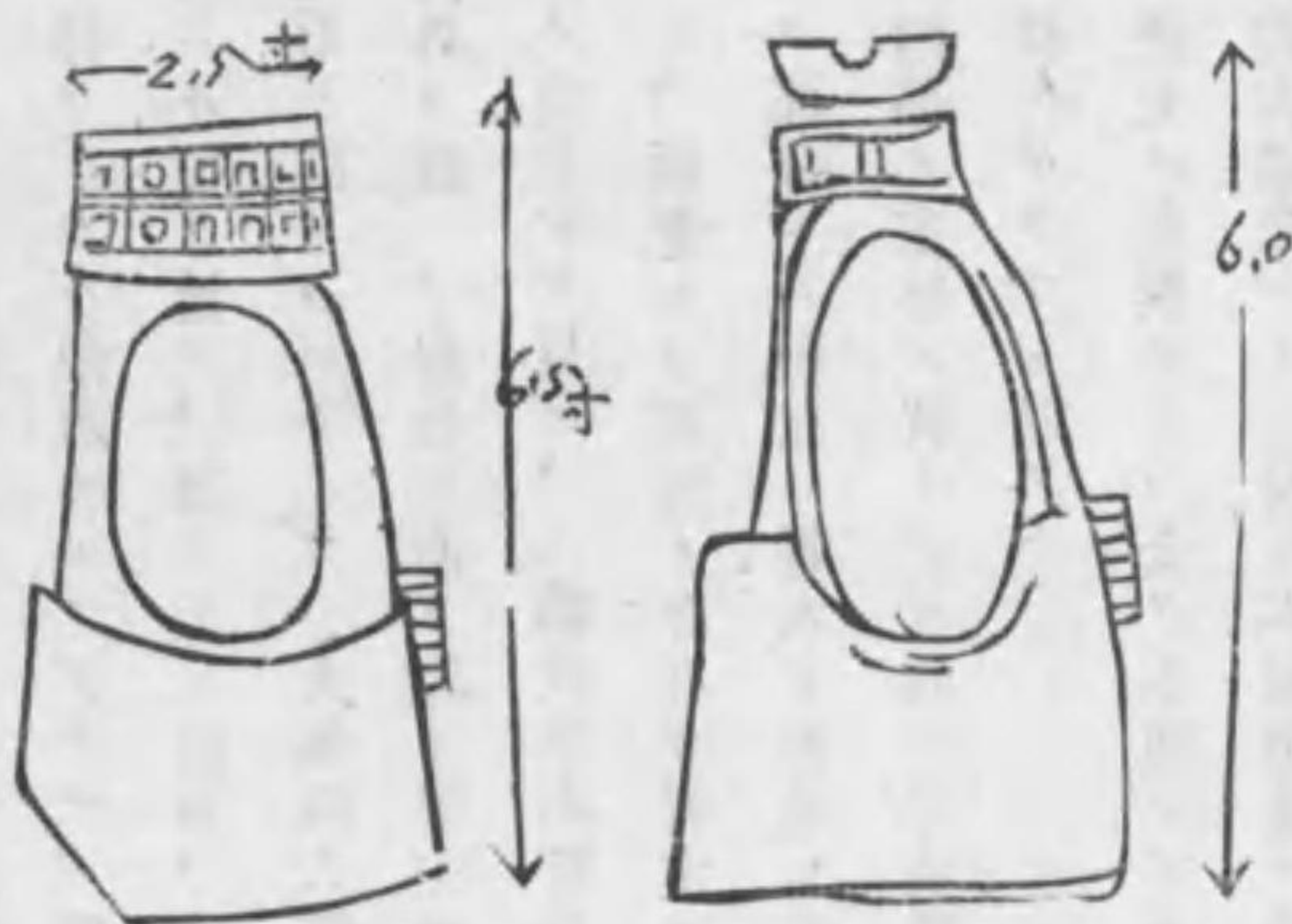
八幡神社内ノ古墳ハ上記箱式棺ノアルに陵ノ東北麓ニ近イ緩傾斜地ニ築カレタ西面ノ瓢形墳デ、俗ニツキ山ト云ヒ、物ヲ埋メタト云フ傳説ヲ持ツテキル顯著ナモノデアアル。現在デハ後圓ノ背後ヲ削ツテ其ノ處ニ祠ニ附屬シタ建物ヲ設ケ、中央ノクビレ目ニ小徑ヲ通ジ、加フルニ前方、後圓ノ兩者トモ所々ヲ開墾シテ畑地トシタ爲、形ガ崩レテ坂ノ市ノ龜塚ノ如キ完形ハ認メラレナイガ、大体第六圖ニ示ス様ナ外形ヲシテキテ、前後ノ長サ三十間ニ近ク、前右部ノ高サ一間半内外ヲ數ヘ、割合ニ前ノ廣イ形デアツタコトガ推サルルシ、マタ南側ハ丘陵トノ間幅十間位ガ一段低クテ掘リ割リノ痕ラシク見エ、八幡社掌小野珍夫氏ノ告グル處ノ、塚ノ東北ニモト池ガ存在シタト云フ事ガ確カデアアルトスルト、兩者カラ周涅ノ存在ガ肯定セラルルワケデアアル。

後圓ノ中心部ト前方ノ遺存シタ部分トハ現在ハ雜木ガ密生シテ調査甚ダ困難デアツタノデ、表面ニ於ケル葺石ヤ埴輪圓筒ノ有無ハモトヨリ、内部ノ主鉢ニ就イテモ殆ンド資料ヲ見出シ得アカツタ。然シ後者ハ石室ナドノ存スルモノデナイコトダケハ云ヒ得ルダラウト思フ。

ソシテ風デアアルカラ副葬品ノ發見ノ有無ナドハ全ク不明デアアルガ、ココニ特記ニ値スルノハ本古墳調査後日名子氏カラ借用シタ後藤碩田ノ「尙古延壽」ノ一冊ニ本村出土ト推定セラルル狐ノ鍬石二個ト立派ナ漢式鏡一面ト

ノ拓影が載セラレタコトデアル。此ノ「尙古延壽」ト云フノハ三冊アツテ、碩田ガ獲タ古物ノ摺形ヲハリコンダ帖子デ、如上ノ遺品ハ其ノ一冊ノ末葉ニ

本州海部郡神崎海岸院所藏神代物押形並漢鏡破一面  
トシテ、第七圖ニ略圖ヲ載セタ様ナ、長六寸、六寸五分トノ二個ノ狐ノ鍬形石ノ拓影ヲ收メテソノ一ニ



石鍬ノ狐藏院岸海崎神後豊 圖五第

黒質玉造而作之

ト注シ、マタ徑五寸五分位ト推定セラルル漢鏡ノ破片七八個ノ摺形ヲ載セテ

此外玉石多カレトモ元ノ古墳ニ埋メシト云ヒ、此墳墓ヲ掘キシハ文久三年ノ頃トゾ

トシテ、慶應三年卯、十二月後藤眞守ト自署シテキル。鏡ハ破碎シテキルガ上ニ摺形ガ拙ナノデ全構圖ハ明デナイガ平縁式ノ神獸鏡ト覺シク、一段高イ外區ハ幅六分アツテ魚形ヤ禽獸ナドヲ銳利ナ線デ表ハシキル處、後漢頃ノ遺品ト認メラルモノニ近イ。

今マコノ兩者ヲ見ルニ共ニ畿内ノ古式墳墓ニ多イ副葬品デアツテ、ソレガ豊後で見出サレタ事實ガ先ヅ私共ノ感興ヲ惹クノデアルガ、神崎ノ地ニ上ニ記シタ様ナ前方後圓内墳ガ存スル事ニ思ヒ併セルト、二者ガ同古墳ノ遺物デアアルマイカトノ疑念ハ何人ニモ起ル處デアツテ、他ニ特ニ古墳ノ著シイモノノナイコト、上述ノ如クツキ山ニ古物ヲ埋メタトノ傳ヘトハ此ノ推測ヲ理由ヅケル様ニ見エ、前者ノ史蹟トシテノ價值ヲ大イニ高ムルコトニナル次第デアル。

四

以上ハ私ノ見タ二地ノ古墳ノ概略デアルガ、サテ是等ヲ通觀シテ感ズルノハ、大分灣ノ南岸ニケ所ニ前方後圓墳ガ相並ビ存シテ、其ノ一ハ最モ整美シタ形式ヲ示シ、他ノ一カラハ畿内ニ於ケル古式墳墓ノ副葬品中特殊ナ色彩ヲ現ハシタ狐ノ鍬石ハ見出サレタト推定セラレテ、墓制上畿内トノ密接ナ關係ヲ肯定シ得ルコトデアル。コレ

八日向ニ於ケル古墳ノ形式ノ示ス事實ト相似テ、九州ノ西半部ナル筑肥ノソレト著シイ對照ヲナス處デ豊日カ古墳營造時ニ畿内ト同一文化圏ニアツタコトヲ想定スル有力ナ證據ヲナスモノト思フ。ガ更ニ一步ヲ進メテ觀察ヲ加フル際ニ日向ノ古墳ノ副葬品ニ比シテ豊後デ新ニ調べ得タモノガヨリ古イ遺品デアルコトハ、前方後圓ノ起源ノ畿内ニアリト認ムベキ學說ト併セ見テ、右ノ文化圏ナルモノガ、大和朝廷ノ皇威ノ發展ト共ニ波及シタ地域ヲ示スモノト解スルノ至當ナモノヲ考ヘシムルヤニ見ユル。ソシテ近時漸次調査ノ歩ヲ進メテキル瀬戸内ノ古式墳墓ニ關スル知見ニ依ルニ、ゴク大体デハアルガ、前方後圓ナル特殊ノ形ヲ取ツタ塚ト、ソノ副葬品トカラ、ソノ文化發展ノ痕ガ微證セラルル曙光ヲ認メ得ル様ニナリツツアル。此ノ點カラ云フト神崎出土ノ神獸鏡ニシテ右ノツキ山カラ出土シタ推定ガ當レリトセバ、ココニ年代上ノ一基準ガ得ラルル事ニナツテ、該遺跡ガ單ニ地方史蹟トシテ尊重スベキノミナラズ、マタ上代ノ我が國ノ開發ヲ考フル上ニモ重要ナ位置ヲ占ムルモノト云ハナケレバナラナイ。タダ該遺物發見ノ年ガ文久三年デアルト云ヒ、今マヤ遺物ノ存在スル明デナイカラ、塚トノ確カナ關係ヲ知り能ハナイノヲ憾トスル。此ノ小編ガ幸ニ當局ノ注意ヲ惹イテ、同古墳ノ學術調査行ハレル様ナコトナルノヲ切ニ望ム次第デアル。擲筆ニ當ツテ日名子太郎氏ニ對シテ感謝ノ意ヲ表スル。

一名稱

風ノ磐窟

二所在地

南海部郡八幡村大字戸穴字宇土

三 地目

神社地

四 地積

六反貳畝十三步

五 所有者ノ住所氏名

八幡村神社宇土神社

六 所有者ノ外管理者若クハ占有者アルトキハ其住所氏名

村社宇土神社ハ祭神鷦鷯草葺不台尊ニシテ神城六反貳畝十三步ハ官有地第一種ニシテ境外タリシ山林八反四畝廿八步ハ神社ニ買取リ今神社ノ所有ニ屬セリ

七 工作物其他ノ物件物質形狀構造大小數量

彦山麓ヨリ登ルコト十町許生子川ノ水源ナル磐淵上石灰質巖頭ニ雄大ノ洞窟在リ洞口西南ニ開ケテ東北ニ穿入シ入ルコト十間許ノ所ヨリ稍北位ニ曲向シ深サ二十間餘ニ達ス洞口ハ廣サ二間半高サ五尺餘ナルモ洞内ハ

廣狹一ナラズ又兩壁ノ處々横線ヲ穿テ恰モ棚ヲ作レルガ如キモノアリ雙壁天井ハ巖石ナルニ反シ地面ハヤハラカナル土ヲ厚ク敷結メ甚ダ平ラカナリ漸ク進メハ天井切迫シテ甚ダ低ク僅カニ匍匐シテ過ク之ヲ過レバ又廣淵ナル處アリ別紙縦断面及平面圖ヲ副ニ參照ノ料トス

### 八 現 狀

宇土神社ハ初メ宇土權境ト呼ビ洞口ニ社殿在シモ地域狹隘ニシテ危險ナルヨリ後十間許ノ下ニ移シ現時ハ霧谷ヨリ洞口迄數十級ノ石段ヲ作り側ニ鐵鎖ヲ垂下シ以テ攀躋ノ便ニ供ス洞口上部ノ巖碑ヨリ白色ニシテ恰モ乳汁ノ如キモノ滴々トシテ落ツ俗之ヲ神ノ乳ト呼ビ乳ノ乏シキ婦女等遐邇參拜シテ利益ヲ祈ル者多シト云フ

### 九 由來傳説等

此洞窟ハ大古穴居ノ時代土蜘蛛ノ住居シタル所ニシテ今戸穴ト云フ村名モ其レニ起因セル名稱ナリ此穴ハ遠ク蒲戸ノ岬マデ通ジテ昔ハ穴戸ノ岬ト稱シタリ穴戸ノ岬地方ハ景行天皇ノ御子兄彥命ノ主ハギ給ヒシ所ニシテ山ヲ彦嶽島ヲ彦島ト云フモ其故ナリ今モ穴戸坂ノ名ハ存シタリ云々

### 十 徵證物件

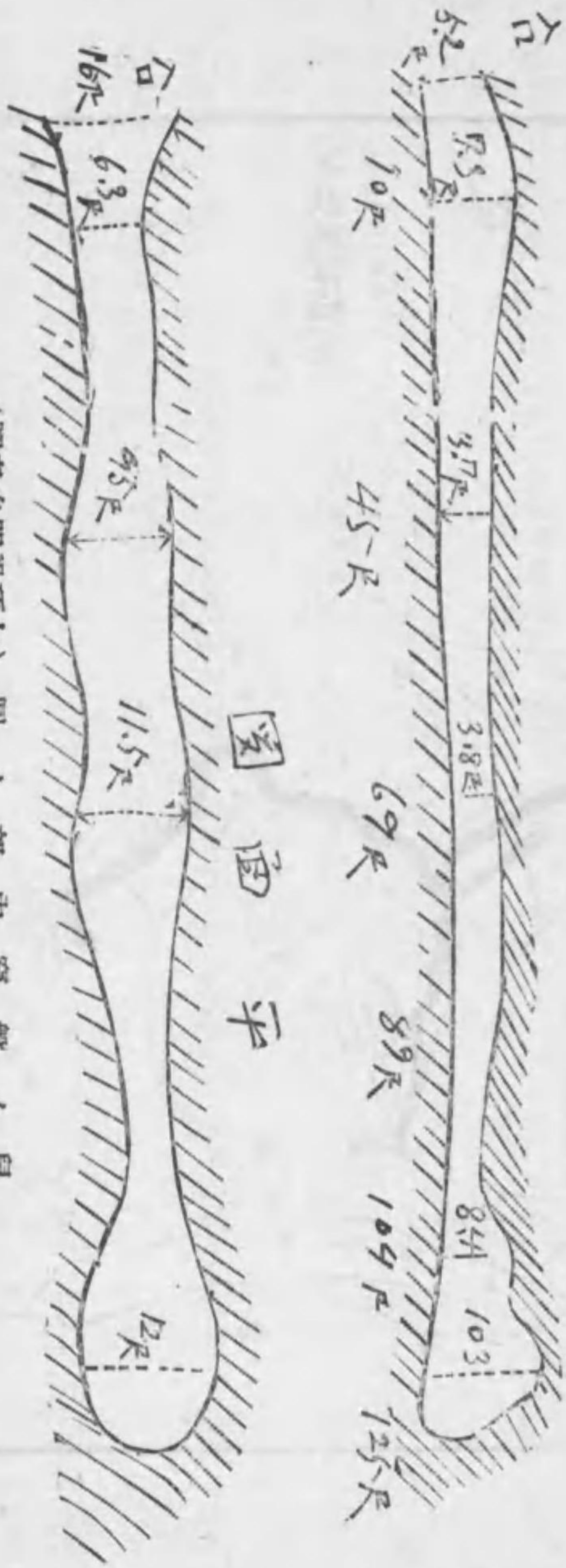
豐後風土記曰、昔者經向日代宮御宇天皇、景行天皇欲誅玖磨嚙啖、行幸於筑紫、從周防國佐婆津發船、而渡泊於海部郡宮浦時、於此村有女人、名曰速津媛、爲其處之長、即聞天皇行幸、親自奉迎奏言、此有大磐窟、名曰

鼠磐窟、土蜘蛛二人住之、其名曰青、白、又於直入郡禰野有土蜘蛛三人、其名曰打猿、八田、國摩侶、是五人竝爲人強暴、衆類亦多在、悉談云、不從皇命、若強喚者、與兵距着於豎天皇遣兵遮其要害、悉誅滅

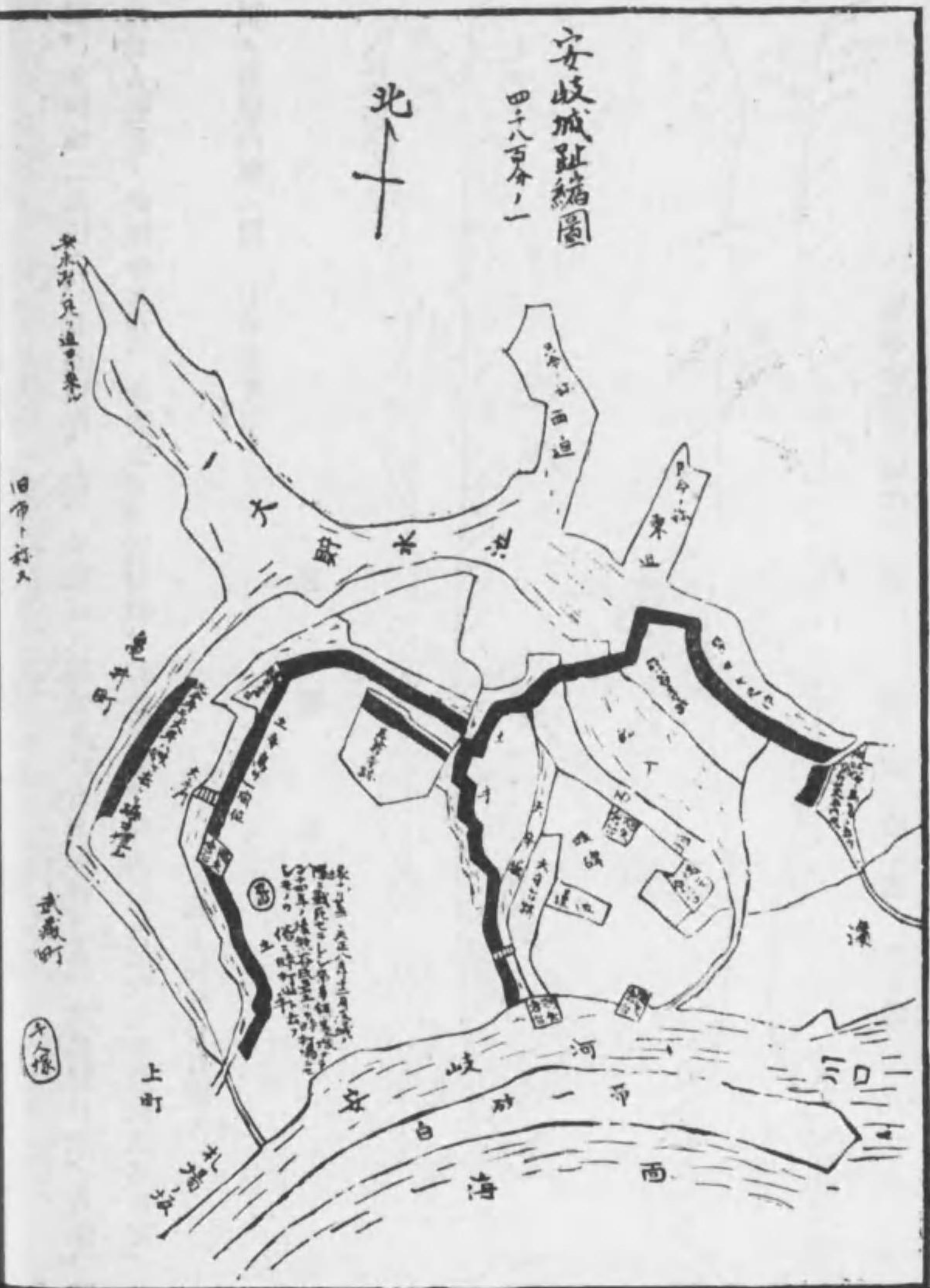
(以上佐藤委員報告)

鼠ノ磐窟内部ノ圖 七項參考圖

面 圖 表



(圖考參明設頂七) 圖ノ部内窟磐ノ鼠



一名稱

安岐城跡

二所在地

東國東郡安岐町大字下原字古城

三 地目

社地、宅地、田、畑、山林、原野、雜種地、溜池、池沼

四 地積

社地一、一〇七 溜池〇、四〇三 田六三、〇〇三 畑四七、〇二四 山林一二、八一七 原野一、九一八 雜種地四、七二四 池沼〇、四二四 合計一三一、六二〇 宅地五三〇七坪六九 總計坪數四四、八〇七坪六九

五 所有者ノ住所氏名

官有地(社地、溜池) 社有地、東國東郡有地(國東輕鐵用地) 字古城共有地、數個人共有地、各個人所有地 百數十人ニ村省略(名寄帳安部委員ノ手許ニアリ)

六 所有者ノ外管理者若クハ占有者アル時ハ其ノ住所氏名

安岐城碑管理者 古城青年團

### 七 工作物其ノ他ノ物件ノ物質形狀構造大小數量

城趾ヲ證明スル唯一ノ工作物トシテハ明治三十八年舊杵築藩士堀木公子ノ撰スル「安岐城ノ碑」ニシテ舊城天守臺跡ト隅矢倉臺トノ間ニアリ四重ノ臺石ノ上ニ長方形（高サ四尺幅一尺）ノ石ノ礎ヲ建テ其ノ正面ニ「安岐城碑」ノ四字ヲ刻シ碑陰ニ別紙ノ碑文ヲ刻セルモノニシテ碑ノ附近ハ現今遊園トナシアリ又舊天守臺ノ跡ニ無格社天滿社（大字下原字古城）アリ傳ヘ言フ田原氏築城ノ時鎮守ノ神トシテ勸請シ世々崇敬セラレシモ後世兵亂相繼ギ遂ニ頽廢ニ及ビシテ古城住民移住ノ後凡七十年ヲ經テ寶永二年今ノ天守臺上ニ奉遷シタルナリトノ來歴ヲ有スル神社ト其ノ神社ノ境内ニアル亭々タル松柏トナリ而シテ別紙添附ノ安岐城趾縮圖ニ記載セル舊城濠城廓及ビ隅矢倉臺ノ跡等ノ一部ニシテ其他遺蹟ヲ留メズ

### 八 現 狀

城跡ハ安岐町大字下原字古城安岐川口ノ北岸ニアリテ東南ハ海ニ臨メリ前記ノ天滿社境内及ビ城碑所在ノ遊園地並ニ滄臺ノ遺蹟ヲ除ク外大部分民有宅地及ビ耕地ト變ジ僅カニ舊城址ノ東南隅大字下原字本丸ニアル山林貳拾步（持主天滿社）アル而已（別紙添附ノ安岐城趾縮圖參照）

### 九 由來傳説等

今ヲ距ルコト七百余年前田原泰廣（大友能直ノ十二子）築城以降累代ノ居城タリシガ十五世ノ孫親貫ニ至リ

宗家豊府ニ叛キ援ヲ秋月、龍造寺氏ニ請ヒ自ラ田原鞍掛城（西國東郡田原村）ニ據リ其ノ臣奈多鎮基等ヲシテ安岐城ヲ守ラシム大友義鎮ノ長子義統目ヲ將トシテ之ヲ攻メ木付城主鎮秀ヲシテ安岐城ニ向ハシム義統ノ臣吉弘統幸等力戰シテ鞍掛城ヲ陷レ親貫自殺ス安岐城ノ守將奈多鎮基木付鎮秀ト據屋ニ戰ヒ鎮秀父子ヲ獲タレドモ大友氏ノ大兵來リ攻ムルニ及ビ城遂ニ陷ル是ニ於テ義鎮八坂甚太郎ヲシテ之ヲ守ラシム文祿二年義統國除ノ後豊臣公熊谷直陳ヲシテ此城ニ封ゼシカ慶長年間關ヶ原ノ役西軍ニ属シ美濃大垣ニ戰歿シ城遂ニ黒田如水（當時中津城主後福岡城主トナル）ノ陷ル處トナレリト云フ直陳ハ熊谷直實ノ後裔ナリ

武士の屍は苔に埋れて

麻生 公道

名のみを永く残す古城

村路斜巡登古城。 百年事往弘農耕。

蓮池水澗放散盡。 井口塵深煙草生。

佇立疑看樓閣跡。 徘徊怪問園圃名。

嘆咸陽一成原野。 山海依然自悼情。

拙 齋 諏 訪 寛 村

### 一〇 徵證物件

舊城址ノ圖、安岐城址ノ碑、無格社天滿社、舊城濠ノ遺蹟等其ノ他城壘ノ跡



一 指定ノ事由

古城跡及ビ古戰場保存ノ必要上指定ヲ要ス

一二 保存方法

現今ノ天滿社(舊天守臺跡)境内ニ長サ一間幅一尺角ノ石材ヲ以テ之ニ城跡タルヲ彫刻セル標柱ヲ建設シ且ツ舊城址ノ四隅ニ同一ノ石材ヲ以テ舊城區域内ノ地積及ビ四方ノ距離ヲ彫刻セル標柱ヲ建設スル事

一三 保存ノ方法ニ對スル費用概算

約貳百五拾圓

一四 其他參考事項

- 1、田原家系譜
- 2、豐陽志
- 3、諏訪拙齋翁ノ遊記(閑居口號)
- 4、片山家記錄安岐城跡記
- 5、安岐城址開墾並ニ古城村起因由來記

安岐城碑

寫

豐後東國東郡安岐町東北隅有一城。人曰古城。傳言昔大友能直。分地於其第十一子秦廣。食田原安岐別府三邑。秦廣築城以居。因氏稱田原。秦廣後改城干而徙居則也。傳子孫十有余世有故之也。豐臣氏臣熊谷直陳繼居。食邑

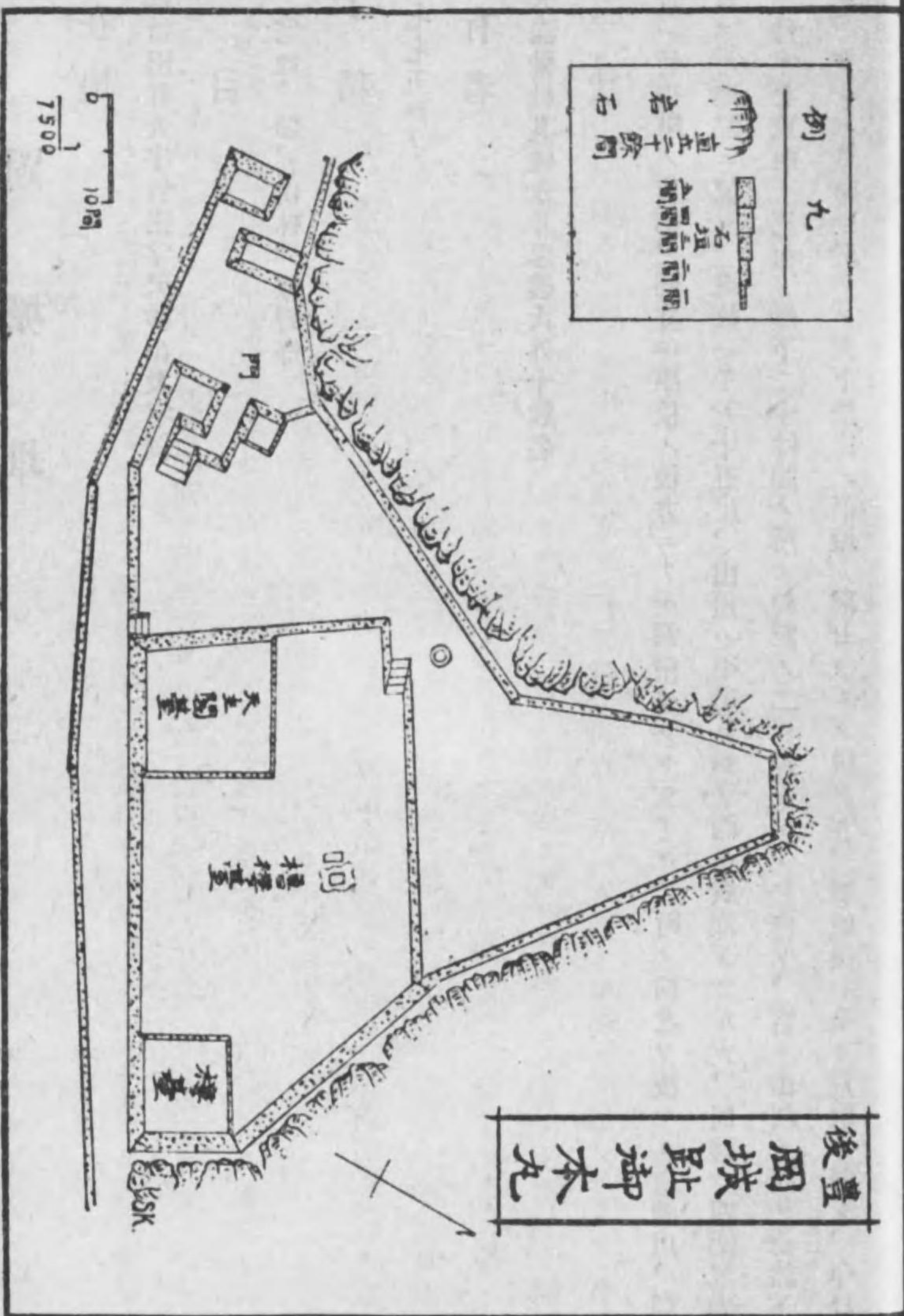
五萬石。又一書曰四萬石。二萬石在豐後。二萬石在近江。與石田三成成婚。應長五年九月。美濃關原之役。黨三成戰死干大垣。是時直陳叔父熊谷外記。以兵七百有余人留守城。筑前黑田如水。遣臣栗山四郎右衛門等。率師來攻。勢甚猖獗。不能桓遂納降。城陷。直陳爲熊谷直實裔。歿法諡曰熊谷院殿直翁宗陳大居士。後三年加藤忠廣。護罪於德川氏國除。其遺臣六人來就城址。闢地爲田以居焉。今所在。足柄。神取。原。佐藤。河野。吉田等祖也。戶口稍繁庶。爲一聚落。名曰古城村。足柄又左衛門爲村正。寬文二年。爲杵築侯封地。請官檢田。定爲額六十七石。後又兩子村人丸尾某。來往爲一戶。城內本有菅公神祠。寬延二年九月。村正足柄久衛門。改作祠於別地。春秋行祭。至今弗絕云。今茲明治三十八年十月。足柄種吉與村人謀。立碑來請余文記之。余嘉其志。以叙之梗槩而與焉

明治三十八年乙巳十月一日

舊杵築藩士荒木公子撰并書

(以上安部委員報告)





# 岡城址

六一

## 一 所在地

直入郡竹田町大字竹田字天神山及字岡

## 二 地目

神地、宅地、畑、山林、原野等

## 三 地積

七八、七七五坪？

## 四 所有者

村社天満神社其他永井忠義氏外十數名

## 五 現狀

岡城址ハ竹田町ノ東部、縣立中學校ノ後方ニアル翠巒ガソレデアアル。町ノ南北ヲ流ル、白瀧川、稻華川ニ流  
ノ相貫スル地點ニ位シ、海拔一千七十五尺、山頂ハ平夷ニシテ而モ廣濶デアアルガ、周邊ハ四圍皆巖壁ヲ  
ナシ、殊ニ北東南ノ三面ハ崖下二十餘間ノ所ニ前記ノ二川涼々トシテ遠リ、實ニ山河ノ固メ巍然トシテ要害  
デアアル。サレバ昔時ニ於テハ天下無比ノ堅城ト稱セラレテ居タガ、廢城後ハ全ク荒廢ニ歸シ、今日デハ萊草

茫々タル間ニ只斷垣殘礎ヲ留ムルノミデアアル。(城址ノ寫眞參照)

當城址ニ於テ字天神山ト稱スル處ハモト本丸、字岡ト稱スル處ハ二之丸デアツタ。舊藩時代ニハ本丸ニハ單  
ニ本丸御番トイフ者ガ守衛シタバカリデ、藩主ノ居館ヤ藩廳等ハスペテ二之丸ニアツタ。今縣立中學校ノ裏  
ヨリ舊態依然タル登城道ヲ上ルト、大手門ノ石疊高ク左右ニ殘ツテ間ヲ過ギテ先ヅ二之丸ノ址ニ出ル。上ツ  
テ左手ノクルソト稱スル所ニ藩主ノ居館ガアリ、又櫻ノ馬場ト稱スル所ニ老職ノ詰所ガアツタ。今是等ノ址ハ  
畑或ハ原野ニナツテ居ルガ。所有者ノ永井忠義氏ハ曾テ此ノ邊リヲ公園式ニセンモノト、櫻、桃等ノ花木ヲ  
植エ込シダガ、位置僻在シ且ツ足場惡キ爲カ餘リ遊覽者ガナイノデ、遂ニ其ノ企畫モ中止ノ姿ニナツタトイ  
フコトデアアル。然シ花木ハ猶其ノマ、ニ存シテ居ル。二之丸ヨリ進ンデ本丸址ニ行クト、雜草離々タル裡ニ  
本丸門、天守閣、櫓臺等ノ廢墟ガアル。其ノ中央ニハ明治二十年五月ニ建設シタ岡城址之碑ガ立ツテ居ル。

其ノ他本丸ノ西方ニハ昔カラアル空井戸モ殘ツテ居ル。(本丸平面圖參照)

今山下公園ニ鎮座スル中川神社ハ、モト此處ニアツタ御新宮ヲ廢城後明治五年四月八日遷祀シタモノデ、舊  
宮地ハ今ハ竹山ニナツテ居ル。又當地所ノ所有者タル大字竹田字向丁ニ鎮座スル天満神社モ、モト矢張り此  
處ニアツタモノデ、現在ノ地ニ遷座シタノハ明治四十三年四月十八日ノコトデアアル。今此ノ地ヲ字天神山ト  
稱スルノモ、カヤウナ關係カラデアアル。

本丸カラノ眺望ハ眞箇雄大ナル一大パノラマデアアル。北ハ香カニ由布ノ秀嶺ヲ望ミ、西北ニハ九州アルプス

ノ九重、大船、黒岳等ノ大嶽高嶺重疊シ、三宅山一帶近ク目前ニアリ、續イテ西ニハ阿蘇山ヲ主峰トシテ猫岳、萩岳ノ層巒峙チ、東南ノ空ニハ祖母山、傾山巍峨トシテ聳エ、ソレヨリ東ニ向ツテハ鎧、烏帽子、神角寺ノ諸山蜿蜒トシテ連亘シ、景観真ニ壯絶ノ限リデアル。更ニ俯瞰スレバ、峻峯百尺ノ下白瀧稻葉ノ清流巖ニ激スルアリテ、幽邃ナル河谷ノ景趣亦言ヒ難キモノガアル。サレバ現代ノ文豪横山健堂氏ハ、コノ岡城ヲ以テ熊本城人吉城ト共ニ、詩的趣味のノ方面ニ於テ九州ノ三名城ト推奨サレテ居ル。

### 六 由來傳説等

#### 築城

岡城ハ豊後國志ニ「文治元年緒方惟榮始設壘爲堡而不居」トアリ、岡城址之碑ニハ此ノ事情ニ就テ「父老相傳曰、岡城者往昔源義經將西下、緒方二郎惟榮築堡此山以待、義經遂不果焉」ト記シテアル。次デ建武中大友氏ノ族志賀貞朝（大友能直ノ第八子能卿ノ嫡孫ニテ初メ忠能トイヒ藏人ト稱ス）コノ舊堡ヲ修メテ規模ヲ廣大ニシ、以テ岡城ト名ケ、子孫世々コ、ニ居ルトイフ。岡城ノ名ニ就テハ大日本地名辭書ニ初メ緒方惟榮築壘ノ時、惟榮ハ大神氏ナルヨリ大神城ト稱シテ居タ、コレガ轉訛シテ岡城トナツタノデアルトイフ説ヲ載セテアリ、又志賀家譜ニハ「建武元年貞朝奉ニ後醍醐帝宣旨數有ニ戦功ニ就ニ直入天神山ニ修築舊壘ニ稱ニ岡城ニ世居レ焉」ト見エテ居ル。是等ニヨツテ知ラレル通り、志賀氏時代ノ岡城ハ今ノ字天神山デアツタ。而シテ其ノ居館ハ中川神社ノアツタ邊ヲデアリ、又大手口ハ中川氏時代ノ下原口デアツタトノコトデアル。

文祿二年大友氏國除サル、ニ及ビ、時ノ岡城主タリシ志賀親次モ亦城ヲ棄テ、去リ、（以下中川家年譜ニヨル）同年十一月九日中川修理大夫秀成播州三木ヨリコ、ニ移封セラレタ。秀成ハ翌文祿三年正月二十五日三木ヲ發シ、二月八日速見郡小浦ニ着シ、十三日コ、ニ入城シタガ、城内甚ダ狹隘デアツタノデ、此年ヨリ早速城普請ニ着手シタ。工事ニ關スル各係員ハ左ノ如クデアツタ。

- 城繩張
- 石田 鶴 右衛門
- 三宅 六郎 兵衛
- 山岸 金 右衛門
- 大手石垣普請奉行
- 櫻井 五 兵衛
- 石引奉行
- 野尻 傳 兵衛
- 普請中警衛
- 村上 太郎 兵衛

城普請中秀成ハ櫻馬場ノ地へ假住居サレテ居タ。峻峻ナ山上へノ築城ハ如何バカリ難工事デアツタラウカソレデモ三年ヲ費シテ應長元年城普請ハ竣成シタ。

#### 規模

中川氏築城ノ岡城ハ、志賀氏時代ノ岡城タリシ天神山ヲ本丸トシ、其ノ西方字岡ノ地ヲ二之丸トシタ。ソシテ城郭ノ地形ガ恰モ牛ノ臥シタ狀ニ似テ居ルカラトテ、一ニ臥牛城ト稱シタ。二之丸ノ地ハモト岡村ト稱シ

十數軒ノ農家ガアツタガ、城普請ノ時之ヲ今ノ大野郡東大野村字片島ノ地ニ轉居サセテ、初メ此處ヲ土屋敷トシタトイフコトデアアル。而シテ岡村ノ方ニ新タニ大手門ヲ設ケ、志賀氏時代ノ大手口ヲ掘手トシテ、コ、ニ下原門ヲ置キ、別ニ北方ニ近戸門ヲ設ケテ三口トシタ。但シ當時ノ大手門ハ今存シテ居ル大手門ノ位置ヨリ稍々上ニアツテ東向デアツタ。トコロガ某年加藤清正ガ當城ニ來ラレタ時、東向ノ不可ナルヲ注意サレタトカデ、之ヲ今ノ位置ニ下ゲテ西向ニ改メタトイフ。中川家年譜ニヨレバ應長十八年ニ大手門ト今ノ虎口ニ改メ、モトノ場所ヲ古大手ト呼ブヤウニナツタトアル。

廢城前ニ於ケル岡城ハ寫眞ニ見ユル如ク洵ニ堂々タルモノデアツタ。コノ寫眞ハ本丸ノ南面ヨリ撮ツタモノデ中央ノ三層櫓ハ言フマデモナク天守閣、ソレヨリ左ニ順次ニ角櫓、天守番詰所、本丸門、オ太鼓櫓ト相並ンデアアル。想ヒ起ス封建ノ世、豊後七藩ノ筆頭タル岡藩七萬石ノ城下ヲ象徴スル三層ノ天守閣ガ、白瀧川ニ臨ンデ峻壁百尺ノ崖頭ニ巍々トシテ聳エ立ツテ居タ風光ハ、恰モ今日日本ライン木曾ノ清流ニ臨ンデ、十數丈ノ斷崖上ニ舊時ノマ、ニ存スル尾州犬山城ニ於ケル如キモノデアツタカト思フ。

城主

城主	年	代	期	間	租	額	備	考
志賀氏	自	建武元年		二百六十年			貞朝ヨリ親次マデ十七代間	
中川氏	自	文祿三年		二百七十八年			秀成ヨリ久昭マデ十二代間	
	至	文祿三年				七萬四百四十石		
	至	明治四年						

城史

岡城ニ關スル事蹟トシテハ、天正十四年薩軍主將島津義珍ノ來攻事件ヲ以テ最トスル。時ノ岡城主ハ勇武仁俠ヲ以テ聞エタ志賀親次、生年未ダ十七歳ノ年少デアツタガ、父道輝ノ薩軍ニ内應シタルニ拘ラズ、敢然トシテ義ニ殉ジ、其ノ祖父道輝ト與ニ岡城ヲ守ツタ。豊薩軍記ニ曰ク、

薩軍ニ稻富新助トイフ者アリ。天正十二年肥後花ノ山並ニ高森ノ城ニ於テ負軍ヲナシ、義久ノ覺疏々シク無念骨髓ニ徹リ居タリ。一族郎等五千餘ヲ引卒シテ、岡城ノ邊片ヶ瀬原ニ出張ス。親次之ヲ聞キ、老臣等ヲ集メテ曰ク、我先祖ヨリ當郡ヲ領シテ代々敵ヲ靡カシ、城ヲ屠ルコトアリシトハ雖モ、未ダ敵ニ致サズ然ルニ今薩州ノ奴原館ノ邊境ニ亂入スルコソ存外ナレ、暫モ閣クベカラズ、急ギ馳向ツテ賊散ラスベシトテ、輕卒三百餘人ニ鐵砲ヲ持タセ、追手口滑瀬ノ橋ノ邊リニ向ハシメケル。此所ニ兼テヨリ河邊ニ堤ヲ築キ、矢隙ヲ明ケ置キタルニ三百挺ノ筒ヲ伏セ、鳴ヲ靜メテ居タリケル。カクトハ知ラズ稻富ガ先驅ノ足輕五百人橋ノ邊リニ至リケルヲ、時分ハヨキゾト足輕大將下知スレバ、待チ設ケタル三百挺、釣瓶放シニ打カ、ル。更ニ仇矢ノアラザリケレバ、死生ハ知ラズ討タル、者許多ニゾ及ビケル。案ニ相違ヤシタリケン、片ヶ瀬原ノ難所ノ坂ヲ我先ニト引上ルヲ、岡ノ者共口々ニ稻富殿コソ先年肥後ノ高森ノ城ニテ志賀ノ勢ニ追立テラレ、這々ノ体ニテ逃ゲラレケルガ、漸ク其勞止テ、又今年モ逃ゲラルベキ爲メ御出デカトゾ言リケル。稻富終ニ引取リシヨリ以來、岡ノ城ヲ薩州勢ノ寄來ルコトナカリケリ。

城ハ天下無比ノ稱アル險要、守將ハ武略無双ト聞エタ勇將ト來テ居ルノデ、流石剽悍ナル薩州勢モ徒ニ兵ヲ損傷スルノミデ、力攻ノ甲斐史ニ見エナカツタ。ソコデ薩軍ニ於テハ内應セル志賀道輝及ビ入田宗和（直入郡姫嶽村神原城主）ヲシテ、屢々使者ヲ以テ招降ニ力メサセタガ、親次ハ病ト稱シテ一度モ會見セナカツタ。武將感狀記ニ這間ニ於ケル親次ノ意氣ニ就テ次ノ如クニ見エテ居ル。

或人親次ニ、貴殿自ラ勇氣ヲ持マル、トモ、薩人目ニ餘ル程ノ大軍ナレバ其鋒當リ難シ、身死ストモ寸補アラジ、サレバ何ノ爲ゾヤ速ニ降ルニ如カジト諫メケレバ、親次色ヲ正クシテ、年來ノ知音タラバ男夫ノ義ヲコソ勸メラルベキニ、弱ミノ異見ハ心得ズ候、主君ノ録ヲ受タル者只此一身ノミニ非ズ、妻子ヲ心安ク養テ、今日ニ至ルマデ凍餒ノ患ナシ、無事ノトキハ威ヲ爭ヒ座ヲ論ジテ、危難ニ臨ミテ忠ヲ忘レ節ヲ改メナバ人トヤ申スベキ、古ヨリ皆死セザルモノナシ、義ハ千歳朽チザル所ニ候、我息ノ絶エザラン内ニ此城ヲ敵ノ泥足ニ踏スベキヤ、唯死シテ君恩ヲ九泉ノ下ニ報ズル計リナリトイヘバ、此言ニ感ジテ親次ニ與カス。守禦ノ兵凡五六百人餘、薩人ト戰フコト度々ナリ。豊後ノ地薩州ノ爲ニ掠メラルレドモ、親次ハ岡ノ城ヲ全クス。

カクノ如クシテ親次ハ薩軍ヲシテ遂ニ一指ヲモ觸レシメズ、十二月廿二日之ヲ入田村菅迫城ニ退陣セシムルニ至ツタ。加之翌春ニ於テハ正月七日、二月十八日及ビ三月十二日ノ三回ニ亘ツテ、親次ハ敵營ヲ奇襲シ大イニ之ヲ惱マシタ。尙ホ親次ハ當時基督教ノ洗禮ヲ受ケテ居テ、教名ヲパウロト稱シテ居タガ、薩軍豊後ヨ

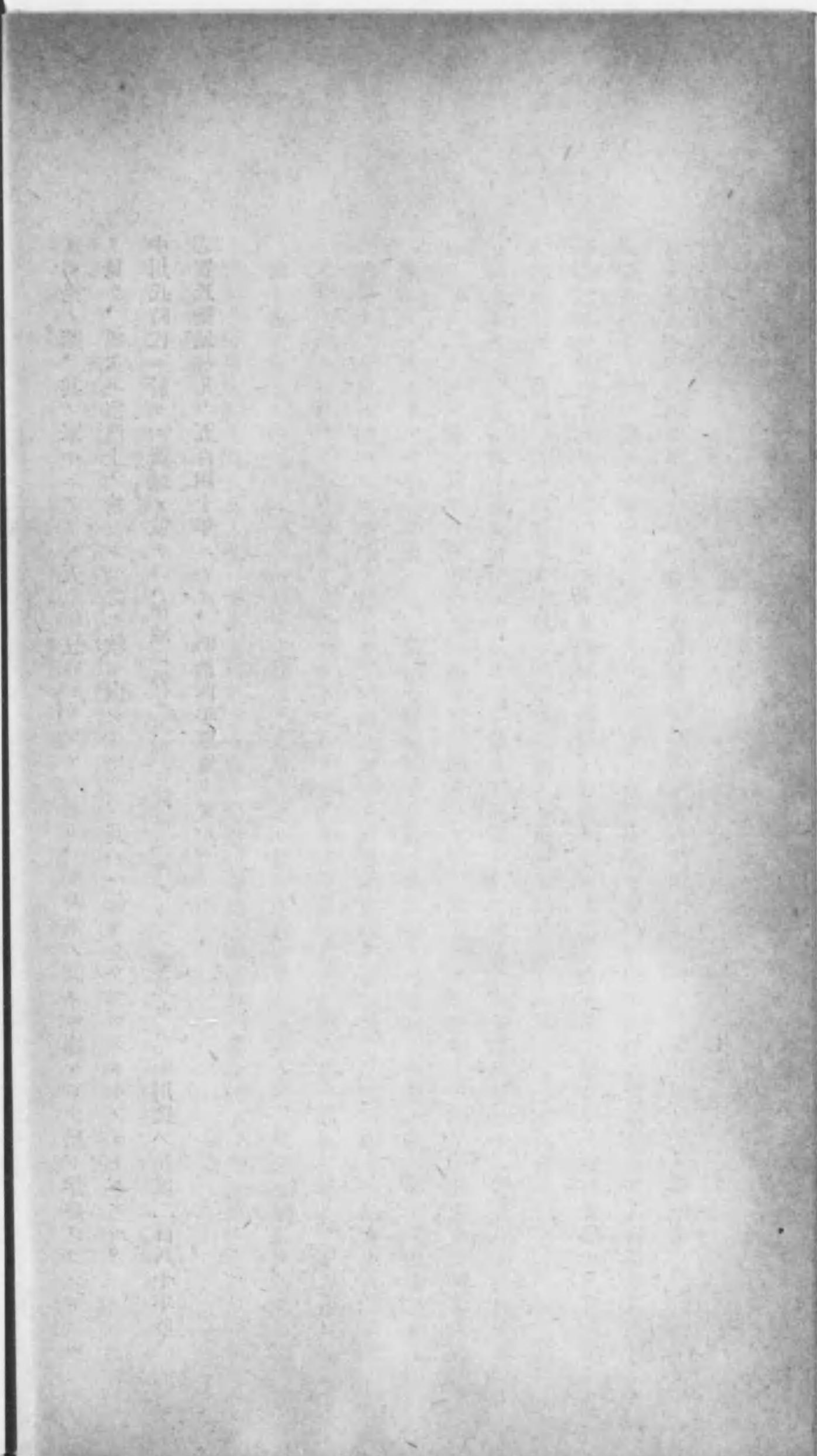
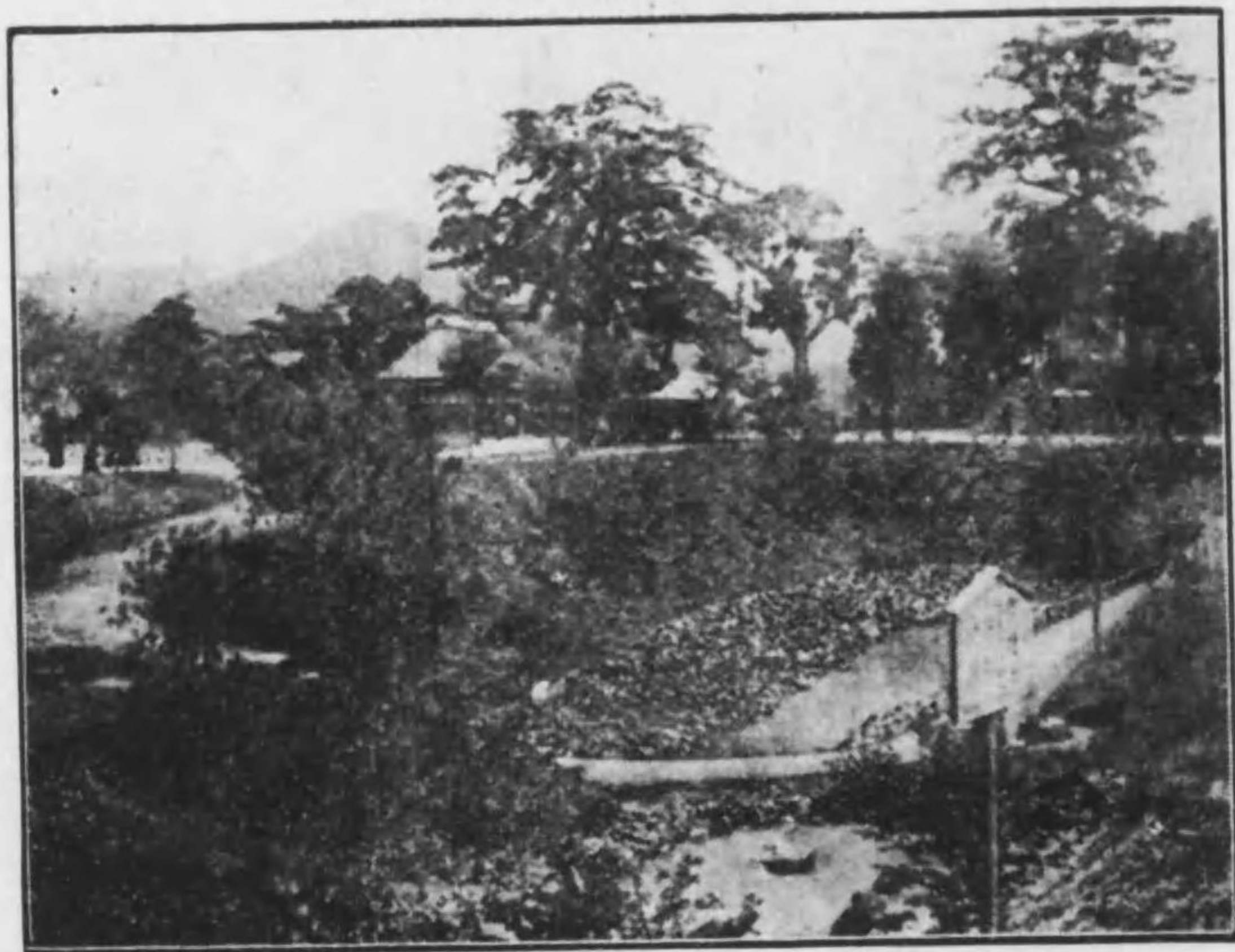
リ引揚ノ際、其ノ軍中ニアリシ天草伊豆守ジャンナル者ガ、大友軍ノ爲メニ圍マレテ殆ド俘虜タラントスルヲ見テ、親次ハ宗門上ノ情誼カラ之ヲ救ヒ出シテヤリ、其ノ一命ヲ全ウサセタトイフコトデアル。

中川氏時代ニ於ケル岡城ニ就テハ、築城以外ニハ別ニ記スベキモノヲ發見セヌ。中川氏ノ在城二百八十年餘、志賀氏築城後凡ソ五百四十年ニシテ、明治四年廢城トナル。

白杵公園時鐘樓(舊城跡)

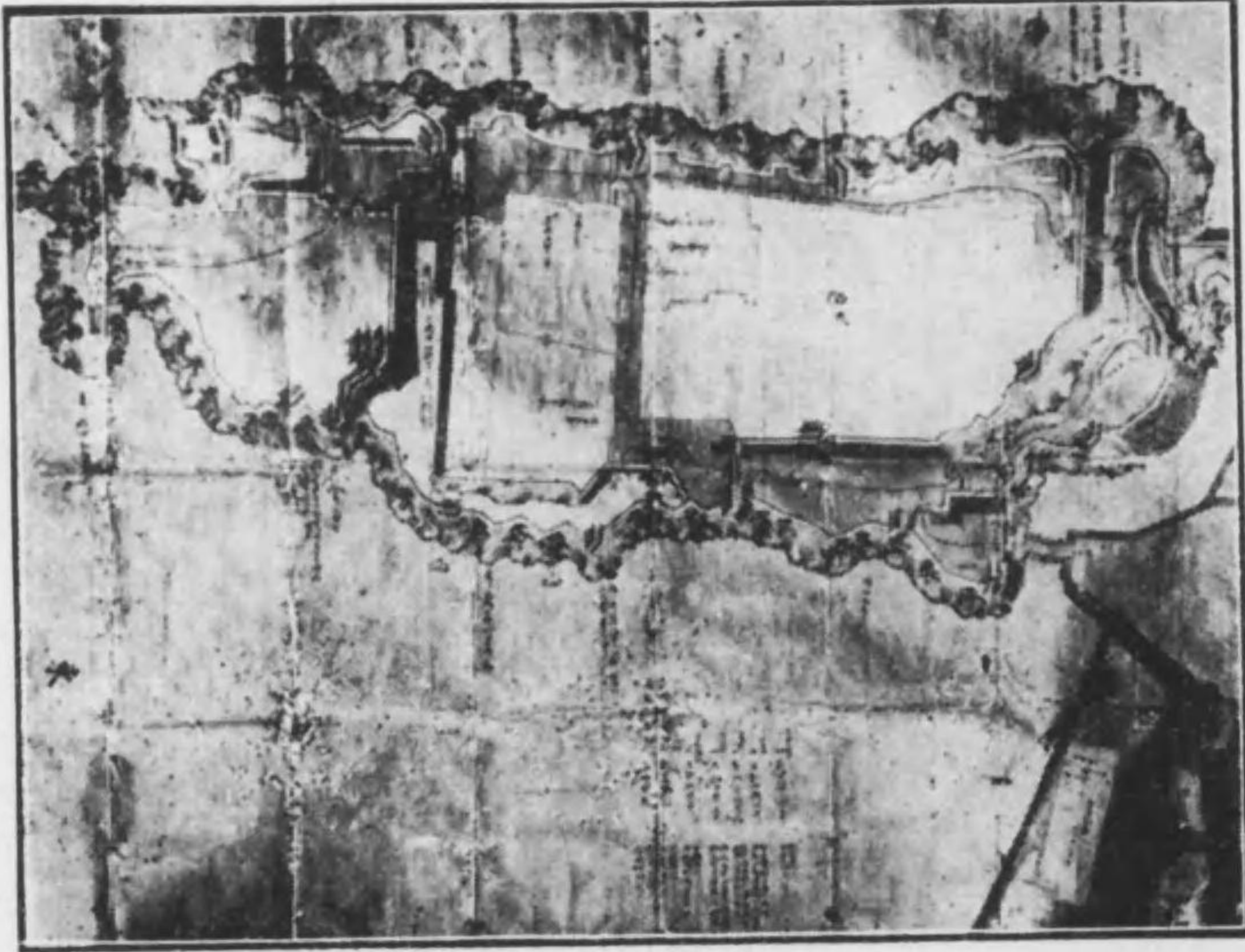


舊白杵城空壕址

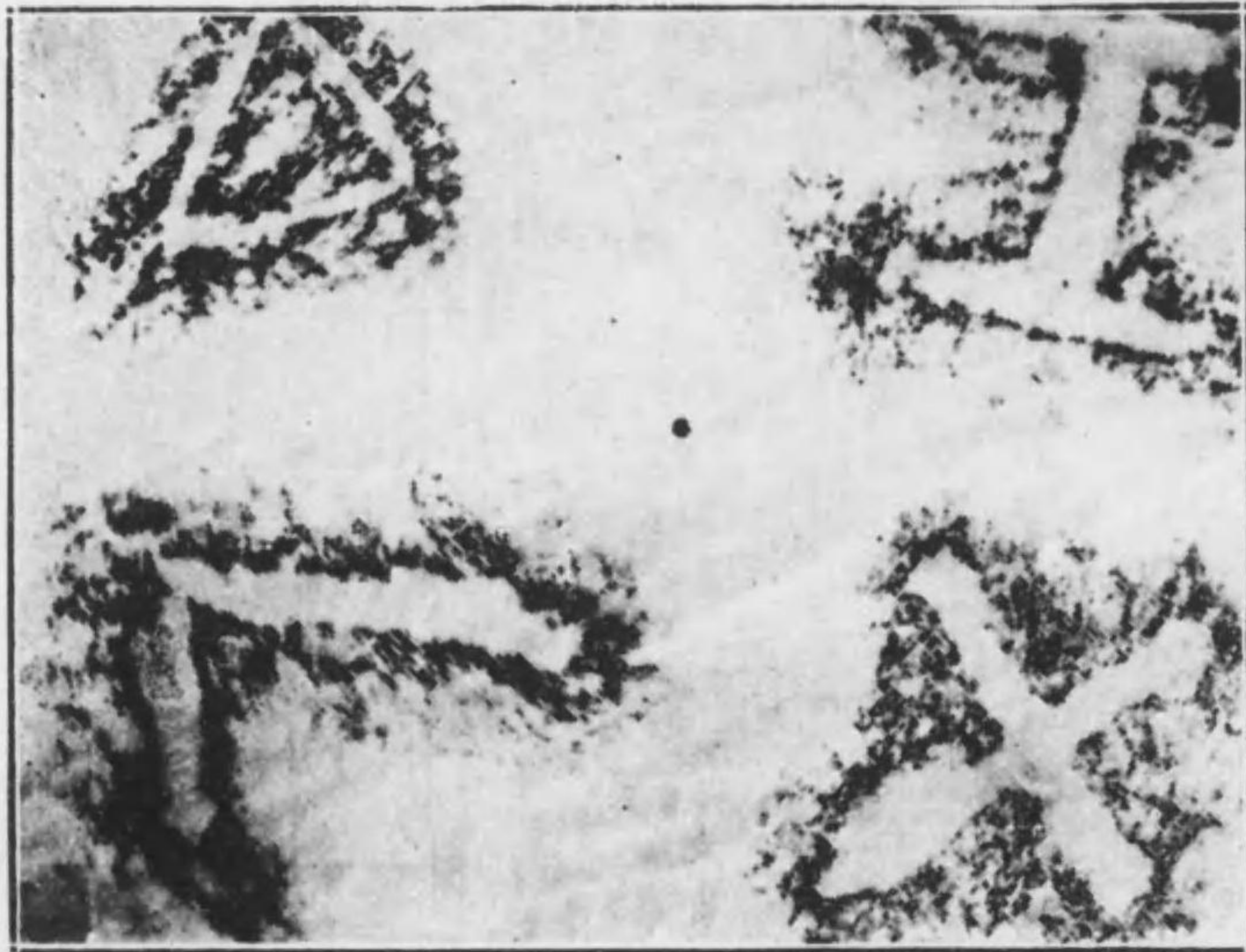




舊白杵城繪圖



舊白杵城壁文字



## ○白杵城址

### 一 所在地

北海道郡白杵町大字白杵字丹生島

### 二 地 目

公園地

### 三 地 積

一九、八五六坪

### 四 管理者

白杵町長

### 五 現 状

豊州線白杵驛ヨリ西北二町餘ノ所ニアツテ、今日杵公園ト稱シテ居ル。城地ハモト丹生島(周圍一里餘)ト稱スル白杵灣内ノ一島デアツテ「海水四方ヲ繞リ、斷崖四面ヲ擁ス」トイハレルヤウニアツタガ、現在デハ西及ビ南ノ兩面ハ埋立テラレテ、崖下直ニ市街ニ接シ、只東ト北ノ二方ノミ海ニ臨ンデ居ル。サレバ一見海岸ニ隆起セル丘陵ノ如キ觀ガアル。(圖向參照)

市街ヨリ公園ニ上ル本通りヲ進ムト、入口ニ古橋トイフ石橋ガアル。其ノ名ノ示ス如ク此處ニハ築城當初カラ橋ガアツタモノト見エル、ソレヨリ削壁ノ間ニ通ジタ鏡坂トイフ狭イ坂路ヲ上ルト時鐘樓ガアル。鏡坂ハ通行ニハ不便デアルガ、城ノ固メトシテハ實ニ重要ナモノデアツタ。時鐘樓ハモト勢籠櫓ト稱シテ居タモノデ、臼杵城ノ舊觀ヲ偲ブニ足ル隨一ノモノデアアル(圖面參照)更ニ壘壁ノ下ヲ左折シ、モトノ百段門(一名御臺所門、俗稱御臺門)ノ石燈ヲ上レバ公園ニ達スル。公園ヘノ上リ道ハ此ノ外古橋ヨリ北方ニアアル今橋ヨリ通ズルモノガアル。コノ方ハ坂ガ緩ンデアツテ、俾テ行クコトモ出來ル。

公園ニナツテ居ル所ハ舊城ノ本丸ト西丸ノ址デ、廣袤一萬八千七百〇六坪アル。周圍ニハ老樹亭々トソビエ立ツテ居ルガ、園内ハ概シテ芝生ヲナシ、種々ソ花木ガ植付ケラアル。西丸ノ址ニハ稻葉神社、招魂社ヲ始メトシテ、臼杵ノ公會堂トモ稱スベキ甘棠館ヤ、其ノ他村瀨吉義政績碑、野中蘭院記念碑、河野義教劍道記念壽表等ガアル。稻葉神社ノ前ニアル池ハ、モト稻葉侯ノ御書院ノ前庭ニアツタ其儘ノモノデアアル。

西丸ト本丸トノ境ニアアル空濠ノ中、南側ノモノハ猶昔ノママニ存シテ居ル。長サ上ハ十七間四尺、底ハ十四間二尺五寸、幅ハ上九間、底六間四尺、深サ四間五寸アル。北側ノ空濠(圖面參照)ハ長サ上ハ四十三間五尺、底ハ四十三間四尺、幅ハ上十一間五尺、底九間一尺、深サ四間五寸ノモノデアツタガ、今ハ石垣ヲ取毀チテ濠内ハ庭園式ニナツテ居ル。南北空濠ノ間即チ西丸ヨリ本丸ニ通ズル所ハ櫛形ヲナシ、石壘モ存シテ居ル。ソノ附近ニ梅ノ家トイフ茶亭ガアル。

公園ノ東端ニ出ルト脚下ニ「龜ノ首」トイフ處ガ見エル。公園カラ其處ヘ下リル口ヲ「宇土ノ口」トイフ。俗ニハ「ウドン口」ト呼バレテ居ルガ、要スルニ「宇土ノ口」トハ「卯寅口」ノ轉訛シタモノデ、舊城デハ堀手ノ口デアツタ。更ニ「龜ノ首」ノ後方ニ當ツテ湖南櫓トイフノガ殘ツテ居ル。當所ノ名利月桂寺ノ開基湖南禪師ガ、寺宇ヲ造營成ルマデ此處ニ居ラレタトイフ傳説ニヨリカク呼稱サレルノデアルトイフ。今ハ甚ダシク敗頽シテ居ルノデ何ニモ利用サレテ居ナイ。

若シ夫レ當城址ノ眺望ニ至ツテハ、南北兩面ニハ連山起伏ノ雄姿ヲ望ミ、西ハ臼杵市街ノ瓦葺粉壁ヲ一眸ニ俯瞰シ、東ハ津久見島ノ青螺手ニ取ル如ク、遙カニ豊後水道ノ彼方、豫州ヲ青髮ノ間ニ臨ムノ景勝ヲ占メテ居ル。カクシテ海ノ古城址臼杵公園ハ、史蹟以外ニ名勝ノ地トシテモ優ニ推獎スルニ足ル。

丹生島城

脇蘭室

- 壯哉丹島城 雉堞映潮明 巖氣層樓湧 鼉頭喬樹橫
- 金湯存絕險 帶礪仰昇平 况有遺風美 偏知土俗清

六 由來傳説等

築城

大友興廢記、陰德太平記、豊後國志、臼杵七島記、豊後史蹟考等ノ所記ニヨレバ、永祿六年大友宗麟初メテ丹生島ニ城ヲ築クトアル。コノ中ニ於テ臼杵七島記(天保十一年頃ノ作ト云)ハ其ノ記事最モ詳細ヲ極メ

「丹生島城ハ永祿五年十二月十五日大友義鎮長臣吉岡三河守宗觀ヲ以テ新城ヲ丹生島ニ築カント欲スル旨ヲ將軍義輝ニ上申シ許容アリ同六年正月大友軍師角隈越前守石宗智十兵衛光秀等繩張シ同六月成ル鎮城ノ加持ハ若宮大宮司高山鎮實之ヲ務ム八月宗麟此ニ遷ル」トアル。曰杵小鑑増補ニモ亦ホボコノ通りニ出テ居ル。然ルニ本縣郷土史ニ精通セラレテ居タ故柳井幸弘氏ハ、諸種ノ文書ヲ綜合研究ノ結果、永祿五年宗麟三十三歳ノ時築城シタモノダト論斷セラレテ居ル。之ニ從ヘバ今ヨリ三百六十一年前ノコトニナル。蓋シ宗麟ガココニ城ヲ構フルニ至ツタノハ、前年永祿四年十月十日及ビ十月二十六日ノ兩度大友氏ハ毛利氏ト門司ニ於テ戰ヒ、大友軍ハ戰遂ニ利ナク十一月五日退却ヲ始メタガ、更ニ毛利軍ノ追撃ヲ受ケ豊前中津郡（今ノ京都郡）國分寺原ニ於テ大敗シタノガ大原因ヲナシテ居ル。ソレハ當時府内ニハ館ガアルバカリデ城郭ガナカッタカラ、萬一敵ガ寄セ來タ場合ニハ防禦ニ困ル所ガアツタ。然ルニ丹生島ハ「四面峭壁斬然トシテ削ルガ如ク、湖水之ヲ圍繞シ、湟池穿タズシテ深ク、石壁築カズシテ堅ク」實ニ天險ノ要害ニ富ミ「諸民ノ勞役ヲ要スルモノ少クシテ、經營ノ功速カニ成ル」便宜ガアリ、且ツ又當時曰杵ニハ外國船ノ來ルコトガ多カッタノデ、宗麟ガ最モ熱心シテ居タ貿易上ノ關係カラモ、ココニ築城スルヲ便利トシタノデアアル。併シコンナ内情ガ毛利方ニ洩レテハ都合ガワルイノデ、或ハ宗麟ハ莫迦ニナツタトカ、或ハ神經衰弱ヲ越シタカラ丹生島ニ隱退シタトカ流言シタトイフコトデアアル。宗麟ガコノ年（永祿五年）五月朔日薙髮シテ休菴宗麟ト號シタノモ、大イニ理由ノアツタコトト言ハネバナラス。

規模

宗麟築城當時ノ規模ニ就テハ、曰杵七島記ニ「城ノ東西凡二百五十間、南北七十二間」ト簡單ニ見エ、豐薩軍記ニハ「抑モ此ノ丹生島トイヒケルハ陸地ヲ離レテ西ヨリ東ヘ突出シ屏巖四方ニ巡リ其ノ高キコト或ハ十間或ハ七八間潮漲リテハ白浪巖ヲ洗ヒ雪晴レテハ明月軒ノ臺ヲ琢ク巖ノ上ニハ大木朶ヲ雙々森々トシテ自ラ楯ノ如シ追手ニハ岩石ヲ九折ニ切り通シ階切付テ陸地ヨリ通路ノ橋一條アリ搦手ハ寅卯ノ方ニシテ宇土ノ口トイヒケルニ之モ同ジク岩壁ヲ穿テ船手ノ出入自由ヲ得タリ」ト出テ居ル。又大友與廢記ニハ「丹生島之記」ト題スル左ノ文ガ載ツテ居ル。

今茲之春、國君欲新城也、相攸於州中一島、俟載之、州者何名乎、豐之後州、島者何名乎、丹生島、君者何姓乎、大友氏義鎮公也、此島地勢也、海水繞四邊、岩巒擁四面、不穿而湟地深、不壘而岩壁堅、依是所經營者多少人力也、是國君卜地於此之意、思民少勞役也、國其無地乎、古相奪也、爲之城郭甲兵以守之也城乎無之、則無禁奪也、是所以明主之智謀出人垂範後昆也、又云天時不測地利、地利不測人和也、若夫城郭雖堅、內空虛則豈禁歟、是所以暴君之嗜欲喪國取笑萬世也、今觀國君思民之意、則知此城是得地利人和者也、天時者其在一時耳、城成而命予記其事也、予感其功而於是爲記爲歌、令民歌之欲傳以樂無窮也、歌云

蕩々君惠 能遂我計 國其丕光 河帶山礪

コノ外豊後遺事ニモ「丹生島ハ四面斷崖波濤ハ其ノ根ヲ盪激シ崖上ニハ喬木天ニ參シ湧水アリ極メテ清潔ナリ島頂坦平ニシテ西ハ岩壁ヲ鑿開シテ羊腸ノ路ヲ作り此ニ橋ヲ架シテ陸地ニ通ジ東又石壁ヲ扶開シ以テ舟ニ乗ルノ便ニ供ス此ヲ宇土ノ口ト云フ九州第一ノ名城ナリ」トアルガ、以上要スルニ只丹生島ノ地形ノ雄峻ナルト、鐘坂及ビ宇土ノ口ヲ開鑿セシコトヲ記ス位ニ過ギズシテ、所謂鎮西第一ノ名城ヲ叙スルモノトシテハ甚ダ物足ラヌ次第デアル。鼈城沿革史（明治廿四年若林永興氏記）ニヨレバ、築城後三十八年ヲ隔ツル慶長五年十一月、稻葉貞通曰杵ニ封セラレ、其ノ臣加納兵一郎、石丸權兵衛、那波木工允、河村久七、工藤衛門太郎等先發シテ來リ、當城ヲ井伊直政ノ家臣安間孕石ノ二士ヨリ受クルトキ、城中三十一櫓七櫓門ヲ受授ストアリ、又其ノ後五十四年ヲ經ル承應三年七月ニハ稻葉信通ガ天守臺ヲ修繕シタトイフコトガ記サレテ居ルガ、カクノ如ク櫓閣ガ整備シタノハ果シテイツデアルカハ明カデナイ。

廢城前ニ於ケル曰杵城ノ規模ニ就テハ、天保年中稻葉幾通ノ時改修ヲ加ヘタ當時調査シタモノガアル。ソレニヨレバ城内ノ總坪六町六段一畝二十六步七朱八厘、東西二百三十六間、南北五十六間、城中ノ櫓三十四、外郭六、外櫓臺七、天守臺ハ四層ニテ高サ軒下マデ六間一尺トアル。本文ノ初ニ添附シテアル曰杵城圖面ノ寫眞ハ嘉永四年九月稻葉觀通ノ時仕替ヲシタ城内ノ繪圖デ、天保年間ノモノデハナイガ、先ヅ之ニ依テ其ノ一斑ハ窺ハレルト思フ。コノ繪圖ニ記入シテアル所ニヨレバ、東西ノ長サ古橋門ヨリ本丸外側塀マデ二百四十九間二尺、南北ノ幅ハ中央ニ於テ七十一間三尺、本丸ニ於テハ六十七間三尺、西口ニ於テハ五十四間四尺トアル。

曰杵城ハ初メ丹生島城ト稱シテ居タガ、島ノ形狀恰モ龜ガ水ニ遊ンデ居ルヤウデアルトテ、龜城ト名ヅケラレタトイフ傳説ガアル。然シ當城ニ就イテ更ニ面白イコトハ、石垣ノ石ニ文字ガ彫込マレテ居ルトイフコトデアル。コレハ明治十一年二月當所ノ春藤倚松トイフ人ガ發見サレタトイフコトデ、春藤氏ハ之ヲ竹簡ニ模刻シテ「丹生島城跡石壁所在古文字」ト題シ、扁額ニシテ稻葉神社ノ拜殿ニ奉納シテアル。乃チ左記ノ如キモノデアル。

ㄗ × ㄗ ⊙ □ △ ㄐ キ ㄨ 大

人ニヨツテハ之ヲ歌文字トモ稱シテ居ル。コレガ彫込マレテアルトイフ石ハ、空濠及ビ其ノ附近ノ石垣ニ多イ。添附ノ寫眞ニヨツテ大体知ラレル通り、H × △ 十 ○ ノ類ハ確カニ認メラレ、又其ノ數モ多イ。大サハ石ノ大小ニヨリ異ルガ、最大ノモノハ徑一尺五寸ニ及ブノガアル。或人ハ之ヲ英文字デアルト説キ、又人ニヨツテハ何かノ符號デアラウト見ルモアル。其ノ何レデアルカハ猶大イニ研究ヲ要スルト思フ。

城 主

城 主	年 代	期 間	租 額	備 考
大友氏	自永祿五年 至文祿二年	三十二年		宗麟、義統二代間

福原直高	自文祿二年 至慶長二年	五年	六萬石	直高ハ又長堯ニ作ル
太田一吉	自慶長四年十月 至慶長五年十月	三年	初三萬五千石 後七萬五千石	一吉ハ一ニ政信又重正一正ニ作ル
稻葉氏	自慶長五年十月 至明治四年七月	二百七十二年	四萬六千石	貞通ヨリ久通マデ六世

城史

大友宗麟ハ築城以來コ、ニ在城スルコト二十六年、即チ其ノ後半生ハ全クコ、デ送ツタ譯デアアル。ソノ間、内ニ於テハ軍國經營ノ策源地トシテ、外ニ對シテハ西歐文化輸入ノ門戸トシテ、當城ガ如何ニ内外ニ重キヲ爲シ、偉觀ヲ呈シテ居タラウカ、想ヒ見ルダニ壯快ノ情ガ湧ク。彼ノ「江海ニ濱スル處、船艦城底ニ相連ル」トイフ句ノ如キハ、當年ノ我ガ丹生島城ニモ適用サレ得ルト思フ。サレバ宗麟時代ニ於ケル當城ノ事蹟ニ就テハ、録スベキモノガ少クナイ。其ノ中デ最モ著名ナコトハ、天正四年ノ夏葡萄牙ヨリ傳來シタ石火矢即チ破羅漢砲ヲ當城ニ備ヘ附ケ、宗麟ハ之ニ國崩ト命名シテ非常ニ珍重シテ居タガ、後十年ヲ經テ、天正十四年十二月五日薩軍當城ヘ來襲ノ砌大イニ其ノ威力ヲ發揮シ、薩軍ヲシテ遂ニ退却セシメタコトデアアル。コノ時來襲シタ薩軍ハ、島津家久配下ノ部將白濱重政、野村文綱二將ノ率ユルモノデアツタ。豐薩軍記ニ其ノ戰況ヲ記スコト左ノ如クデアアル。

白濱周防守野村備中守兩人ニ騎士百五十雜兵共ニ二千餘人ヲ與ヘ差向ケラレケレバ同五日ニ丹生島ヘ到ツテ平清水ニ陣ヲ取り鬼居島マデ詰寄スル。元來壓ヘノ爲ノミナレバ岩陰木陰ヲ楯トシテ控ヘ居タル計リナリ。爰ニ町架ノ傍ニ柳ノ大木鬱然ト糸ヲ亂シテアリケルヲ前ニ當テツ、其陰ニ大軍並居テ城ノ形勢ヲ窺ヒ居タル折節、先年南蠻國ヨリ渡リタル國崩トイフ大震電雷城中ニアリケルヲ、宗麟武宮武藏守親實トイヒケル勇士其長ケ八尺力量諸人ニ勝レタル者ヲ召シテ汝是ヲ仕リ彼等ニ膽ヲ潰サセヨトアリケレバ命ニ應ジテ藥ヲ込ムルコト一貫目大玉ノ外ニ兩五六錢目ノ小玉ヲ量ツテ二升込メ追手ヨリ三町四五反バカリト勸ヘテ彼ノ石火矢ヲ放チカクルニ名ニシ負フ國崩ノ鳴リ渡ル其響山ニ徹リ海ニ應ヘテ夥シク柳ノ一ノ枝ヨリ上ヲズント打切ツテ群リ居タル勢ノ上ニ落チカカリケル程ニ是ニ壓サレ死スルノミナラズ大小ノ飛玉ニ當リ許多亡ビ失セニケリ。

又城中ヨリ臼杵鎮尙、柴田禮能等ハ出撃シ、禮能及ビ其ノ子十郎ノ父子ハ遂ニ戰死シタ。更ニ豐府紀聞ニ「コノ時薩州ノ大將強力精兵ヲ撰ビ丹生島ニ向ツテ遠矢ヲ射セシム、海上ヲ射渡スコト三町餘ニシテ城外ノ岩壁ニ中リ碎ケ散ル。義鎮之ヲ見テ歸シ矢ヲ射セシメント欲シ城中強弓ノ武士ヲ求ム、日田郡住高瀬兵部丞永次之ヲ命ゼラレテ上箭ノ鏑ヲ賜フ。永次件ノ鏑矢ヲ打番ヒ陸ニ向ツテ之ヲ射ル、鏑音鳴リ響キ海上ヲ射渡シ磯涯ニ群レ居タル薩州勢ノ上ヲ射越シタリ、宗麟大イニ喜ビ乃チ備後守鎮次ト改メテ名ヲ賜ヒテ恩賞アリトアルハ、此ノ戰ニ於ケルエピソードト稱スベキデアラウ。之ヲ臼杵城第一次ノ戰トス。

第二次ノ戰ハ慶長五年十月朔日岡城主中川秀成ガ此處ニ攻メ來タ折ノコトデアアル。時ニコ、ニ在城シテ居タ

ノハ太田一吉及び其子一成デアツタ。蓋シ一吉ハ前年十月マデ當城主デアツタガ、朝鮮役ノ際私曲アツタトノ故ヲ以ツテ徳川家康ノ爲ニ没邑サレタノデ、深ク家康ニ衝ム所ガアツタ。ソコデ此ノ年石田三成ガ事ヲ舉グルニ及ビテハ早速之ニ黨シ、以テ復邑ヲ謀ラント見兵千五百ヲ以テ本城ヲ嬰守シテ居タノデアアル。從ツテ一吉ハヨク衆ヲ督シテ堅守防戦シ、秀成ノ兵ヲ殺傷スルコトガ少クナカッタ。此ニ於テ秀成ハ城中ニ使ヲ遣シテ三成ノ關ヶ原デ敗レタコトヲ報ジテ開城ヲ勸メタ。然ルニ一吉ハ秀成ニ城ヲ致スヲ耻ジテ、黒田如水ガ出馬シ來タナラバ命ヲ拜セント返答シタ。仍テ秀成ハコノコトヲ當時東國東郡富來城攻圍中デアツタ如水ニ通牒シタ。其ノ結果十月四日如水ノ甥黒田吉兵衛政成ガ一隊ヲ率ヒテ白杵ニ來リ、當城ヲ收メテ事平定シタ。次デ稻葉氏城主トナツテ以後ハ、徳川太平ノ世トテ前記ノ如キ大事件ハナカッタ。然シナガラ城郭ヲ修補スルコトハ屢々アツタ。白杵城主トシテノ稻葉氏初代貞通ハ、入城ノ翌年即チ慶長六年ニ城内ノ黒金門外ニ新堀ヲ掘リ、古橋ニ櫓門ヲ建テタ。同十三年春貞通ノ子典通ノ時ニハ二之丸櫓下ニ今橋ヲ架設シタ。降ツテ承應三年六月信通ノ時大イニ城壘ヲ修メ、濠ヲ浚ヘ土圍ヲ築キ、七月天守臺ヲ修理シタ。更ニ延寶二年五月景通ノ時ニハ、從來本丸ニアツタ館舎ヲ二之丸ニ移轉シ、翌年六月ニ至ツテ其ノ工事落成シタ。勢籠櫓ヲ漏刻所ト定メタノモ亦コノ時デアアル。然ルニ寶曆十三年四月十六日泰通ノ時、城下祇園洲ヨリ火ヲ發シ、遂ニ城内マデモ延焼シタ。而モ再築ノ時期容易ニ來ラズ、漸クニシテ西丸館舎ノ普請竣工シタノハ天明五年弘通ノ時デアツタ。其ノ後天保年中幾通ノ時大イニ城郭ニ改修ヲ加ヘラレ、以テ明治維新ニ及ンダ。

廢藩後明治六年城ヲ毀チテ公園トスルコトニナツタ。永祿五年大友宗麟築城以來年所ヲ經ルコト爰ニ三百十一年ニシテ城廢トナツタ譯デアアル。カクテ現存ノ勢籠湖南二櫓以外ノ樓櫓並ニ館舎ハ、明治十二年ノ頃マデニ盡ク取除ケラレ、其ノ跡ニ新ニ稻葉神社ヲ創建シテ、稻葉氏歴代ノ靈ヲ祀リ、又公園トシテノ風致ヲ添フル爲メ花卉數十種ヲ植エ込ンダ。而シテ今日ノ如キ公園トシテノ施設ヲ見ルニ至ツタハ、明治二十年十一月稻葉氏始祖一鐵公三百年祭執行ニ際シ、大イニ人工ヲ加ヘテヨリ以後ノコトデアアル。





中津城址

一 所在地

下毛郡中津町大字二ノ丁一、二七八番

二 地目

公園地

三 地積

二、四六〇坪

四 管理者

中津町長

五 現狀

中津城址ハ中津町ノ西北部山國河畔ニ在ツテ、舊本丸ハ今中津公園トナツテ居ル。公園ノ周圍ニハ本丸外周ノ石垣及ビ城樓ノ石壘ガ存シテ居ル。マタ東ト南ノ外側ニハ、内濠ノ一部モ残ツテ居ル。北側ニモモト薬研堀ガアツタガ、今ハ埋立テラレテ縣立高等女學校ノ敷地内ニナツテ居ル。西側ハ直チニ山國川ノ分流ニ臨ンデ居ルノデ、川ガ即チ天然ノ濠ヲナシテ居ル。公園ノ東入口ハモトノ椎木門（寫眞參照）デ、コ、ガ本丸ノ

表口デアツタ。磊々タル石壁、塙上ノ縁樹ト相俟チテ、今猶ホ舊時ノ偉觀ヲ留メテ居ル。西入口ハモトノ水門デ、一ニ不淨門トモ稱シ、藩士ハ多クコ、カラ登城シテ居タトイフ。南ノ入口ハ舊城當時ニハ無カツタモノデ、公園トナツテカラ新ニ設ケラレタモノデアル。

園内ニハ北方稍々高キ所即チモト本丸上段ノ跡ニ、縣社三所神社（舊藩主居館ノ址）神宮奉齋所、城井神社等相並ビ、別ニ北ノ橋址ニハ金比羅神社ガアル。上段ヨリ南方低キ所即チモト本丸下段ノ跡ニハ、村社中津神社（舊松ノ御殿及ビ焔硝倉ノ址）齊進館、獨立自尊碑、大久保慶山先生碑等ガアル。中津神社ノ前庭ノ邊ハ舊藩廳ノ大廣間ノアツタ處デ、鳥居ノ邊ガ略々玄關ニ當ルダラウトイフ。更ニ泉水ノ南方ニアル小丘ハ舊時ニハ「お風呂屋」ト稱シ、物凄イ程ノ深林ガアツタ。彼ノ宇都宮鎮房ガ黒田長政ニ誘殺サレタノハ此處デアルトノ傳説ガアル。又泉水ノ東側ニハ家老ノ詰所ガアツタトイフコトデアル。

公園外ニ於ケル舊城ノ遺迹トシテハ、高等女學校ノ裏ニ北門、南部小學校ノ一角ニ大手門、片端町ノ西端ニ近ク西門ノ各石垣ガ存シテ居ル。殊ニ西門ノ左側ノ石垣ニハ「慶長十三八月」トイフ六字ガ鏤刻サレテ居ルガ、之ハ築城ニ於ケル一記録ト認メラレルモノデアル。又三ノ丁ノ和田豊治氏別邸内ニハ、本丸ノ水門ガ舊時ノマ、ニ保存サレテ居ル。コノ門ハ廢城ノ際一旦或ル人ノ私有ニ歸シタガ、後更ニ扇城女學校ニ移サレテ久シク其ノ校門トナツテ居タ。然ルニ同校ハ本年他ニ校舎ヲ新築シテ移轉シタ結果、マタモ賣却サレテ和田氏ノ有ニ歸スルニ至ツタノデアル。和田氏ハ此ノ門ヲ邸内ニ移スニ當リ、公園西入口ニ殘ツテ居タ此ノ門ノ

礎石ヲモ同時ニ買收サレテ邸内ニ運ビ、モトノ礎石ノ上ニ建テラレタトイフコトデアル。洵ニ史蹟保存ノ意義ヲヨク實現サレテ居ル次第デ、我々ハ其ノオ蔭ニヨツテ、今日猶ホ此ノ古イ門ヲ見ルコトガ出來ルノデアル。而モコノ水門ハ管ニ中津城ノ一城門トシテ價值アルノミデナク、頗ル古キ由緒ノアルモノデアル。聞ク所ニヨレバ當初コノ門ハ中津町ノ對岸築上郡小犬丸村ノ廣津城ニアツタガ、黒田如水ノ時之ヲ中津城ニ移シタモノデアルトノコトデアル。殊ニ其ノ棟木ニハ「天慶」ノ年號ガ記サレテアリ、又瓦ニモ凡ソ七百年前ノ年號（何トイフ年號デアツタカハ忘レラレタトイフ）及ビ「友枝之住人何々」ノ記銘ガアツタトイフコトデアル。只憾ムラクバ其ノ棟木ノ片材モ記銘ノ瓦モ今デハ共ニ行方知レヌコトデアル。然シ今保存サレテ居ル門ニ於テモ、猶其ノ粗樸岩乘ナ作りニヨツテ、古キ來歴ヲ偲ブニ足リルノデアアル。

## 六 由來傳説等

### 築城

中津城ハ吉野朝時代中津江太郎判官孝範トイフ人ノ居城タリシ丸山城ノ故址ダト傳ヘラレル。天正十五年（今ヨリ三百三十六年前）七月黒田如水（孝高）中津ニ封ゼラレタガ、豊前志ニヨレバ如水ハ翌年正月カラ此處ニ築城シ始メタトアル。中津川軍記ニハ「孝高始メ入廣津城、夫ヨリ中津川仁大扇城ヲ築玉フ時、中津川ノ街人伊豫屋彌右衛門トイフ者ノ宅ヲ御宿ニテ、六七八月ニ御普請ナリ」トアル。然シ何年ノコトカ明デナイガ、先ヅ天正十六年頃カト想像サレル。按ズルニ如水ハ是年二月豊臣秀吉ノ命ヲ受ケテ肥後ニ赴キ、中津

ニハ子ノ長政ガ留守シテ居タ。而モコノ留守中ニ彼ノ宇都宮鎮房誘殺事件ノ如キガアツタ。是等ノ點カラ見ルト、後説ノ方ガ或ハ當ツテ居ルカト思ハレル。又中津記ニ「如水公、犬丸城主犬丸越中守清俊ヲ滅シ、其城ヲ毀テ取リ中津城ヲ修造ス」トアルガ、此ノ事ハモト水門ノ棟札ニモ記サレテアツタトイフコトデアアル。之ニヨツテ察スルニ、如水ノ中津城經營ハ築城トイフヨリハ寧ロ修造ノ方デ、ツマリ從來ノ丸山城ニ修理ヲ加ヘタ程度ノモノデアツタラシイ。サレバ後十餘年ヲ經テ天下大動亂ノ兆アルヤ、如水ハ大イニ思フ所アツテ春來中津ニ歸休シ、荐リニ城池ヲ修メタ如キモ、城郭トシテ當時マダ立派ナ設備ガ出來テ居ナカッタ爲メト見ユル。然シ是年七月十七日大阪黒田邸ノ留守居栗山四郎右衛門利安ヨリ急使到着シテ、石田三成舉兵ノ注進ニ接スルヤ、如水ハ即日令シテ城池ノ修繕ヲ停メ、直チニ出動ノ準備ニ着手シタトイフコトデアアルカラ如水ノ中津城經營モ之デ以テ中斷サレタ譯デアアル。要スルニ黒田氏時代ノ中津城ハ、彼ノ閑居草庵記（奥村閑齋ノ隨筆）ニ「如水公天正十三年ヨリ慶長五年マデ總テ十六年中津ニ在リテ、城カキアゲバカリニテ、土手ニ松ナド植エ置カレシ由申シ傳フル」トアル如ク、所謂掻キ上グ許リノ小規模ナ城デアツタト思ハレルノデアアル。從ツテ石垣原軍記ニ如水豊後陣之時、勘定奉行楳原一茶トイフ者ヲ召シテ「天守ニ積置ク所ノ金銀ヲ皆取出シテ奉行人ニ與ヘ施スベシ」ト曰ハレタコトニヨツテ、當時天守ガアツタヤウニ見エルガ、之ニ就テハ藤田敬所ガ既ニ「天守ノコト恐クバ櫓ノ誤ナラン」ト云ハレテ居ル。蓋シ當ヲ得タ説デアラウ。

今日猶ホ舊觀ヲ存シテ居ル中津城ハ、主トシテ細川忠興（三齋）ノ築ク所デ、元和元年秋ニ竣成シタトイフ

コトデアアル。傳フル所ニヨレバ、細川氏ハ慶長五年十一月豊前及ビ豊後ノ國東杵築地方ヲ領シ、忠興ハ小倉ニ、子忠利ハ中津ニ居タガ、同九年忠興家ヲ讓リテ中津ニ隱居シ、忠利ハ小倉ニ移ツタ。（細川氏系譜便覽ニヨレバ、忠興ハ實ハ慶長五年七月十七日大阪玉造ノ館ニ於テ自殺シタガ、表面ニ於テハ此年十二月二十六日中津城ニ入り、翌六年閏六月隱居シ、正保二年十二月二日薨去トナツテ居ル）而シテ三齋ハ中津城ノ規模甚ダ小ナルヲ見テ、之ガ擴張ニ志シ、遂ニ夫ヲ發シテ築城ノ工ヲ起シタトイフコトデアアル。然シ其ノ起工年月ハ果シテイツデアツタカハ不明デアアル。又竣工ハ元和元年秋トアルガ、西門ノ石垣ニ鏤刻サレテ居ル「慶長十三八月」ノ文字ハ、築城工事ノ一通リ竣成シタ時期ノ記年カト推測サレルノデ、或ハ此ノ頃即チ慶長十三年（熊本城竣成ノ翌年）八月竣工ヲ告ゲタモノデアアルマイカトモ思フ。

## 規 模

細川氏築ク所ノ中津城ハ御年譜外傳ニ「中津御城内總坪數二萬千八百二坪、内五千五坪本丸、五千四百四十四坪二之丸、右之内六百四十一坪内堀、一萬一千三百五十七坪三之丸、此之内八百四十坪内堀」ト出テ居ル。又其ノ外郭ニ就テハ中津稱呼考ニ次ノ如ク記サレテ居ル。

當城之南義氏墓北西一郭門、門下深溝通海潮一橋成矣、子祝口子祝橋云、自子祝口南二百四五十步而高三石壁栽群木、又西一郭門廣津口云、自廣津口溝壁當東南一干步可繼南一郭門金谷口云、自金谷口備壁東一千三百步可繼東一郭門島田口云、自島田口溝壁當東北三千步、可繼東一郭

門 堀 瀨 口 云、自 堀 瀨 口 溝 壁 北 二 三 百 步 可 至 大 塚 山 又 東 一 郭 門 大 塚 口 云、壁 上 總 裁 群 木 外 郭 定 而 六 門 成 矣

本書ニ添附セル寫眞「舊中津城繪圖」ハ、廢城前ノモノデアアルガ、之ニ就テ尙補説スレバ、牙城ニハ椎木門、水門、鐵門ノ三門アリ、外城ニハ大手門、黒門、櫻木門、北門及ビ西門ノ五門ガアツテ、池溝内外城ノ周圍ヲ繞ツテ居ル。又牙城ニハ本丸上段ト本丸下段トガアル。上段ニハ藩主ノ殿舎ガアリ、下段ニハ藩廳ガ置カレテ居タ。尙ホ中津城ヲ一ニ扇城ト稱スルハ、城地ガ扇ノ形ニ似テ居ル故ダトイフ。遮莫德川昇平ノ世、本縣隨一ノ大藩タル中津城下ハ「城郭影浮春浦月、絃歌聲隱暮洲煙、昇平有象君看取、處々柳蔭繫買船」ト彼ノ廣瀬淡窓ガ福岡城ヲ詠ジタ詩ニ髣髴シタモノガアツタヤウニ思ハレテ、微吟シツ、城墟ヲ低回スレバ、ソノ懐古ノ情ニ禁ヘザルモノガアル。

城 主

城 主	年 代	期 間	租 額	備 考
黒 田 氏	自天正十五年七月 至慶長五年十月	十 四 年	十 八 萬 石	孝高長政二代間
細 川 氏	自慶長五年二月 至寛永九年十月	三 十 三 年	三 十 萬 石	忠興忠利二代間
小 笠 原 氏	自寛永九年十二月 至元祿十一年	六 十 七 年	八 萬 石	長次、長勝、長胤三代間

小 笠 原 氏	自元祿十一年 至享保元年九月	十 九 年	四 萬 石	長圓長莖二代間
奥 平 氏	自享保二年二月 至明治四年七月	百 五 十 五 年	十 萬 石	昌春ヨリ昌邁マデ九代間

城 史

黒田氏時代ニ於テ當城ノ事蹟中主アコトハ前來屢々記シタ宇都宮鎮房誘殺事件デアラウ。鎮房ハ築城郡城井谷ノ豪族デ、黒田如水封ニ就クニ及ビテモ敢テ之ニ屈下シナカッタ。如水ノ子長政年壯氣鋭、一蹴以テ之ヲ殲滅セント欲シ、如水ニ告グズシテ其ノ居城馬ヶ岳城ヨリ軍ヲ進メ、天正十五年十月九日城井谷ヲ攻メタガ却ツテ擊退サレル所トナツク。然シ黒田方ニハ毛利、吉川、小早川等ノ援軍加ハリテ、城井ノ孤城到底保ツニ由ナキニ至ツタノデ、鎮房ハ十二月人質ヲ出シテ黒田氏ニ降ツタ。カクテ翌十六年春、如水肥後ニ赴キテ不在ノ節、長政ハ中津ニ留守シテ居タガ、前年城井谷敗衄ノ恨猶ホ消エナイ上ニ、鎮房ガ未ダ中津ニ來觀セザル不遜ノ態度ニ怒ヲ發シ、終ニ節會ニ託シテ鎮房ヲ城内ニ召致シテ之ヲ暗殺シ、全ク宇都宮氏ヲ滅シテシマッタ。宇都宮系圖ニハ之ヲ天正十七年四月二十二日ノコト、記サレテアルガ、爰ニハ福本日南氏ノ考證ニ從ツテ置ク。今公園内ニアル城井神社ハ鎮房ノ靈ヲ祀ツタモノデ、黒田氏時代ヨリ城内ニ建テラレテ居タトイフ。

黒田氏在城ノ末期ニ當ツテハ、慶長庚子ノ役ニ關聯シテ、中津城ハ東九州ニ於ケル東軍側ノ策源地デアツ

タ。而シテ如水が先づ附近ノ西軍黨ヲ征服セント、豊後路ニ向ツテ中津城ヲ發シタノハ是年九月九日恰モ重陽ノ佳節デアツタ。

細川氏時代ニ於テハ、築城以外ニハ別ニ記スベキ事項モ見當ラヌ。次デ小笠原氏ノ治世ニハ、長胤ノ時「貞享丙寅年三月二十六日城中上壇ノ櫓回祿、元祿二己巳年正月江戸へ上達シテ、城内回祿ノ櫓新ニ造作ス、惣奉行大老犬甘半左衛門」ト中津記ニ見エテ居ル如キ城櫓ノ火災ト其ノ普請ノコトガアツタ。然ルニ小笠原氏ハ長嶋享保元年九月六日卒スルニ及ビ、繼嗣ナキ爲メ十月二日城地ヲ沒收セラレタ。ソコデ翌年正月七日岡藩主中川久忠ハ幕命ニヨツテ中津城請取ノ爲ニ來リ、同二十四日射禮ヲ以テ之ヲ請取ツタ。仍テ久忠ハ其ノ老臣中川求馬ニ六百五十ノ兵ヲ附シテ城番トシ、中津城ヲ守備セシメタ。併シ間モナク奥平昌春中津ニ封セラレテ、是年十月コ、ニ入城シタ。

奥平氏時代ニハ昌春ノ時元文二年十一月朔日本丸西櫓ヨリ火ヲ失シ、其ノ貯藏スル所ノ焰硝爆發シテ、足輕仲間ノ斃死スルモノ六人、其ノ他多數ノ負傷者ヲ出シタ格事モアツタガ、又城郭ヲ修理シタコトモ屢々アツタ當時ニ於テハ城ノ修理ハ固ヨリ、單ニ堀浚ヲスルニ就テモ一々幕府ノ許可ヲ要シタモノデ、享和二年六月堀浚ニ關シ左ノ如キ記録ガ殘ツテ居ル。

豊前國中津城堀浚之覺

一、本丸西南之方大手脇堀續西門迄堀壹ヶ所

此處二百三間餘幅八間

一、金谷口ヨリ島田口迄堀壹ヶ所

此處長二百四十六間餘幅七間程

一、島田口ヨリ蠣瀬口迄堀壹ヶ所

此處長四百九十六間餘幅五間ヨリ四間内外

一、蠣瀬口ヨリ大塚口川手前迄堀壹ヶ所

此處百八間餘幅七間程

右之通堀年々埋候付朱引之塲所以連々浚申付度奉存候依之以繪圖面奉願候以上

享和二壬戌年六月

奥平 大膳 大夫 花 押

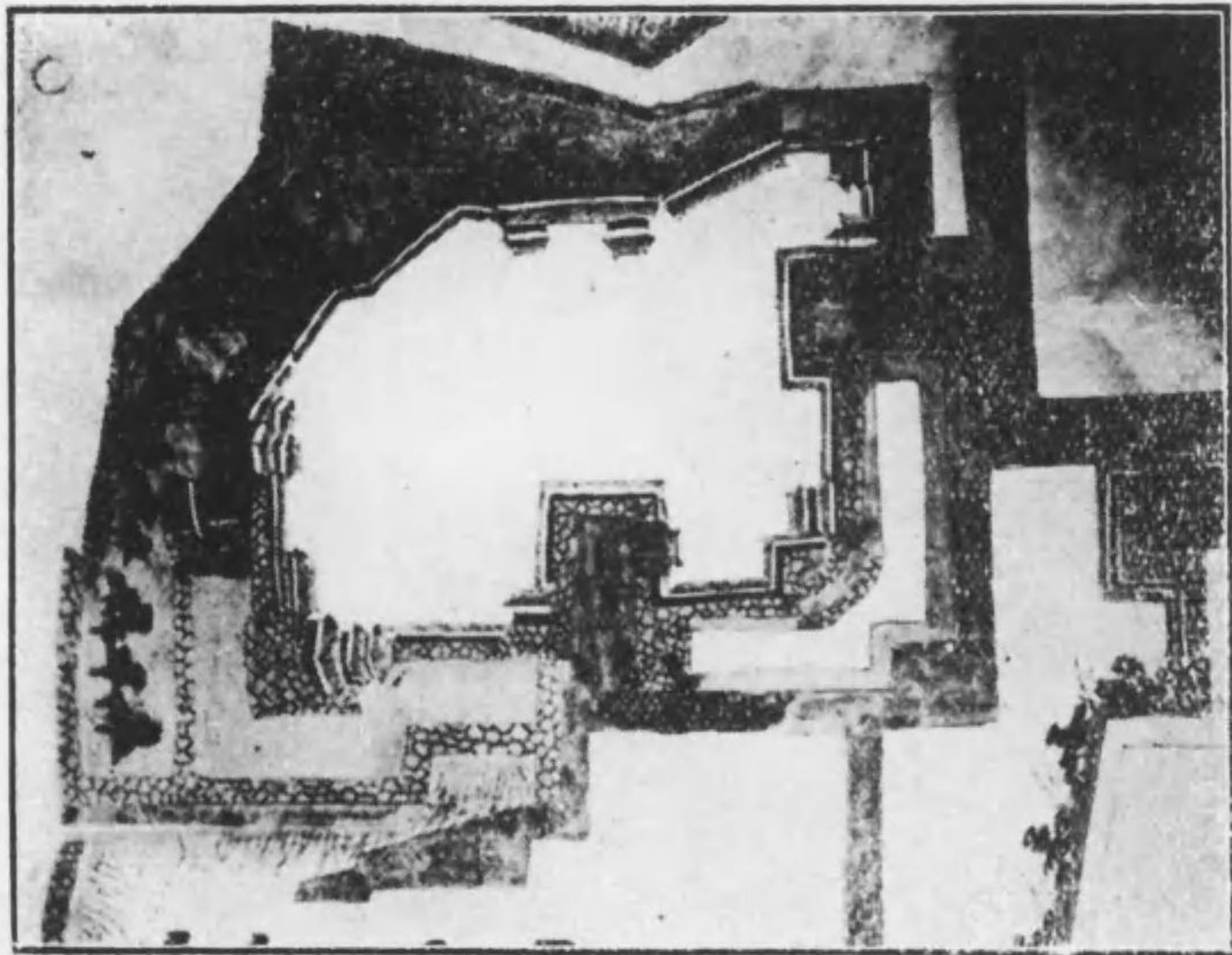
降ツテ文久三年八月ニハ本丸下段今ノ中津神社ノアル處ニ、新タニ松之御殿トイフノガ建テラレタ。然シ又明治二年十月二十六日ノ夜ニハ、平田喜四郎トイフ者ノ放火ニヨツテ、西門ニ近キ器械櫓ガ燒失モシタ。カクテ明治四年七月奥平昌邁ノ時廢藩置縣トナツタノデアアルガ、黒田如水ノ築城後コ、ニ至ルマデ二百八十餘年ニ及ブ。

廢藩後城内舊藩廳ヲ以テ縣ノ支廳（明治四年十一月十四日小倉縣、同九年四月十八日福岡縣、同年八月三十

櫓 茅 淺 城 出 日 舊



圖 繪 城 出 日 舊



一日大分縣トシテ居タガ、明治十年三月三十一日ノ夜、中津ノ志士増田宗太郎等俄ニ蜂起シテ之ヲ襲フト  
其ノ黨百二十餘名、官吏界田讓ヲ殺シ、銃器彈藥類ヲ奪ツテ、遂ニ火ヲ放ツテ支廳ヲ燒イタ。城影コレヨリ  
次第ニ衰へ、遂ニ明治十二年三月公園トナスニ至ツタノデアアル。

日出城址

一 所在地

速見郡日出町字二ノ丸

二 地目

校地

三 地積

二、五九四坪

四 所有者

日出町

五 現狀

日出城址ハ日出町ノ南端ニアツテ、其ノ本丸ハ今小學校ノ所在地ニナツテ居ル。校地ノ東北隅ニハ、近年マデ舊城ノ浸茅櫓（麻地櫓トモ書ク寫眞參照）ガ存シテ居タガ、大正十年校舎ヲ改築スルニ際シ、校地擴張ノ爲メ取リ除ケラレ、又石垣ヤ土居ヲ毀チテ濠ヲ埋メナドシタノデ、多少原形ヲ失ハレタガ、ソレデモ北方校門ヘノ通路ノ左右ト東側トニハ、猶ホ舊城當時ノ空濠ガ残ツテ居ル。南方海ニ面スル所ニハ、天守閣ノ石垣

ヲ初メトシテ、高ク疊マレタル石壁ガ層級シテ居ル。コ、ハ城址中最モ眺望ニ富ム所デ、前面ハ別府灣ヲ隔テ、由布、鶴見、四極ノ峯巒指呼ノ間ニアリ、脚下ニハ老松影ヲ水ニ蕉シテ、所謂「潮來天地青」ノ趣ガアル。西側ノ濠ノ北半ハ埋立ラレテ、今運動場ノ一部ニナツテ居ル。然シ西ヨリ北ヘカケテノ堀端ニハ、昔ナガラノ並木松ガ立チ並ンテ居テ、廢城前ノ風趣ヲ偲ブニ足ルモノガアル。

城址ニ於テ、今講堂ノ建ツテ居ル所ハ、舊城當時大書院ノアツタ場所デアアル。講堂ノ南側ニアル蘇鐵ハ、大書院ノ庭前凡ツ二間餘ノ所ニアツタ其ノマ、ノモノデアアル。其ノ左方ニ當ツテ地面ニ漆喰ノ跡ガアルノハ泉水ノアツタ所デ、其ノ泉水ニ架ケラレテ居テ石橋ハ、今松尾寺ノ蓮池ニ移サレテ居ル。運動場ハ大半大奥ノ跡デアアル。今アル井戸モ大奥ノ井戸デアツタ。又運動場カラ海岸ヘノ降リ口ニハ、モト望海樓(初名久頼櫓)トイフノガアツタ。廢城後移サレテ、改築前ノ校舎ニ於テ久シク裁縫教室ニ用ヒラレテ居テタガ、淺茅櫓ト同時ニ取毀サレタ。西南隅ノ天守閣ノ跡ニハ、御眞影奉安殿ガ建テラレテ居ル。位置高爽ニシテ校舎ヨリ遠ク離レテ居リ、而モ由緒アル場所デアアルカラ、奉安殿ノ位置トシテハ實ニ絶好ナ地點デアアル。更ニ西側ニ開カレテ居ル小學校ノ裏門ノ上ニ當ツテ鐘樓ガアル。モト時報臺ノ櫓ガアツタ所デ、其ノ櫓ハ廢城後拂下グラレテ、今ハ學校ノ西ナル徳永武宜氏邸ノ一角ニ移ツテ居ル。

東北隅ニ永ク存シテ居テ淺茅櫓ハ、封建ノ世ノ絶好記念物トシテ當地ノ一名物デアツタガ、大正十年五月其ノ拂下グニ際シ、當町字二王ノ中村玉郎氏之ガ毀滅サレンコトヲ遺憾トシ、自ラ買收シテ自邸内ニ移シ、舊態

ノマ、ニ再築シテアル。史蹟保存上寔ニ喜ブベキコトデ、之ニヨツテ今日モ猶ホ日出城當年ノ片影ヲ偲ブコトガ出來ル。尙ホ中村氏ノ談ニヨレバ、櫓ノ瓦ニハ凡ツ百枚目毎ニ年號ト御用瓦師高橋何某ト記銘シテアツタトイフコトデアアル。

## 六 由來傳説等

### 築城

築城ニ就テハ、明和年間ニ編輯サレタモノト思ハル、日出圖跡考(二宮六郎廉善撰、今當所管今朝次氏秘藏)ニ左ノ如ク出テ居ル。

一、日出御城ハ日出庄南仁王ノ内青柳村ナリ。青柳村ノ内ニ古ヨリ森領ノ飛地アリ。又森領頭成村ノ内ニ日出城ノ飛地アリシガ、御城築ノ差支ニ成ルニ付、御双方御相談ニテ替地ニ成ルトイフ。津島村ノ覺書ニアリ(津島村ハ今豊岡町ノ内)青柳村ハ得勢名ノ田島、侍屋敷ハ得勢名又ハ日代分、如意庵分、珠昌寺密乘院分(密乘院ハ今ノ郷社若宮八幡社ノ神宮寺デアツタ。一ニ浮津寺トイフ)濱ノ百姓分、何レモ御郭内ニナルトイフ。其節青柳村ノ百姓ハ日出濱、川崎、小深江、日出村、南藤原ノ内ニ移ル。御入城後日出町出來、濱ハ古來ヨリ住居ノモノナリ。(下略)

一、舊記ニ曰、慶長六年延俊公御入國藤原村エ御住居ナリ(藤原村ノ小學校前ノ字お屋敷トイフ所ガ其ノ址デアアル)新ニ城地御收立可成旨ト意ヲ蒙リ玉ヒテ、城地ヲ御見立ニ成リ、日出城ヲ築キ玉フ。繩張ハ細



川三齋公ノヨシ。城築ノ人數モ豊前ヨリ御加勢アリトナリ。御家中ニ穴生理右衛門トイフ小知ノ士アリ石垣ヲ築クコト名人ニテ、當城ノ石垣、此人棟梁ニテ築キシナリ。野面ノ石ニテ如此キヅクコト當世ノモノ中々及難事ナリトナリ（中略）又曰鹿越左右ノ山ハ大木鬱々タル山ナリ。城築ノ節悉ク伐テ材木トナスナリ。又曰御裏御門ノ扉、富來ノ城ノ古キ扉ヲ取り來リテ用イルトイヘリ。虚實ヲ知ラズ（コノ事ハ三浦梅園ノ豊後事蹟考ニモ見エテ居ル）三重ノ御天守ハ淨英法印ノ御建破成ヲセラレシナリ。海手ノ御櫓ヲ久頼ト名付（久頼ハ一ニ休存ニ作リ、長谷川久頼トイフ金山奉行ノ指圖ニテ作ルトイフ）翌年寅八月御普請大概成就ニ付、日出城へ御徙移。（下略）

木下延俊ハ慶長六年四月コ、ニ封セラレ、同年八月入國、而シテ日出本城之圖（明治六年木版ニテ發行）ニ附記サレタル所ニヨレバ、同年暮ヨリ築城ニカ、リ、翌年八月入城サレタアル。尙ホ傳説ニヨレバ、延俊ハ築城ニ際シ前記青柳村即チ現在地ト、川崎村ノ高尾山及ビ中山香村ノ蛟尾山ノ三ヶ所ヲ候補地トシ、慎重ニ考查ノ上青柳村ニ定メタトイフコトデアル。當時青柳村ニ住シテ居タ百姓デ、築城ノ爲メ川崎村ノ小深江ニ移轉セシメラレタ者ノ中、今日ニ於テモ分明シテ居ル家ガ同所ニ猶ホ二戸アル。藤原村ノ字上林ノ上林寺モ元コ、ニアツタガ、移轉ヲ命ゼラレテ現地ニ遷リ、コレガ爲メ舊藩時代ニハ特ニ二十石ヲ附ケラレテ居タトイフ。又日出城ヲ一ニ青柳城ト稱スルハ、舊村名ニヨツタモノデアルガ、別ニ鳴谷城ノ稱モアル。コレハ書經ニアル「宅ニ蝸夷ニ曰ニ鳴谷」トイフ語（淮南子ニモ「日出ニ於鳴谷」トアル）ニトツタモノデ、第三代ノ藩

主木下俊長ノ命名ニカ、ルトイフ。

#### 規模

當城ノ規模ニ就テハ、日出小學校ニ藏スル舊城ノ繪圖（寫眞參照）ニヨツテ其ノ大体ヲ窺フノ外ニハ、別ニ何ノ記録モナイ。コノ繪圖ハ明治三十八年古圖ニヨツテ作ツタモノデアル。尤モ當地ノ人加藤賢成ノ著豊後遺事ニハ「此城南海ニ臨ミ石壁峭絶、西北ニ方平坦、北ニ三重ノ深濠アリ、東ニ碑海アリ、日出港ト稱ス。城ノ周圍ハ石垣高ク疊ミ、雉堞偏ヲ繞リ、形勢雄壯、險要頗ムベシ。」トアルガ、コレハ日出城ノ全郭即チ主トシテ今ノ日出町ノ形勢ヲ叙シテ居ルニ過ギナイ。

#### 城主

慶長七年木下延俊築城ヨリ、明治四年ノ廢藩ニ至ルマデ、木下氏世々コ、ニ治ス。租額二萬五千石（當初ハ三萬石）延俊ヨリ延應マデ十六代三百七十年ニ及ブ。

#### 城史

豊後國志ニ「日出城在大神郷、一曰青柳城、又曰浮津城、建武中大神仙助始城于此、其孫常陸介鎮正據之、天正十四年島津義久來攻、戰敗城陷、其子紀伊守統氏力戰而死、鎮正弟鎮氏代立、文祿二年大友氏國除、大神氏併亡、慶長六年木下右衛門佐延俊自播之姫路移封于此、後修舊營世居焉」トアルガ、青柳城ト浮津城トハ同一ノモノデハナイ。浮津城ハ今當町ノ郷社若宮八幡社ノアタリニ構ヘラレテ居タノデアル。青柳城ハ前

記ノ通り木下延俊ガ入封後新ニ地ヲ相シテ初メテ經營シタモノデ、全ク別個ノ城デアル。從ツテ上記國志ノ記事ハ、青柳城ノ事蹟トシテ掲グベキ限リテナイ。

然シナガラ青柳城ノ城史トシテハ、餘リ記スベキモノモナイ。只菅今朝次氏所藏ノ文書ニヨレバ、正徳三年(二三七三)本丸南側海手ノ石垣ガ、高サ六尺横十五間許リ崩壊シタノデ、七月廿九日修復願ヲ月寄老中秋元但馬守宛ニ差出シ、八月九日許可ヲ得テ此ノ年修理シタコトガアル。コノ他ニ於テハ、同地大塚安燿氏方ニ保存サル、望海樓ノ棟札ニヨツテ、久噸櫓ダケノ沿革ニ就キ多少窺ヒ得ルノミデアル。コノ棟札ハ天保三年(二四九二)五月十六日望海樓改築落成ノ時ノモノデ、其ノ裏面ニ左ノ如ク記サレテ居ル。

一、是迄之鳴之嘴ニ萬治三年庚子十一月廿一日久トシ御矢クラ御トリ付カケ戸ツキアケホウ六本ノ内之ノ通彫付有之

右ノ通認有之

一、南ノ方懸魚裏ニ寛保二壬戌歲御修復有之萬治三年ハ八拾三歳ニ成ル大工頭雇高橋傳右衛門

一、寶曆年中頃は迄御天井モ疊モ無之ヲ假ニ御天井張疊鋪被仰付望海樓ノ字ヲ焉石江被仰付額ニ成南ニ掛ル依而望海樓ト被號

御大名方ノ御詩作御額ニ被遊東ノ方江掛ル

一、天保三年壬辰五月十四日御改造ノ節御天井是迄太蘭ノ處當時太蘭無之故板ニ相成且柱八本土産ノ分ハ是

迄ノ品雜木故宜ニ付御用ニ相成

一、此節坂本市郎右衛門楠原又助御奉行被仰付候譯ハ此度御普請ニ付御物入ハ渾而御山方手先物差出候ニ付被仰付候事板井壹兵衛玉井惣右衛門御人割ニ而御城内ハ渾而懸ノ儀故先年御天守御普請ニハ壹人被仰付候ヘドモ此節ハ兩人被仰付候時ノ御評議ノ事

因ニコノ文中ニアル望海樓ノ額ハ、今日デハ速見郡朝日村鐵輪ノ加藤稱司氏方ニ所藏サレテ居ル。尙ホ彼ノ淺茅櫓ハ慶長築城當時ノモノデハナクテ、今ヨリ凡ソ百年前頃ノ建築ニカ、ルト傳ヘラレル。明治四年廢城トナリ、同六年大部分ハ取毀サレタ。只望海樓ハ移シテ修補シ小學校舎トシテ使用サレ、岳陽樓(淺茅櫓ノコト)ハ舊城ノ記念トシテ殘サレテ居タガ、共ニ大正十年五月取拂ハレテシマツタ。

(以上久多雜木委員報告)

一名稱

夷露ノ仙郷

二所在地

西國東郡三重村大字夷

三 地目

山林

四 地積

二十四町步

五 所有者ノ住所氏名

三重村野田真臣外六十二名

六 所有者ノ外管理者若クハ占有者アルトキハ其住所氏名

所有主各自ニ之ヲ管理シ他ニ占有者無シ

七 工作物其他ノ物件ノ物質形狀構造大小數量

全谿ノ地域南北二十町餘東西ハ廣狹一ナラズ廣キ所十町餘ニ亘リ狹キケ所二三町許トス峡谷ノ中央ニ道路通  
シ西國東郡香々地町ヨリ本村ヲ經テ一道ノ淵流峽麓ヲ流ル原ヲ黒木山及金ヶ崎ニ發シ夷谿ヲ下峡谷二十餘町  
東國東郡上伊美村ニ至ルノ縣道  
ノ間東北兩側ニ對峙セル岡嶺ハ大小無數ノ奇石怪巖ヲ聯ネ高低參差布置配合ノ趣致化工鬼匠ノ靈妙ヲ極メ青  
松綠樹其間ニ簇生シテ秀絶ノ風致ヲ補ケ至竟ノ景光眞ニ仙郷ノ名稱ニ背クモノナシ

八 現狀

縣道ヲ進ミテ北端ノ谿口ニ到レバ清流ニ架シタル優雅ノ一石橋アリ之ヲ過グレバ自カラ仙郷ニ入ルノ思ヒア

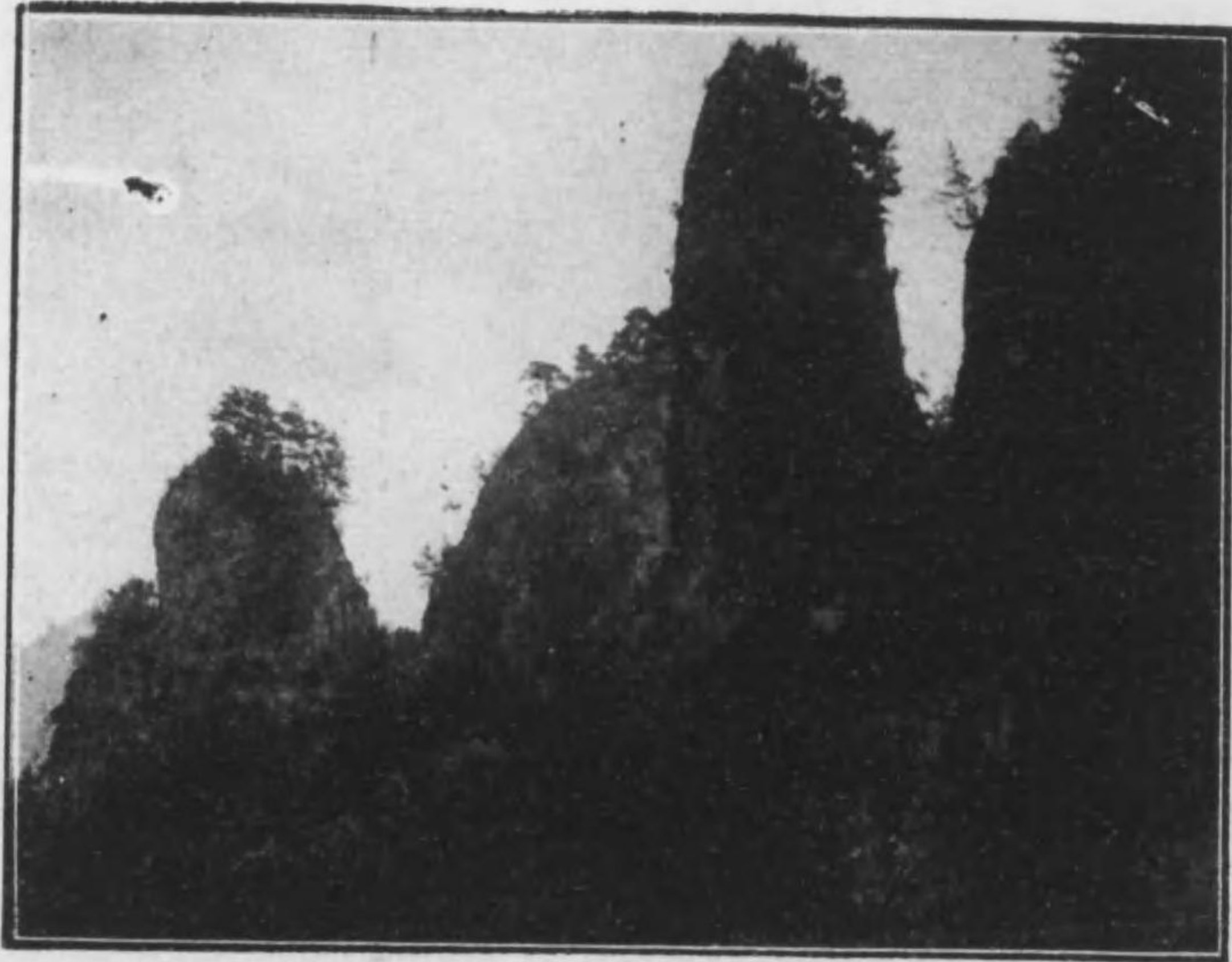
九 由來傳説等

リ行クコト數十步ニシテ左方ノ道側ニ沿ヒ靈仙寺實相院六所神社等ノ古刹舊社アリ境域全然人寰ヲ脱離シ一  
毫ノ俗氣ヲ留ルモノナシ

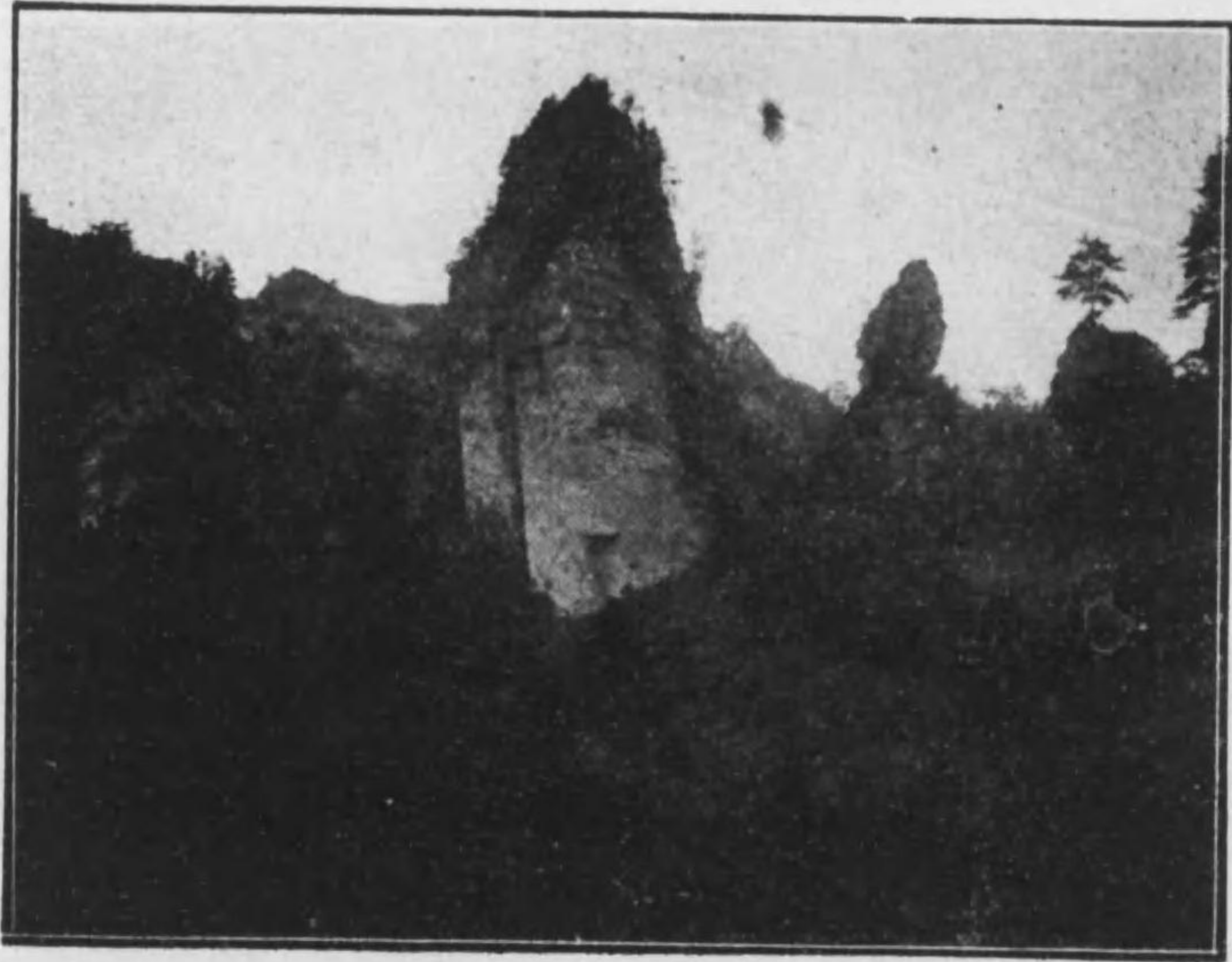
傳エ云上古少彦名ノ神ヲ祭祀セル社殿此谿間ニ在リエビスノ稱謂此ニ起因スト又云釋ノ仁聞竺漢ニ遊ビテ佛  
法ヲ修メ歸朝後養老初年國東ニ遊化シテ靈場二十八所ヲ開闢スルニ方リ夷谿ノ景勝ヲ相シテ雄大ノ梵宮ヲ創  
始スルモノ今ノ靈仙寺ナリ而シテ谿域中佛緣ヲ有スルノ故址到ル所ニ存在スルヨリ推ストキハ本峡谷ハ古來  
至淨ノ道場トシテ秘法練習ノ靈地タリシナラント

(以上佐藤委員報告)

夷谿ノ仙郷



夷谿ノ仙郷



一 名 稱

ベスブ石

二 所在地

大分縣大野郡小野市村大字木浦字犬流

三 地 目

山 林

四 所有者

官 林

五 現 狀

犬流ハ木浦ヲ巨ル南方約二里餘、藤河内川ノ上流ニアリ、石灰岩ト之レニ迸發セル花崗岩トヨリナリ、ベス  
 ブ石ハ其兩岩ノ接觸變質ニヨリテ成生セルモノニシテ石灰岩中ニ柘榴石ト共生ス、本鑛石ハ黑色——濃褐色  
 ニシテ正方晶系ノ四角柱狀ノ結晶ヲナシ數多ノ錐面ヲ有スル美晶ナリ、結晶ノ稍大ナルモノ長徑二分ニ達ス  
 點々トシテ石灰岩中ニ介在シ稍々帶狀ヲ呈ス、帶ハ上下ニ走リ十數間、帶ノ幅約二間ナリ、以テソノ成因ヲ  
 考察スルニ適ス

本鑛石發見以來自由ニ採集セシメタル結果現時美晶ノ露出スルモノ稀レニシテ且ツ採集スルニ甚ダ困難ナル母岩ニ之ヲ有スルニ過ギス、殆ンド從來ノ如キ美晶ハ其地ニ於テ採集不可能ノ状態ニアリ、タダ周圍ノ状態ヨリ考察スルニ或ル方法ヲ以テ母岩ノ一部ヲ破壞シ包有状態ヲ研究セバ美晶ヲ有スル母岩ヲ露出セシメ得テ其儘之ヲ保存スルコトヲ得バ大ニ價値アルモノナリ。

六 指定ノ事由

本鑛石ハ甚ダ稀有鑛物ノ一ニシテ近江五別所ニ產地ヲ有スルモ美晶ナラズ、本邦トシテ犬流ハ美晶ノ唯一產地ナリ。

一名 稱

大藏谷舊坑

二 所在地

大野郡長谷川村大字尾平

三 地 目

山 林

四 所有者

尾平共有

五 現 狀

舊坑ニシテ數箇所ノ坑口ヲ有シ母岩及捨石内ニ數多ノ鑛石ヲ保有シ採集ノ好適地ナルノミナラズ、古生層粘板岩ノ接觸鑛物トシテ成生セル幅七尺ニ達スル帶狀ノ鑛脈ヲ有シ鑛脈ノ状態ヲ研究スルニ甚ダ模式的ナリ。産出スル鑛石ノ主ナルモノ、斧石（黑色、完全ナル美晶ニハ面ノ明瞭ナルモノアリ）螢石（甚ダ豊富ニシテ透明無色又ハ桃色ナルアリ）磁黃鉄鑛（多量、捨石ニテハ表面黒變スレトモ中心ハ帶黃白色ナリ）柘榴石、陽起石、磁鉄鑛、石灰鉄輝石等トス、就中石灰鉄輝石（ヘデンバージャイト）ハ柱狀結晶ヲナシ方解石中ニ完全ナル美晶ヲ有ス。

六 保存ノ事由

鑛物研究者ノ好研究所ニシテ現状ノ儘保存スヘキモノナリ

以上（山本委員報告）  
（宮崎委員報告）

一名 稱

大 饅

二 所在地

南海部郡番匠川上流小半、下流上岡及堅田川南越

三 現 狀

番匠川、堅田川所々ニ設ケタル井手ニ使用セル打杭ノ下部ニ生ゼル洞穴内ニ生棲スルヲ普通トシ之ヲ河水ノ  
涸渴セシ時期ニ於テ往々餌釣ニテ捕獲ス、大ナルハ体長四尺余、体重三貫匁前後ニ達ス、現時保存セラレタ  
ル大分縣立佐伯中學校保存標本ハソノ一ニシテ大正六年三月廿四日番匠川ノ下流ニテ捕獲セルモノナリト云  
フ、實測左ノ如シ体長三尺七寸三分(尾鱗ヲ別トス)頭長五寸七分(鰓蓋ノ後縁マデ)体高約三寸四分、胴  
周圍一尺九分

一 名 稱

大 鰻

二 所在地

北海部郡青江村ゴマガラ山麓下ノ石灰洞

三 現 狀

ゴマガラ山麓下ヲ貫通セル石灰洞ハ所々ニ決潰又ハ陥落ヲ生ジ所謂淵ヲ形成ス、牛淵、雄龍淵、雌龍淵、洞  
ノ口、竹山淵、櫻ヶ瀬等コレナリ、コレ等共通ノ洞窟ニシテ水深概シテ大、水ノ涸渴スルコトナシ、  
生棲スル動物ニハ大鰻、鰻、イダ、フナ、テナガエビアリ、從來捕獲セラレタルモノ左表ノ如シ

捕獲場所	時	重 量	深 集 者
洞ノ口	明治十三、四年頃	四、五〇〇貫位	仲 野 岩
櫻ヶ瀬	明治三十四年	不 明	那 波 逸 治
全	明治三十七年	三、〇〇位	野 田 清 茂
竹山淵	明治四十年	一、二〇〇位	宗 俊 正
洞ノ口	明治四十一年	二、六〇〇位	井 水 金 次 郎
櫻ヶ瀬	明治四十二年	一、五〇〇位	全 人
洞ノ口	明治四十三年	二、五〇〇位	古 谷 正 五 郎
洞ノ口	明治四十四年	二、五〇〇位	井 水 金 次 郎
雄龍淵	大正四年	一、八〇〇位	石 井 總 吉
全	全	三、五〇〇位	全 人
岩屈川(下流)	大正八年	二、五〇〇位	津久見町姓不詳(見世物トナス)

小園川(下流) 大正十年

一、三〇〇位

大分セメント會社職工、田北松美

櫻ヶ瀬 大正十年

一、五〇〇位

佐藤新吉

全 大正十一年

一、〇〇位

同人

以上採集者ノ明瞭ナルモノ十四尾ナルモ迷信ニヨリテ捕獲セルモ今日マデ秘シ居ルモノ、五六尾アリト云フ最近洞ノ口及雄龍淵ニテ捕獲ノ企テヲ旋シアリシ所本年十月約三百位ノ鰻ヲ捕獲セリ

#### 四 保存ノ事由

一、大鰻ハ本縣ヨリ南方暖地ニ於テハ所々ニ産地アレモ九州ニ於ケル分布トシテ最北端ノ限界ナラシ

二、青江村石灰洞内ノ大鰻ハ時期ヲ得レバ捕獲シ得ルコト困難ナラザルヲ信ズ捕獲後ハ同洞穴内ニ簡單ナル設備ヲ以テ之ヲ永久ニ飼育シ得テ隨時之ヲ觀察シ得ルノ好適ノ場所ヲ有ス

(以上宮崎委員報告)

南院内村全圖



山椒魚





一名稱

山椒魚

二產地

驛館川上流ニシテ確定セル產地二箇所アリ、一ツハ南院内村ニ於テ同川上流ナル余川、他ノ一ハ速見郡上村ニ於テ同川上流ナル大唐川トス

三最近ノ產品

- 1、余川産一尾 之ハ大正十二年 月 日農商務省技師山子 氏及縣水産試験場技手 氏ガ調査ノ際採集セルモノニシテ体長 胴圍 アリ、目下縣水産試験場ニテ飼育中ナリ
- 2、大唐川一尾、之ハ大正十二年八月三十一日宇佐郡安心院村居住榎藤百藏、了戒精市外七名ガ速見郡上村大唐川柿ノ木ダブト稱スル驛館川上流ニ於テ捕獲セシモノニシテ余ノ實測シタル体長三尺三寸(全長)胴圍一尺三寸二分ナリ、實ニ本縣產品トシテハ稀有ノ逸品ナリ、實物ハ捕獲者ニ於テ飼育中ナリ

(寫眞參照)

四從來ノ狀態

- 1、宇佐郡南院内村余川ト稱スル驛館川支流ニ山椒魚ヲ産スルコトハ全村及近村居住者ノ仲間ニ久シキ以前

ヨリ知ラレタルコトニシテ殊ニ食用トシテ食用ニ供セラレタル結果現時少ナカラズ捕獲セラレタル模様ナリ、最近捕獲困難トナリ且ツ体長著シク倭小ナルハ蓋獲ノ結果ナリトテ同村ニ於テハ已ニ余川ノ一部ニ禁漁區指定ヲ申請中ナリト言フ現時ドジョウ、アブラメ、カヘル等ノ動物性ノ食餌ヲ以テ餌釣ヲナスカ、又ハハヘコミト稱スル方法ニヨリ採集スルコトヲ得ト雖体長一尺五寸以上ノモノハ殆ンド絶望トノコトナリ

2、今回速見郡上村ニ山椒魚ヲ産シタルコトハ豫想外ノ事實ニシテ一新産地ニハ相違アキモ之レヲ採集者及附近ノ住民ニ糺シタルニ從來此地ニ於テ生育シタルモノナルカ甚ダ疑問トスル點多クアリ、即チ採集アレタル現品外ニ生育スル模様ナキコト、十數年前南院内村ニ於テ捕獲シ之ヲ此地ニ於テ逸出シタリトノ噂ヲ存スルヲ以テ見レバ或ハ今回捕獲セシモノガソノ逸出シタリト云フ同物ニ非ラザルカ、然ラバ大唐川ヲ新産地ト認ムルニハ甚ダ躊躇セザルヲ得ザルナリ、暫ク時期ヲ俟チテ産地ナルカ否カヲ確メタシマ思フ、今回ノ採集者ノ言ニヨレバ最近偶然ニモ同所ニ於テ大山椒魚ノ浮ビタルヲ認メタル人アルヲ聞キ數里ノ山道ヲ踏破シ漸クニシテ捕獲シタルモノナリト

### 五 参考トナルベキ事項

山椒魚分布區域ガ本邦最南端ニ属ストスレバ南院内村余川ノ棲息區域ハ當然天然記念物トシテ保護保存ノ方法ヲ講ズベキモノナリ、當地附近ニ於テ近來眞ノ價値ヲ知ラザルモノガ徒ラニ稀有ナル價値アル産物視シテ

蓋獲セントスル傾向アルハ明瞭ナル事實ニシテ大唐川ノ山椒魚ノ捕獲ガ少ナカラザル費用ヲ惜マズシテ捕獲セラレタルガ如キ其ノ傾向ヲ示スモノナリトス。

(以上宮崎委員報告)

## 天然紀念物中名木ノ調査

### 梅 (臥龍梅)

大分郡吉野村大字杉原字山口天滿社

目通周圍五尺 樹高拾五尺 樹齡七百年

現況 附近數十本ノ梅樹ハ一株ヨリ岐レタルモノト稱ス其ノ形狀恰モ臥龍ノ如シ

傳説 建久三年堀川御所騒動ノ砌藤原近信都ヲ退キ此ノ芳野ノ里ニ住居スルコト多年ナリ其ノ子近里ト申スモノアリ若年ナガラ父母ニ孝ニ能ク神佛ニ歸依シ就中天滿社ヲ拜スルコト餘年ナカリシガ、或日採薪ノ際誤ツテ右脛ヲ打折リ遂ニ蹇トナリ之ガ爲杖ニスガリテ筑前國大宰府ニ參詣シ七日間ノ斷食シテ足平癒ヲ祈願セシニ或夜間眠中ニ汝ハ孝心深キモノナレバ平癒ヲ許スベシ此ハ吾當ニ愛スル所ノ梅ナリ此ノ一枝ヲ汝ニ授ク間早ク故知ニ守歸リ之レヲ朝夕拜シテ天滿宮ト思フベシト斯クテ夢忽チ覺メタリ、枕ノ下ニ一枝ノ梅花爛熳トシテ咲揃ヒタルモノアリ之ハ夢中ニ賜ハリタルモノト歡喜

限リナク早速梅枝ヲ紙ニ包ミ持歸リ芳野ノ里ニ地ヲ選ビ植ヘタルモノナリト而シテ梅ノ枝ヲ紙包ノ儘植ヘタル爲左ニ捨レタリト云フ

樟

大分郡戸次町大字下戸次八幡社

目通周圍二四尺 樹高六〇尺 樹齡千年

傳説不詳

杉  
(星降杉)

大分郡竹中村大字竹中妙見寺

目通周圍一九尺 高一二四尺 樹齡千二百年

傳説 文化元年此樹ニ星下リシヨリ名付クト法道仙人此所ニ妙見大士請祈ス

樟

大分郡種田村大字玉澤八幡社

目通周圍五〇尺 高五〇尺 樹齡八百年

傳説 鎮西八郎爲朝九州總追捕使トシテ九州ニ在ルトキ此所ニ一社ヲ創立シ記念トシテ植ヘタリト云フ

松  
(新五郎松)

大分郡種田村大字上宗方字道園

目通周圍一五尺 樹高九〇尺 樹齡三百年

傳説 筑前地方ヨリ武藝ノ達人岩田新五郎來リ此所ニテ死亡シタルヲ以テ同所ニ埋葬シ其ノ記標トシテ植ヘタルモノナリト云フ

樟

速見郡日出町字濱

目通周圍三二尺 樹高八八尺 樹齡七百年

傳説 傳説不詳日出圖跡考ニ次ノ如キ記事アリ

御船倉ノ側ニ大ナル楠ノ古木アリ其ノ木ニ大ナル洞アリ其ノ内ニ地藏尊ヲ安置ス石体ニ木体一ツアリ其ノ一休ハ宗行村藤次郎祭主ナリ御船藏ノ内ヨリ掘出シタル佛体ナリト云フ而シテ之ノ地藏尊ハ俗ニ楠地藏ト稱ヘ七月二十四日ヲ以テ例祭トス  
舊曆盆會ノ節トシテ附近ノ男女群集シテ盆踊ヲ催ス

蘇 鉄

速見郡日出町松屋寺

目通周圍一六尺 樹高二三尺 樹齡三百餘年

東西四〇尺 南北三五尺

現況 現今大枝三十九本小枝七十六本ニシテ其ノ大サ彼ノ有名ナル伊豆龍華寺ノ蘇鐵ノ比ニアラズ

傳説 文祿年間大閣秀吉朝鮮征伐ノ節大友義統ノ持歸リ植ヘタルモノト云フ

松 (鐘懸ノ松)

速見郡石垣村大字南立石

目通周圍一三尺 樹高四〇尺 樹齡六百年

傳説 慶長五年大友、黒田、石垣原合戦ノ時大友軍大鐘ヲ此松ニ懸ケ打鳴シ士氣ヲ鼓舞セシト云フ

樟

速見郡石垣村大字南立石

目通周圍二一尺 樹高六〇尺 樹齡一千年

傳説 樟ノ大樹アリシ所深殿ナル地ヲ選ビ天神社ヲ祭リ神木トス

棕 (鉾殿ノ棕)

速見郡石垣村大字南立石

目通周圍二一尺 樹高一三〇尺 樹齡一千年

傳説 共時字佐八幡宮ヨリ鉾ヲ持歸リ之ヲ祭リシ所ノ名木ナリ

杉

速見郡北由布村大字川上宇奈日女神社

目通周圍二七尺 樹高一二〇尺 樹齡八百年

傳説 不詳ナルモ永久五年播付ケタルモノナリト云フ

松 (腹切松)

北海道郡臼杵町大字海添星見寺

目通周圍一五尺 樹高九〇尺 樹齡三百年

傳説 寛永十八年稻葉公逝去セシトキ家老松藤一郎右衛門此ノ松ノ下ニ殉死ス依テ通稱腹切松ト云フ

松

北海道郡川添村宮河内字阿蘇入阿蘇神社

目通周圍一五尺 樹高六〇尺 樹齡三百年

傳 說 熊本縣阿蘇神社ヨリ一體ノ神体石船ニ乘リ來リ留マリシ所ニ記念トシテ植エシモノナリト云フ

松 (飛彈守手植松)

北海部郡曰杵町大字福良天滿社

目通周圍九尺 樹高七二尺 樹齡四百年

傳 說 大友飛彈守手植ノ松ナリト稱ス

松

北海部郡坂ノ市町大字木田字久木田神社

目通周圍九尺 樹高六〇尺 樹齡二百五十年

傳 說 舊熊本藩主參勤交代ニ際シ記念ノ爲メ植栽セシモノナリト云フ

公孫樹

北海部郡川添村大字廣内圓通寺

目通周圍四〇尺 樹高一八〇尺 樹齡千年

傳 說 歸化僧日羅聖人ノ植栽セシモノニシテ俗ニ乳銀杏ト稱シ歸人乳汁分泌ニ効驗著シク參詣者頗ル多ク

其ノ名高シ

櫻

(黑澤櫻)

南海部郡青山村字黑澤東光庵

目通周圍一五尺 樹高三〇尺 樹齡二百年

現 況 櫻 林

傳 說 西南ノ役谷將軍此ニ馬ヲ止メ賞セシ以來其名世間ニ著ル

杉 (御塔ノ杉)

南海部郡下堅田村大字堅田字西野

目通周圍二七尺 樹高八〇尺 樹齡五百年

傳 說 大永七年十一月佐伯薩摩守惟治ノ一子毛利千代鶴此ノ樹下ニテ自及シタルヲ以テ樹下ニ塔ヲ建テ祀

ル故ヲ以テ御塔杉又ハ千代鶴杉ノ名アリ村民之ヲ崇敬ス

高野槇

南海部郡佐伯町字城山佐伯城址

目通周圍一〇尺 樹高七〇尺 樹齡三百年

傳 說 文祿ノ役佐伯藩祖毛利高政朝鮮ヨリ持歸リシ記念樹ナリト云フ

杉

南海部郡佐伯町五所明神社

目通周圍二〇尺 樹高八〇尺 樹齡三百五十年

傳 說 慶長六年毛利高政日田ヨリ佐伯へ轉換後管内惣鎮守兼代裨ト定メラレ當時植栽セシモノト稱ス

樟

南海部郡下堅田村大字長良字壘月(長良神社)

目通周圍一五尺 樹高七五尺 樹齡五百五十年

傳 說 應永年間神殿建設ノ當時植栽セシモノナリト稱ス村民神木トシテ崇敬ス

杉

(神角寺ノ大杉)

大野郡西大野村大字鳥田、神角寺

目通周圍三〇尺 樹高一八〇尺 樹齡七百年

傳 說 正治年間京都三寶院立法日上人ノ植付ケタルモノニシテ觀音堂眞木ト稱ス

橡

木

大野郡今市村大字今市高倉神社

目通周圍二二尺 樹高二四〇尺 樹齡千年

傳 說 人皇五十五代文德天皇天安二平二月三日紀州熊野御社ノ神主少納言源表基ノ植栽シタルモノナリト

稱ス

竹

柏

大野郡百枝村大字上田原御手洗神社

目通周圍二〇尺 樹高五〇尺 樹齡一千百年餘

現 況 幹ハ中心腐朽シ空洞ヲ生ジ數人ヲ容ルニ足ル大枝五本四方ニ延ビ地ヲ覆フコト二畝歩餘

棕

木

大野郡長谷村黒松阿蘇大明神

目通周圍二〇尺 樹高四五尺 樹齡三百五十年

傳 說 大友宗麟ノ一族ヲ葬リシ際之ガ塚側ニ其ノ當時植栽シタルモノナリト傳ヘ神木トシテ崇拜セリ

杉

(十二本杉)

大野郡百枝村牟禮神社

目通周圍一七尺 樹高一〇〇尺 樹齡千二百年

現況 一株ヨリ分岐シテ十二株トナリ鬱蒼トシテ六畝歩除ノ大森林ヲ爲シ世俗之ヲ十二本杉ト稱ス先年暴

風ノ爲一樹ヲ折リ現存スルモノ十一本ナリ

傳説 天智天皇白鳳年間同社鎮座當時植栽シタルモノナリ

杉

大野郡牧口村大字三玉宇田神社

目通周圍二〇尺 樹高一二〇尺 樹齡一千年

傳説 紀元千四百七十年今ヲ去ル一千餘年前大神維基及宇田姫ヲ祀リシ古祠ニ在リ神木トシテ崇敬ス

杉

日田郡日田町大字竹田字若ノ木若宮神社

目通周圍二〇尺 樹高一三〇尺 樹齡一千年

傳説 延久年中神前ニ植付ケタルモノナリト云フ

榎

日田郡日田町竹田、竹田川原

目通周圍一〇尺 樹高七〇尺 樹齡百五十年  
明治二十三年並ニ大正十年ノ大洪水ノ節人命ヲ救助シタルコト前後五十餘名ニ及ビ神木ト稱シ年々ニ祭祀ヲ行フ

杉 (鬼杉)

日田郡大山村大字西大山烏宿神社

目通周圍一九尺 樹高一二〇尺 樹齡五百年餘

通稱 鬼杉

傳説 烏宿神社ハ應永年中ノ創設ニシテ烏宿ノ名稱ハ此ノ鬼杉ニ烏宿リタルヨリ名付ケタルモノナリト云フ

櫻 (觀音櫻)

日田郡西有田村大字西有田字蕪觀音堂内

目通周圍一二尺 樹高六〇尺 樹齡百二十年

通稱 觀音櫻又ハ蕪ノ櫻ト稱ス

本櫻ハ枝條錯出全苑ヲ蔽ヒ花時ノ候附近ノ地夜色暖々トシテ月明ノ觀アリ

樟

傳 說 此ノ觀音堂ハ天正ノ頃松林庵ト稱セリ其ノ由來ハ維天和尙ノ開山ニ係リ其ノ位牌尙存ス文政二己卯年十右衛門ナル者植木ヲ奉ル十右衛門ノ男彌兵衛 彌兵衛ノ男貞次郎三又姓ナリ蓋シ奉納ノ株枝ガ三股ニ成長セシニヨリ維新ノ際三又姓ヲ付セシト云フ

下毛郡大幡村大字大貞こも神社

目通周圍四三尺 樹高一二〇尺 樹齡千年

傳 說 不明縣社薦神社境内ニ在リ神木トシテ崇敬ス

公孫樹

下毛郡中津町裁判所構内

目通周圍二〇尺 樹高一二〇尺 樹齡八百年

傳 說 不明舊中津城内ニ在リシ長福寺ト稱スル寺院ノ跡地ナリト云フ

杉

下毛郡三郷村大字中摩村社

目通周圍二二尺 樹高一〇二尺 樹齡六百年

傳 說 不 明

杉 (二本杉)

下毛郡眞坂村大字土田

目通周圍一五尺 樹高七八尺 樹齡三百五十年

傳 說 天正年間黒田長政中津在城ノ時其ノ重臣タル後藤又兵衛基次ハ中津ヨリ陸路二里距ル土田ニ二本ノ

杉ヲ手植ヲ爲ス依テ此ノ二本ノ杉ヲ後藤手植ノ杉ト稱ス

松

下毛郡眞坂村大字土田

目通周圍一三尺 樹高六六尺 樹齡四百年

傳 說 夜鳴松ト云フ此ノ葉ヲ夜泣キノ小兒ニ煎ジテ飲マシムルトキハ全治スト往古寺地ナリシト云フ

柳

下毛郡東城井村樋田

目通周圍一五尺 樹高三〇尺 樹齡五百年

傳 說 池中ノ小島ニ在ル古木ニシテ之ヲ辨天柳ト稱ス



### 銀杏

宇佐郡南院内村大字西椎屋菅原神社

目通周圍三六尺 樹高一二〇尺 樹齡千百年

傳 說 昔時椎屋ノ瀧ニ大蛇栖ミテ附近ノ農作物ヲ荒シ大飢饉ニ當リ神ノ告アリ瀧神ヲ祭レバ其ノ害ヲ免ル  
ト依テ時ノ國司瀧神ニ祈リ其ノ害ヲ除キタリ此ノ記念トシテ天平年間近村ノ農民此ノ木ヲ植ヘ社  
ヲ建立シテ該神靈ヲ祭リタリ此ノ銀杏ニハ幹枝ニ無數ノ乳瘤ヲ生シ乳ノ出テサル婦人ハ參拜シテ乳  
瘤ノ皮ヲ採リ煎ジテ服用セバ効用 著ナリト稱シ參拜者多シ

### 松

(御神木ノ松)

宇佐郡豊川村大字上拜田一柱騰ノ宮

目通周圍九尺 樹高三六尺 樹齡五百年

傳 說 神武天皇ノ東征ノ途行幸セシ所ナリト稱ス

### 松

(來迎ノ松)

宇佐郡糸口村大字下時枝善光寺

目通周圍一三〇尺 樹高三〇尺 樹齡二百五十年

### 松

傳 說 善光寺ノ中興三十三代仙阿上人ノ植栽ニ係ルモノニシテ尙四十代清譽上人正徳四年春彼岸會中松上

ニ三尊三迎ヲ感見シタルヲ以テ世人之ヲ來迎ノ松ト稱ス

宇佐郡北馬城村大字山字姫田

目通周圍一〇尺 樹高三〇尺 樹齡二百年餘

傳 說 第三十六代用明天皇九州ヘ行幸ノ節玖珠ノ千町無田ニ於テ玉代ノ姫ト相知リ御二方ニテ北馬城村字

姫田(其當時姫田附近ハ海ナリシ由)ニ來ラレ鐵漿ヲツケ(松ノ根元ニ鐵漿ノ壺形アリ)侍女ヲ連

レ歸國ノ途中現今ノ姫島ノ附近ニテ龍宮ヨリ迎ヘ來リシ爲姫ハ龍宮ニ歸ラレ天皇ハ侍女ヲ供ヒ歸國

セラレシト尙時ノ松ハ己ニ枯死シ現今ノモノハ二代目ノモノナリト稱ス

### 松

(夜泣松)

宇佐郡四日市町大字四日市字千源寺

目通周圍一七尺 樹高七〇尺 樹齡六百年以上

傳 說 善光寺ノ開祖空也上人善光寺開基ノ節宇佐神宮ニ百日ノ日參ヲナシ其ノ往復ノ途中松ノ下ニ休息シ  
タリト云フ。嬰兒ノ夜泣スル時ハ此ノ松ノ苔又ハ葉等ヲ寢床ノ下ニ敷ケバ夜泣止ムト傳ヘラレ之レ  
ヲ夜泣松ト稱ス

松 (天道松)

東國東郡西武藏村大字富清字天道寺

目通周圍一六尺 樹高六〇尺 樹齡三百年

傳 說 豊後國崎郡富永村ナル一ツノ松ハ田邊氏ノ縁類子孫ノ榮ヲ天ニ祈ル爲メ手ヅカラ植ユル所アリ年ヲ經、世ヲ累スルニ從ヒ枝葉次第ニ繁茂シ里人此ノ地ヲ天道寺ト字シ其ノ樹ヲ天道松ト唱フ田邊氏世々相繼ギテ石ハ松ノ側ニ建テ、標トナスト云フ祖先ノ德ヲ仰グナルベシ

櫟 (見分櫟)

東國東郡竹田津町大字竹田津武多宮神社

目通周圍一七尺 樹高九〇尺 樹齡約千年

傳 說 天徳年間神社遷宮ノ記念トシテ植タルモノナリト云フ

松 (夜泣松)

東國東郡旭日村大字池ノ内字小坪

目通周圍八尺 樹高二〇尺 樹齡二百五十年

傳 說 高僧仁聞入國ノ當時始メテ安岐ニ上陸シ夜ニ入りテ此ノ地ヲ過グ偶々嬰兒ノ泣聲切ナルヲ聞ク怪シ

ミテ至リ見レバ一樹ノ下ニ一婦露宿スルアリ而シテ抱キシ嬰兒泣キテ息マス高僧見ルニ忍ビズ松ニ向ツテ讀經シ傍ヲ落葉松球等ヲ蒐メテ火ヲ點ジ其ノ光ヲ見セシニ忽チニシテ泣キ止ム尙論ス又泣クコトアラバ斯ノ如クセヨト、此レヨリ世人呼ビテ夜泣松ト稱ス  
按ズルニ高僧仁聞ハ養老前後ノ人ニシテ千餘年ノ昔ナリ當時ノ松ハ已ニ枯死シ何時ノ世カ植繼ギタルモノナルベシ

松 (三右衛門松)

西國東郡中真玉村字濱中ノ谷

目通周圍一四尺 樹高七二尺 樹齡二百五十年

傳 說 明暦二年真宗淨應寺開祭祖僧應念氏宗祖法然上人畫像ヲ申受ケ歸山スルニ方リ門徒中出迎ノ當日一同同所ニ休憩ノ際三右衛門ナル者附近ニ有合セノ松ヲ取り記念トシテ植栽セリト云フ故ニ三右衛門松ト稱ス

松 (小松ノ松)

西國東郡中真玉村字濱區沿岸

目通周圍一四尺 樹高七〇尺 樹齡七百三十年

松

傳説 小松内大臣ノ墓標・シテ植エタルヲ以テ（小松ノ松）ノ稱アリ文治元年ノ頃源平合戦平氏滅亡ノ時ニ方々漂著セル死体ヲ前記ノ箇所ニ埋葬シ墓標トシテ此ノ松ヲ植エタリト稱ス

（供養松）  
玖珠郡東飯田村大字松木田尻原  
目通周圍一〇尺 樹高五〇尺 樹齡八百年

傳説 一タ九死松ト稱ス日田代官領ト森領トノ堺木トシタルモノニシテ其ノ枝ニヨリ領域ノ分割ヲ定メタルモノナリト云フ

松

（幽林菴夫婦松）

玖珠郡東飯田村惠良字樋ノ口  
目通周圍五尺 樹高七五尺 樹齡八百年餘

傳説 幽林菴山ハ古寺ノ跡ナリト云ヒ時ニ佛具ヲ掘出ス全山ノ松ハ玖珠郡ニテ始メテ植ヘタルモノナリト稱ス現ニ郡内一ノ老松ナルベシ雌松ハ枝攢ガリ遠望龜ノ甲ニ似タリ雄松ハ稍小ニシテ龜ノ頭部ヲナス故ニ縁ノ龜トモ稱ス

梅

（梅ノ木谷老梅）

玖珠郡森町字谷ノ河内  
目通周圍八尺 樹高三〇尺 樹齡四百年  
傳説 森ヨリ北二里ニ在リ溪内梅樹十數株アリ就中臥龍梅ト稱スルハ數百年ヲ閱シタル老樹ニシテ根脚蟠屈シテ其ノ狀蛟龍ノ伏臥スルガ如シ

榿

玖珠郡萬年村塚脇船岡神社  
目通周圍二六尺 樹高四五尺 樹齡千年  
傳説 船岡神社ハ清原正高八幡宮ヲ勸請シ社殿ヲ創立シタル際社前ニ榿苗ヲ手植シタルモノト稱ス

榿

玖珠郡南山田村大字菅原  
目通周圍一八尺 樹高七五尺 樹齡千年  
傳説 菅原天滿社神木ニシテ往時菅公安安全堂ニ寓居ノ際此ノ木ノ枝ヲ以テ木像ヲ刻ミ寺像ニ贈リタルモノナリト云フ

松

（笠懸松）

玖珠郡北山田村戸畑魚返ノ瀧畔

目通周圍六尺 樹高五〇尺 樹齡不詳

傳 說 人皇六十三代冷泉院ノ時少納言清原正高罪ニヨリ本郡ニ配流セラレ北山田村矢野兼校ノ家ニ居リ醜

嗣帝ノ大子章明親王ノ姫小松女院正高ノ横笛ニ戀慕シ尋ネ來ル正高矢野兼校ノ家ニアルヲ聞キ歎キ

魚返ノ瀧ニ入水ス其ノ時持チタル笠ヲ松ニ懸ケタルヲ以テ此ノ名アリ

杉 (大友杉)

玖珠郡野上村大字野上瀧ノ上佛堂

目通周圍一〇尺 樹高六〇尺 樹齡三百五十年

傳 說 大友氏吉利支丹ヲ信仰シ其ノ結果神社佛閣ヲ燒キ棄テントスルニ當リ佛像保全ノ爲メ該地ニ一小堂

宇ヲ建立シ佛像ヲ保護セリ後大友氏ノ事治マリテ元和二年佐藤主膳亮ナルモノ現今ノ地ニ佛像ヲ安

置スルト同時ニ杉ヲ記念トシテ植栽シタルモノナリト稱ス

榎 (千人塚)

直入郡萩村大字惠良原字惠良

目通周圍一〇尺 樹高三〇尺 樹令三百年

傳 說 榎ニシテ往昔鹿兒島兵攻メ來リシ際畑中ニ高黍ノ出穂スルヲ見敵ノ鎗樹立シ居ルモノト認メ交戦ニ

力ナリ自殺セシヲ以テ千人塚ト稱スト又一說ニ菊地武義古戰場トモ云フ

杉 (二本)

直入郡岡本村大字枝、山ノ神境内

目通周圍一五尺 樹高六〇尺 樹齡三百年

傳 說 岡藩士中川(中川五代ノ孫)手植ノ杉

當山ノ神所在地三宅山ニ狩ノ節初回ニ於テ不獵ノ爲次回ニ多ク狩ノ出來ルコトヲ祈願シテ後二回目

ニ於テ大獵ナリシニ付献上セシモノナリト云フ五本アリシモ神社ノ新築用ノ爲三本伐採サレ二本ヲ

記念トシテ保存サレ居レリ

杉 (二本)

直入郡城原村大字城原縣社城原神社境内

目通周圍一五尺 樹高六〇尺 樹齡五百年

傳 說 不問ナルモ當社建設當時植栽セシモノナラン當社ハ景行天皇ヲ祭祀セシ社ナリ

大 杉

東國東郡來浦町大字來浦字宮ノ本八坂神社境内

目通周圍二〇尺 樹高一五〇尺 樹齡千年以上

傳説 杉樹ニ就テノ的確ナル傳説ナキモ該樹ハ祭神武速須佐之男尊ヲ祭レル村社八坂神社ノ境内參道口ニ

在リ遠見一樹ヲ以テ一森林ヲ形成セルノ觀アリ該樹ハ該神社ガ貞勸十八年四月大字岩戸寺字葛原ヨ

リ大字來ノ浦字宮園(一名大木本トモ稱フ)遷坐セラレシ際神威ニヨリ發生セシト稱セラル

(以上須山委員報告)

... 大木本トモ稱フ... 遷坐セラレシ際神威ニヨリ發生セシト稱セラル... 須山委員報告

終